

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

# 土 室 古 墳 群

## 発掘調査報告書

平成10年8月

名神高速道路内遺跡調査会

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

# 土 室 古 墳 群

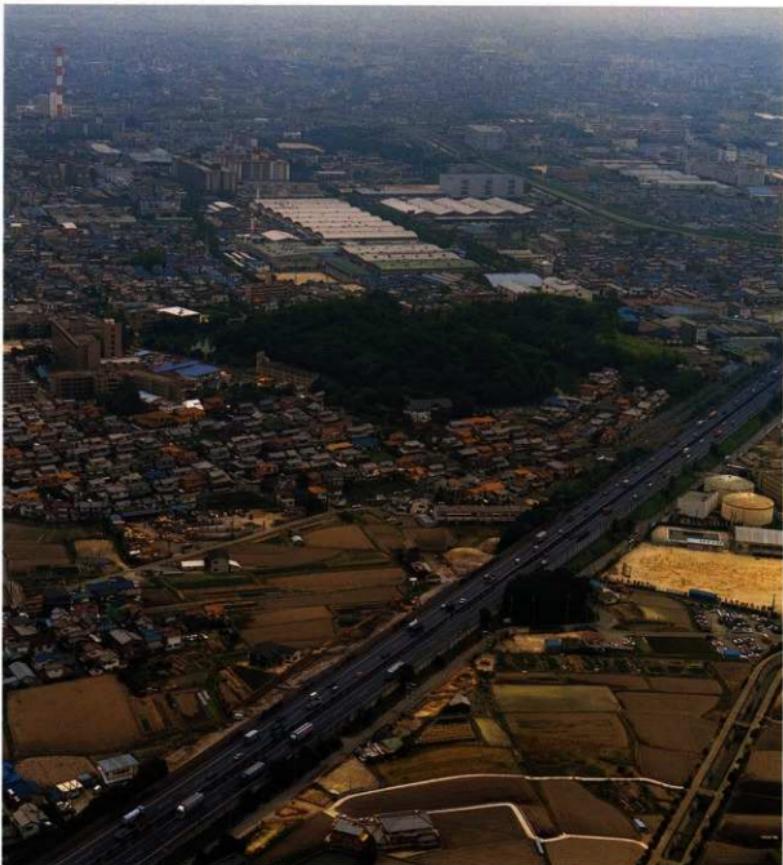
## 発 挖 調 査 報 告 書

平成10年8月

名神高速道路内遺跡調査会



塚越り古墳周溝出土の鶴形埴輪



土室古墳群周辺の航空写真

## はしがき

名神高速道路内遺跡調査会は、平成2年度の発足以来、名神高速道路拡幅工事に伴って数多くの発掘調査を手懸けてまいりました。

今回報告いたします上室（はむろ）古墳群を含む周辺一帯は三島古墳群とも称され、古市古墳群、百舌鳥古墳群とともに大阪府下を代表する著名な古墳群です。当古墳群には全長226mの前方後円墳、太田茶臼山古墳（繼体天皇陵古墳）や、種々の観点から現在、繼体天皇陵との意見が強い今城塚古墳が含まれ、この三島の地が古墳時代には重要な地域であったことが窺えます。加えて近年、新池埴輪製作遺跡の発掘調査が実施され、その成果として太田茶臼山古墳や今城塚古墳等への埴輪の供給が明らかになるなど、三島地域の古墳時代史を解明するための考古学的資料が蓄積されつつあります。

今回の調査では、昭和34年に調査が実施され、多数の武器・武具等が出土し話題を呼んだ土保山（どぼやま）古墳の外部施設の一部が明らかとなり、また、鶏形埴輪をはじめとする多数の形象埴輪が出土した塚廻り古墳を発見いたしました。これらの古墳は、三島地域における大きな歴史的画期である太田茶臼山古墳の出現と前後する時期の古墳であり、これらの古墳を造営した集団の性格を知るうえで重要な資料であると考えます。本報告書が今後の古墳時代の研究の資料として活用され、さらに、文化財の人切さを理解して頂く一助となれば幸いです。

なお、調査の実施ならびに報告書作成にあたりまして多大なるご協力とご支援をいただきました日本道路公団大阪建設局をはじめ、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、その他関係各位に対しまして、心からお礼申し上げる次第です。

平成10年8月

名神高速道路内遺跡調査会  
理事長 鹿野一美



## 緒 言

三島地域の東半分を占める高槻市は古来より淀川の水運と山陽道の陸運にささえられ、交通の要衝の地として発展を遂げてまいりました。このように東西に大きく開かれた地域で育くまれた歴史的環境を復元する作業は、一地域の歴史復元にとどまらず日本の歴史と文化を考えるうえでも大変重要であると考えます。とくに古墳時代におきましては、三島地域では大小あわせて約350基もの古墳がつくられており、その中には先頃話題となった「青龍三年」銘鏡が出土した安満宮山古墳や、眞実の繼体天皇陵と考えられる史跡今城塚古墳など全国的にも著名な古墳が含まれており、古墳時代にこの地域が果たしてきた役割が大きなものであったことが窺えます。

このたびの名神高速道路拡幅工事に伴い発掘調査が実施されました土室古墳群の周辺には、三島の首長系譜が窺える弁天山古墳群など重要な古墳が多数点在しております。

このような環境のなかにある土保山古墳につきましては、奇しくも名神高速道路建設に先立って、昭和34年に三島郷土史研究会や京都大学などを中心とする調査会によってその中心部が発掘され、竪穴式石室と粘土櫛を検出し貴重な文物が発見されております。今回の調査では、墳形が明らかになるとともに、これまで知られていなかった埴輪類が多数出土し、重要な知見が加わりました。また調査の途上において方墳を発見するに至り、あらたに塚廻り古墳と命名するなど、土室古墳群の充実ぶりが窺え、多大な成果をおさめることができました。ここにまとめました報告書が三島の古代史を解明するためにいささかでも寄与することができるならば、望外の幸せであります。

なお、このたびの調査の実施と報告書作成にあたりまして多大な御協力をいただきました日本道路公団大阪建設局、ならびに地元の方々、大阪府教育委員会をはじめとする関係機関各位に深く感謝いたします。

平成10年8月

高槻市教育委員会  
教育長 溝口重雄



## 例　　言

1. 本書は、中央自動車道西宮線（名神高速道路）拡幅工事に伴って実施した大阪府高槻市土室町に所在する土室古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会の指導のもとに、名神高速道路内遺跡調査会が実施した。
3. 調査及び報告書作成に要した費用は、日本道路公団大阪建設局が負担した。
4. 発掘調査は、川端博明、松本克恵（旧姓井上）、尾関眞二が担当し、平成6年度から平成9年度まで実施した。
5. 本書の遺構実測図に表示する方位は、國土座標第VI系に基づく座標北を示し、標高は東京湾標準潮位（T.P.+）で表示した。
6. 写真撮影については、遺構を調査担当者が、遺物を小倉 勝が担当した。
7. 出土遺物の整理及び本書の執筆・編集は川端が担当した。なお遺物の観察表は高木祐志が作成した。
8. 発掘調査から本書の刊行に至るまでに、下記の関係諸機関ならびに諸氏の御指導を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略、人名五十音順）  
文化庁、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、茨木市教育委員会、島本町教育委員会、（財）大阪府文化財調査研究センター  
秋山浩三、大野末喜、井藤 徹、鐘ヶ江一朗、高橋公一、橋本久和、原口正三、松岡良憲、宮崎康雄、免山 篤。  
特に名神高速道路内遺跡調査会の理事である小野山 節先生には全般にわたるご助言を頂きました。記して感謝申し上げます。
9. 調査の実施ならびに出土遺物の整理には、下記の方々の協力を得た。  
荒井純子、荒川忠之、池田理美、大島 歩、大島由紀、岡山雅信、奥井京子、小田恵理子、佳川記子、片木伸子、上島玲子、川地ちぐさ、河原美樹子、瓦林三千代、桐本美香、小林秀則、新谷尚美、高木祐志、立岩美津子、田淵伸治、寺岡雅弘、富成一也、内藤幸平、永田景子、橋本京子、馬 蘭、前上 一、前田千津子、前田幸美、三浦晃二、森光泰志、吉岡果名子、吉岡正二、綿田 稔。



## 本文目次

はしがき	名神高速道路内遺跡調査会理事長 鹿野一美	
緒　言	高槻市教育委員会教育長 溝口重雄	
例　言		
第Ⅰ章	位置と環境 .....	1
第1節	土室古墳群の位置と環境 .....	1
第2節	土室古墳群周辺の歴史的環境 .....	2
第Ⅱ章	調査に至る経緯 .....	5
第1節	発掘調査に至る経緯 .....	5
第2節	発掘調査の経過 .....	5
第Ⅲ章	調査の成果 .....	11
第1節	土保山古墳の調査 .....	11
第2節	二子山古墳周濠の調査 .....	27
第3節	塚廻り古墳の調査 .....	34
第4節	闘鶏山古墳群A－1号墳の調査 .....	50
第5節	古墳以外の遺構と遺物 .....	57
第6節	その他の調査地区の概要 .....	59
第Ⅳ章	総括 .....	69
第1節	土室古墳群出土の埴輪について .....	69
第2節	土室古墳群の特徴 .....	74

## 挿 図 目 次

図1 土室古墳群の位置	1
図2 高槻市の地形区分	2
図3 土室古墳群周辺の遺跡分布	3
図4 調査地区の位置1（土室古墳群）	6
図5 調査地区の位置2（閼鶏山古墳群）	7
図6 土保山古墳の調査地区の位置	13・14
図7 第2調査地区的平面・断面図	15・16
図8 第6-E・-F調査地区、第9・10調査地区的平面・断面図	17・18
図9 円筒埴輪の口縁部と突帯の分類	19
図10 朝顔形埴輪の口縁部の分類	19
図11 土保山古墳周濠出土の埴輪1（円筒埴輪）	21
図12 土保山古墳周濠出土の埴輪2（円筒埴輪）	22
図13 土保山古墳周濠出土の埴輪3（円筒埴輪）	23
図14 上保山古墳周濠出土の埴輪4（朝顔形埴輪）	24
図15 土保山古墳周濠出土の埴輪5（形象埴輪）	25
図16 上保山古墳区画溝出土の埴輪1（円筒・朝顔形埴輪）	26
図17 土保山古墳区画溝出土の埴輪2（形象埴輪）	26
図18 上保山古墳区画溝出土の埴輪と上器（形象埴輪・須恵器）	27
図19 二子山古墳周濠関連の調査地区的位置	28
図20 二子山古墳周濠（第8-A調査地区）の平面・断面図	30
図21 二子山古墳周濠（第8-B調査地区）の平面図	31・32
図22 二子山古墳周濠出土の埴輪1（円筒埴輪）	33
図23 二子山古墳周濠出土の埴輪2（朝顔形埴輪・形象埴輪）	34
図24 塚廻り古墳（第4-A・-C調査地区）の平面・断面図	35
図25 塚廻り古墳周溝出土の埴輪1（円筒埴輪）	37
図26 塚廻り古墳周溝出土の埴輪2（円筒埴輪）	38
図27 塚廻り古墳周溝出土の埴輪3（円筒埴輪）	39
図28 塚廻り古墳周溝出土の埴輪4（円筒・朝顔形埴輪）	40
図29 塚廻り古墳周溝出土の埴輪5（朝顔形埴輪）	41

図30 塚廻り古墳周溝出土の埴輪6（朝顔形埴輪）	42
図31 塚廻り古墳周溝出土の埴輪7（形象埴輪）	43
図32 塚廻り古墳周溝出土の埴輪8（形象埴輪）	45
図33 塚廻り古墳周溝出土の埴輪9（形象埴輪）	46
図34 塚廻り古墳周溝出土の埴輪10（形象埴輪）	48
図35 塚廻り古墳周溝出土の埴輪11（形象埴輪）	49
図36 塚廻り古墳周溝出土の土器	50
図37 關鶴山古墳群A調査地区の平面図	51・52
図38 關鶴山古墳群A調査地区の断面図	53
図39 關鶴山古墳群A-1号墳の石室	54
図40 關鶴山古墳群A-1号墳石室出土の土器	55
図41 關鶴山古墳群A-1号墳石室出土の装身具	56
図42 第6-E調査地区発見の土壤出土の土器	56
図43 第6-E調査地区発見の土壤の平面・断面図	57
図44 第9調査地区発見の土器棺墓の平面・断面図	58
図45 第9調査地区発見の土器棺	58
図46 第3調査地区的溝出土の土器	59
図47 第3調査地区的平面・断面図	60
図48 第3調査地区西南端の溝の平面・断面図	61
図49 第1調査地区的平面・断面図	62
図50 第4-B調査地区的平面・断面図	63
図51 第6調査地区の基本層序	64
図52 第6-A・-B調査地区的平面図	65
図53 第6-C調査地区的平面図	66
図54 第6-D調査地区的平面図	66
図55 第6-G調査地区的平面図	67
図56 第7-A調査地区的平面・断面図	67
図57 土室古墳群と新池埴輪窯の位置	69
図58 新池埴輪製作遺跡の遺構全体図	70
図59 円筒埴輪の口縁部の形状による出土頻度	72
図60 円筒埴輪の突帯の形状による出土頻度	72
図61 円筒埴輪の口縁部の形状による出土頻度の比較	73

図62 円筒埴輪の突帯の形状による出土頻度の比較	73
図63 太田茶臼山古墳出土の円筒埴輪のヘラ記号	75

## 表 目 次

表1 発掘調査工程の一覧	10
表2 円筒埴輪の口縁部の形状別数量表	72
表3 円筒埴輪の突帯の形状別数量表	72
表4 各古墳の一覧	76
埴輪観察表1 土保山古墳周濠—円筒埴輪・朝顔形埴輪	77・78
埴輪観察表2 土保山古墳周濠—形象埴輪	79
埴輪観察表3 土保山古墳区画溝—円筒埴輪・朝顔形埴輪	79
埴輪観察表4 土保山古墳区画溝—形象埴輪	79
埴輪観察表5 二子山古墳周濠—円筒埴輪・朝顔形埴輪	80
埴輪観察表6 二子山古墳周濠—形象埴輪	80
埴輪観察表7 塚廻り古墳周溝—円筒埴輪・朝顔形埴輪	81～83
埴輪観察表8 塚廻り古墳周溝—形象埴輪	84
土器観察表1 土保山古墳・塚廻り古墳	85
土器観察表2 関鷺山古墳群A—1号墳石室	85・86
土器観察表3 土壙、土器棺、溝	86

## 図 版 目 次

	参照頁
卷頭図版1 塚廻り古墳周溝出土の鶏形埴輪	42～49
卷頭図版2 土室古墳群周辺の航空写真	1～4
図版1 土保山古墳（第2調査地区）	6・11～19
上　　全景1（北東から）	13～16
下　　全景2（南西から）	13～16

図版2	土保山古墳（第2調査地区）周濠	11~19
	上 完掘状況1（南西から）	11~16
	中 完掘状況2（南西から）	11~16
	下 蓋形埴輪の出土状況（南西から）	11~16
図版3	土保山古墳（第2調査地区）	6・11~19
	上 左 周濠の完掘状況の近景（東から）	11~16
	右 区画溝の完掘状況（南から）	11~16
	中 区画溝の完掘状況の近景（南から）	11~16
	下 区画溝の断面（南から）	11~16
図版4	土保山古墳（第6-E・-F調査地区）	6・11~14・17~19
	上 第6-E調査地区的全景（南東から）	11~14・17~19
	下 第6-F調査地区的全景（南西から）	11~14・17~19
図版5	土保山古墳（第9・10調査地区）	6・11~14・17~19
	上 全景1（北東から）	11~14・17~19
	下 全景2（南西から）	11~14・17~19
図版6	土保山古墳（第6-F調査地区）	6・11~14・17~19
	上 左 区画溝の遺物の出土状況1（東から）	11~14・17~19
	右 区画溝の遺物の出土状況2（西から）	11~14・17~19
	中 左 区画溝の遺物の出土状況3（南から）	11~14・17~19
	右 区画溝の遺物の出土状況4（北から）	11~14・17~19
	下 左 区画溝の遺物の出土状況5（西から）	11~14・17~19
	右 区画溝の完掘状況（東から）	11~14・17~19
図版7	土保山古墳（第9調査地区）	6・11~14・17~19
	上 区画溝の全景1（北西から）	11~14・17~19
	下 区画溝の全景2（東から）	11~14・17~19
図版8	土保山古墳（第9調査地区）	6・11~14・17~19
	上 区画溝のくびれ部1（西から）	11~14・17~19
	下 区画溝のくびれ部2（北から）	11~14・17~19
図版9	二子山古墳（第8-A調査地区）周濠	6・27~30
	上 全景1（南から）	27~30
	下 全景2（西から）	27~30

図版10	二子山古墳（第8-B調査地区）周濠	6・27~29・31・32
	上 全景1（南西から）	27~29・31・32
	下 全景2（南から）	27~29・31・32
図版11	二子山古墳（第8-A調査地区）	6・27~30
	上 左 調査地区的断面1（南から）	27~30
	右 調査地区的断面2（南東から）	27~30
	中 調査地区的断面の近景1（南から）	27~30
	下 調査地区的断面の近景2（南東から）	27~30
図版12	二子山古墳（第5-B調査地区）	6・27~29
	上 全景1（北から）	27~29
	下 全景2（南西から）	27~29
図版13	塚廻り古墳（第4-A・-C調査地区）	6・34~36
	上 第4-A調査地区的全景（南東から）	34~36
	下 第4-C調査地区的全景（南から）	34~36
図版14	塚廻り古墳（第4-A・-C調査地区）	6・34~36
	上 周溝の完掘状況1（南から）	34~36
	中 左 周溝の完掘状況2（南東から）	34~36
	右 周溝の完掘状況3（南から）	34~36
	下 左 第4-C調査地区的落ち込みの完掘状況1（南東から）	34~36
	右 第4-C調査地区的落ち込みの完掘状況2（北から）	34~36
図版15	開鷦山古墳群A-1号墳	7・50~54
	上 石室の全景1（南から）	50~54
	下 石室の全景2（北から）	50~54
図版16	開鷦山古墳群A-1号墳	7・50~54
	上 左 奥壁（南から）	50~54
	右 羨道部付近（南から）	50~54
	中 左 左側壁（東から）	50~54
	右 敷石（東から）	50~54
	下 左 石室の遠景（西から）	50~54
	右 石室の掘方（南から）	50~54

図版17 第3調査地区	6・59・60
上　　全景1(南東から)	59・60
中　　全景2(北東から)	59・60
下　　左　溝の完掘状況(南西から)	9・59~61
右　溝の完掘状況(北から)	9・59~61
図版18 古墳以外の遺構と第6-A・B調査地区	8・57~59・64・65
上　　左　溝の第10調査地区での完掘状況1(南から)	8・59
右　溝の第10調査地区での完掘状況2(北西から)	8・59
中　　左　土壤の完掘状況(南から)	8・57・59
右　土器棺墓(東から)	8・58・59
下　　左　第6-A調査地区的全景(北東から)	64・65
右　第6-B調査地区的全景(南東から)	64・65
図版19 第1調査地区	6・59・62・64
上　　全景(南東から)	59・62・64
下　　調査地区的西端部(東から)	59・62・64
図版20 第7-A・B調査地区	6・59・62・64・67・68
上　　第7-A調査地区的全景(南東から)	59・62・64・67
下　　第7-B調査地区的全景(南東から)	59・62・64・67・68
図版21 土保山古墳	6・11~19
上　　周濠出土の円筒埴輪1	20~23
下　　周濠出土の円筒埴輪2	20~23
図版22 土保山古墳	6・11~19
上　　周濠出土の円筒埴輪3	20~23
下　　周濠出土の円筒埴輪4	20~23
図版23 土保山古墳	6・11~19
上　　周濠出土の円筒埴輪5	20~23
下　　周濠出土の円筒埴輪6	20~23
図版24 土保山古墳	6・11~19
上　　周濠出土の朝顔形埴輪	20・23・24
下　　周濠出土の形象埴輪1	20・25
図版25 土保山古墳	6・11~19
周濠出土の形象埴輪2	20・23・25

図版26	土保山古墳	6・11~19
	上 周濠出土の形象埴輪3	20・23・25
	下 区画溝出土の円筒埴輪	23・24・26
図版27	土保山古墳	6・11~19
	区画溝出土の朝顔形埴輪・形象埴輪・須恵器	23・24・26・27
図版28	二子山古墳	6・27~29
	上 周濠出土の円筒埴輪1	29・33・34
	下 円筒埴輪2・朝顔形埴輪・形象埴輪	29・33・34
図版29	塚廻り古墳	6・34~36
	上 周溝出土の円筒埴輪1	36~41
	下 周溝出土の円筒埴輪2	36~41
図版30	塚廻り古墳	6・34~36
	上 周溝出土の円筒埴輪3	36~41
	下 周溝出土の円筒埴輪4	36~41
図版31	塚廻り古墳	6・34~36
	上 周溝出土の円筒埴輪5	36~40
	下 周溝出土の円筒埴輪6	36~40
図版32	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の朝顔形埴輪1	40~42
図版33	塚廻り古墳	6・34~36
	上 周溝出土の朝顔形埴輪2	40~42
	下 周溝出土の朝顔形埴輪3	40~42
図版34	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪1	43~45
図版35	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪2	43~45
図版36	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪3	43~45
図版37	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪4	44・46
図版38	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪5	44・46・48

図版39	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪6	44・47・48
図版40	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪7	44・47・48
図版41	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪8	47・48
図版42	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪9	47・49
図版43	塚廻り古墳	6・34~36
	周溝出土の形象埴輪10、須恵器	47・49・50
図版44	闘鶴山古墳群A-1号墳	7・50~54
	石室出土の土器1	53・55・56
図版45	闘鶴山古墳群A-1号墳	7・50~54
	石室出土の土器2	53・55・56
図版46	闘鶴山古墳群A-1号墳、その他の遺構	7・50~54・57~59
上	石室出土の装身具	53・56・57
中 左	土壤出土の土師器	56・59
右	溝出土の瓦器椀	59
下	土器棺	58・59



# 第Ⅰ章 位置と環境

## 第1節 土室古墳群の位置と環境

土室古墳群は高槻市土室町に所在し、東より番山古墳、石塚古墳、高樋古墳、土保山古墳、二子山古墳、塚廻り古墳の6基が現在確認されている（図1・3）。

大阪府の北東部に位置する高槻市の地勢は北域の山間部と南域の平野部に区分され、極端な北高南低の地形となっている。北域の大半が古生代の丹波層群で形成される標高約150～700mの北摂山地で占められ、その南側には標高約30～150mの大阪層群からなる丘陵が派生する。この丘陵は芥川によって東西に分割されており、芥川と檜尾川に挟まれた東域を高槻丘陵と称する。西域はさらに女瀬川によって二分され、東部は南平台丘陵、西部は奈佐原丘陵と呼ばれている（図2）。南域の平野部は北摂山地を源とする中小河川による扇状地と淀川低地の低湿地によって形成されている。

土室古墳群は奈佐原丘陵の南端から発達している標高約10～30mの富田台地上に展開する。この台地は安威川によって形成された扇状地が段丘化したものであり、台地面の大部分はほとんど起伏のみられない平坦面となる。

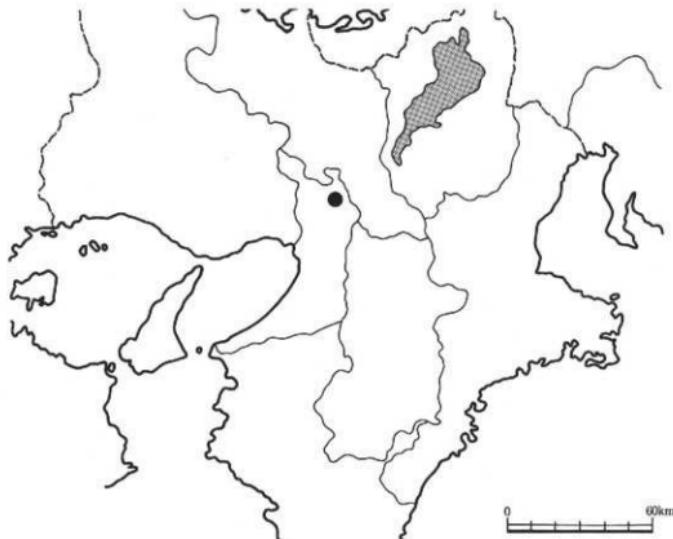


図1 土室古墳群の位置

## 第2節 土室古墳群周辺の歴史的環境

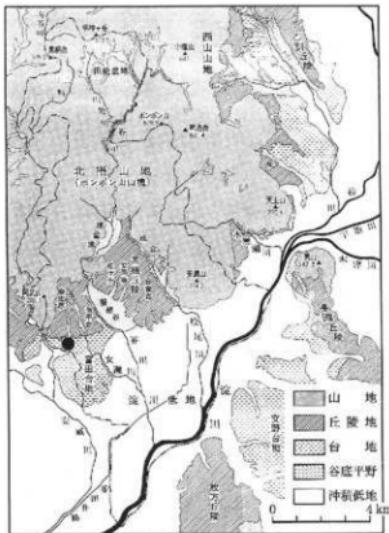
土室古墳群が立地するのは東を芥川に西を安威川に挟まれた三島地域を代表する古墳が多数点在し、その首長系譜が伺える重要な地域である。そこでこの節では古墳時代を中心とした周辺の歴史的環境を概述する。

古墳時代前期には郡家川西遺跡（31）にみられるような、芥川流域の勢力を基盤とする首長墓群である弁天山古墳群（18）が南平台丘陵上に展開する。その後、丘陵据部に郡家車塚古墳（28）、前塚古墳（29）が築かれ、前期から中期にかけての一連の首長系譜がみとめられる。また、奈佐原丘陵奥部には芥川中流にある服部平野の勢力を基盤とする中期の墓谷古墳群（8）や尼ヶ谷古墳群（11）がみられ、当地における主要な古墳群の一つとして位置づけられる。さらに、この時期には弁天山古墳群の系列と双壁をなし、番山古墳（48）、石塚古墳（49）、土保山古墳（50）、二子山古墳（51）などで構成される土室古墳群がある。古墳群の南東方にあたる段丘縁辺部には現在、宮内庁により繼体陵として指定されている全長226mの太田茶臼山古墳（56）がある。

土室古墳群の北東方約1kmの地点には新池埴輪製作遺跡（45）があり、5世紀中頃から6世紀中頃にかけての埴輪窯を総数18基と、工房跡等を検出している。出土した埴輪の分析により、太田茶臼山古墳、後述する今城塚古墳（35）への埴輪の供給が確実となり、太田茶臼山古墳の造営を契機として形成されたとされる埴輪窯が、その後も三島における主要な古墳へと埴輪の供給を行なっていたことが明らかとなり、三島の古墳時代史を考えるうえでも、重要な成果を挙げている。

当地における古墳時代後期の特筆すべき古墳は今城塚古墳（35）である。2重の周濠を巡らせ、全長190mを測るこの古墳は、築造企画論をはじめ、所在地論、さらには出土した埴輪の研究成果などから、現在のところ真の繼体陵との意見が強い。

横穴式石室を内部主体とする群集墳の主なものとして、塚原古墳群（43）、塚脇古墳群（4）が挙げられる。塚原古墳群はおよそ110基の古墳で構成され、三島地方では最大規模を誇る。この古墳群は、安威川流域を基盤としたであろう有力者層の墓域であると考えられており、副



『高槻市史』第1巻本編I 昭和52年の図8を転載、一部加筆

図2 高槻市の地形区分



- |                   |             |             |             |            |            |
|-------------------|-------------|-------------|-------------|------------|------------|
| 1. 成合琴堂塚跡群        | 2. 井川山城跡    | 3. 布仕山向城跡   | 4. 球磨古墳群    | 5. 安岡寺古墳   | 6. 芝谷古墳    |
| 7. 宮之川原遺跡         | 8. 嘉谷古墳群    | 9. 駿河神社古墳   | 10. 唐舟井古墳群  | 11. 尼ヶ谷古墳群 | 12. 大藏寺遺跡  |
| 13. 真上遺跡          | 14. 真上古墳群   | 15. 真上東遺跡   | 16. 安洋寺古墳   | 17. 芥川遺跡   | 18. 弁天山古墳群 |
| 19. 弁天山古墳         | 20. 同本山古墳   | 21. 皇子塚遺跡   | 22. 圓鶴山古墳   | 23. 開鶴山古墳群 | 24. 同本山古墳群 |
| 25. 上野遺跡          | 26. 那家本町遺跡  | 27. 芥川庵寺瓦窯跡 | 28. 那家車塚古墳  | 29. 前塚古墳   | 30. 孤塚古墳群  |
| 31. 境上郡衛跡（那家川西遺跡） | 32. 阿久刀神社   | 33. 芥川庵寺    | 34. 川西古墳群   | 35. 今城塚古墳  |            |
| 36. 水室遺跡          | 37. ツゲノ遺跡   | 38. ツゲノ古墳群  | 39. 那家今城遺跡  | 40. 宮田遺跡   | 41. 片ヶ谷古墳群 |
| 42. 阿武山古墳         | 43. 墓原古墳群   | 44. 墓原遺跡    | 45. 新高輪輸作道跡 | 46. 上土室遺跡  | 47. 土室遺跡   |
| 48. 善山古墳          | 49. 石塚古墳    | 50. 土保山古墳   | 51. 二子山古墳   | 52. 墓麗り古墳  | 53. 石山古墳   |
| 54. 高塚古墳          | 55. 鹽体天皇陵古墳 | 56. 太田茶臼山古墳 |             |            |            |

ゴチック (48~52) は土室古墳群に該当する古墳

図3 土室古墳群周辺の遺跡分布

葬品として单竜透彫環状柄頭をはじめ多数の武器や馬具が出上している。

塚脇古墳群は芥川西岸の服部平野を基盤とする服部連一族の墓域と推定されており、近年調査が実施されたF-1号墳の墳丘の盛土内には、石垣状の石列が石室を開くように巡るなど、石室と墳丘の構築法に特異性が見受けられる。副葬品として磯金具・轡・雲珠・辻金具などの馬具も豊富に出土しており、F-1号墳は、この古墳群の性格を考えるうえでも重要な古墳に位置付けられている。

塚原・塚脇両古墳群は、三島地方における横穴式石室導入期の様相を考えるために重要な群集墳であることは間違いない、塚原古墳群の最高所には藤原鎌足の墓と推定されている阿武山古墳があり、墓域として優良な地域であったことが伺える。

以上のように、三島地方の中でも、特に上室古墳群周辺は、古墳時代の全時期を通じて、中央との関係が濃厚である政治的な要衝地であったことは間違いない。

今回の土室古墳群の調査では、新規に発見された塚廻り古墳(52)をはじめ、土保山古墳、二子山古墳についても、新たな知見を得ており、これら一連の資料は、新池埴輪製作遺跡の調査成果によって、新たな展開を見せている三島地方の古墳時代の景観を復元する作業の一助となるものと考える。

#### 参考文献

1. 高槻市史編さん委員会 『高槻市史』第6巻 考古編 高槻市 1973年
2. 原口正三 「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第1巻 高槻市 1977年
3. 小林健太郎「高槻市の自然環境」『高槻市史』第1巻 高槻市 1977年
4. 森田克行 『新池遺跡－発掘調査報告会－』高槻市文化財発掘調査概要IV 高槻市教育委員会 1989年
5. 森田克行 『新池』 高槻市文化財調査報告書第17冊 高槻市教育委員会 1993年
6. 高橋公一 「塚脇F-1号墳の調査」『嶋上郡街跡他関連遺跡発掘調査概要・15』 高槻市教育委員会 1991年

## 第II章 調査に至る経緯

### 第1節 発掘調査に至る経緯

昭和38年に共用された名神高速道路（中央自動車道西宮線）は、近年の著しい交通量増加に伴う交通渋滞を解消すべく、昭和57年に瀬田東から栗東の両インターチェンジ間と、吹田から京都南の両インターチェンジ間を3車線化する拡幅事業が決定された。

この計画をもとに、事業対象地における文化財の取り扱いについて、文化庁、関係府県教育委員会、日本道路公団との間で協議がなされ、文化財の保存については十分な配慮がなされることが確認された。

大阪府域においては、埋蔵文化財の取り扱いについて、大阪府教育委員会、当該市町教育委員会、日本道路公団大阪建設局の間で協議がなされ、既存の調査報告書による予備調査、現地の踏査等を経て確認された約40個所の埋蔵文化財包蔵地について、拡幅事業に先立ち発掘調査を実施することで合意に達した。

発掘調査は、対象地が二市一町にまたがる大規模なものであり、かなり長い期間と多大な費用を要するため、調査方法、調査費用の積算、保存協議等については統一的な対応が必要となった。この為、市町教育委員会と大阪府教育委員会で共同調査を行なうことが基本方針とされ、各市町より専門職員を派遣する調査会を組織し、調査を実施することとなった。

以上の経過により、平成2年11月16日に「名神高速道路内遺跡調査会」が発足した。

### 第2節 発掘調査の経過

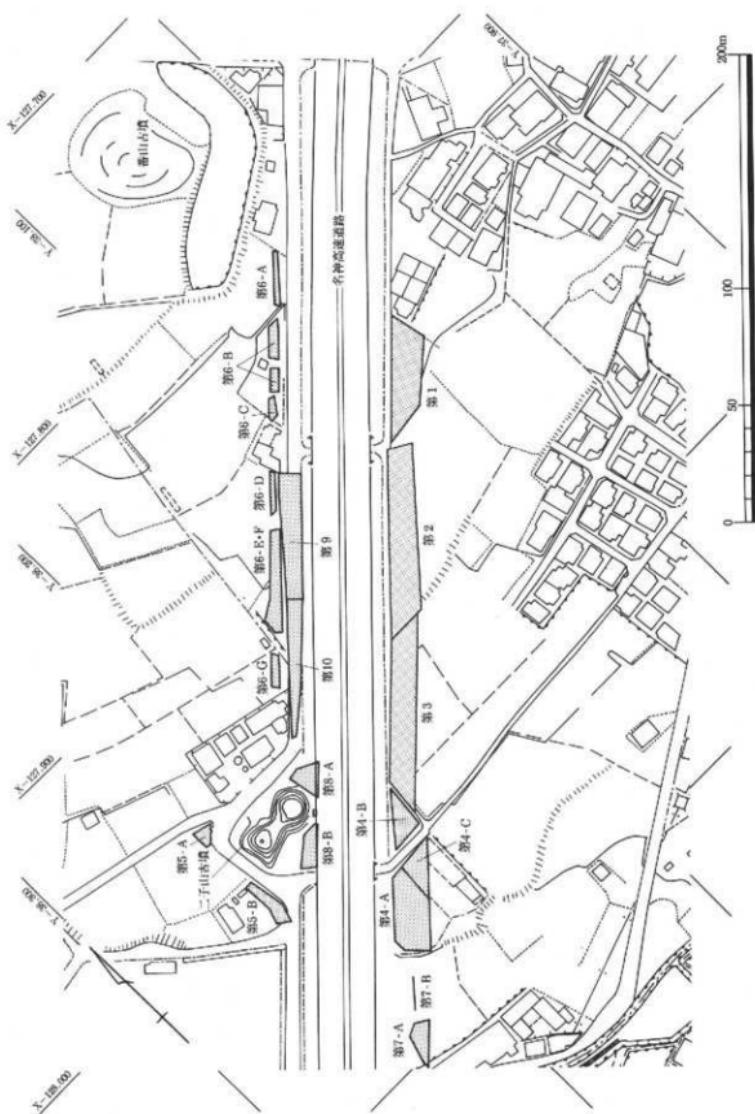
本書において、発掘調査の成果を述べようとする土室古墳群の調査は平成5年12月に着手し、平成9年10月に終了した。

各調査地区の面積、調査期間、担当者については表1に示す。発掘調査の経過についてはその概要を年度毎に順次述べ、各調査地区については図4・5に示す。

#### 1. 平成5年度

平成5年度は、調査対象地区の掘削深度を判断し、調査方法等を検討するために、現在は名神高速道路下に埋没している土保山古墳周辺（高速道路下り線側）と闘鷄山古墳群の調査対象地区において12月より試掘調査を実施した。その結果、闘鷄山古墳群の調査対象地区では、横穴式石室の一部を発見したため全面調査に移行し、平成6年2月に調査を終了した。

同年3月より、高速道路の上り線側に設定された第6調査地区（第6-A～6-G調査地区）の試掘調査に着手した。



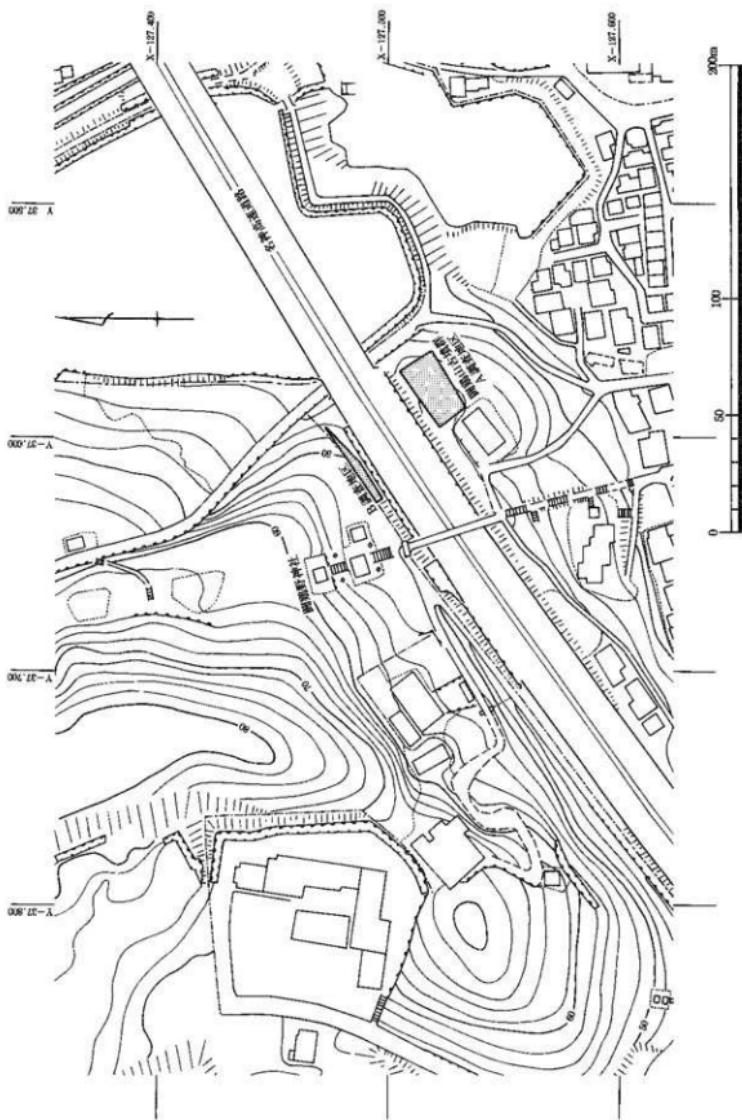


図5 調査地区の位置2（開鷄山古墳群）

試掘調査を先行させたのは、調査対象地区の土層の観察や遺構の有無を確認することはもとより、隣接する高速道路の側道下の状況を把握し、側道下の調査が必要となった場合、調査計画の再検討を少しでも早い段階に行なうためである。

調査の結果、第6-E・-F調査地区では、埴輪片が出土する溝や遺物包含層が遺存していたので、次年度に全面調査を実施することになった。

## 2. 平成6年度

平成6年度は4月から調査を開始し、まず土保山古墳の調査（第2・第6-E・-F調査地区）から着手した。

第6-E調査地区で円弧状の落ち込みが見られ、第6-F調査地区では先年度の試掘調査で確認した多数の埴輪片が出土する東西方向に走行する溝を1条と、遺物は見られなかったが、南北方向に走行する溝を1条検出した。

埴輪片が出土する溝は、土保山古墳に関連する遺構である可能性が考えられ、調査地区を名神高速道路の側道方向へ拡張する必要があると判断した。協議の結果、第9調査地区を設定し、調査は新設する側道が完成の後、交通の支障にならない段階で実施する運びとなった。

第6調査地区的調査と同時に第2調査地区では鋼矢板による土留め工事を行ない、5月には人力掘削に着手した。

第2調査地区的範囲は、その大半が埋め立てられた溜池（土保池）にあたり、その擁壁工事や浚渫のために大きく搅乱を受けていたが、調査地区の北東部において、上保山古墳の周濠の一部が遺存していたため、6月28日に近隣市町村の埋蔵文化財担当者を対象とした見学会を実施した。

周濠の東側で、埴輪片が出土する周濠より規模の小さい溝を検出したが、調査当時は周濠との関連が見いだせず、その性格は不明であったが、後述する第9調査地区的成果により、この溝は土保山古墳の外堤を画する溝（区画溝）であることが判明した。調査は7月の初旬に終了し、遺構が検出された範囲には海砂を詰めて、保存処置を行なった。

6月中旬からは第2調査地区的調査と並行して、第5調査地区（第5-A・-B調査地区）の調査を実施した。第5調査地区は二子山古墳の前方部に近接するため、前方部側の周濠の規模等に迫る成果を期待したが、埋設管の設置工事等による搅乱が著しく、埴輪片の採集のみにとどまり、7月の下旬に調査は完了した。

引き続いて第4調査地区（第4-A・-B調査地区）と第7調査地区（第7-A調査地区）の調査に着手した。第4-A調査地区では、新たに古墳（塚廻り古墳）を発見し、その周溝から形象埴輪を主体とする埴輪片が多数出土した。

第7-A調査地区は高槻市と茨木市の境界、すなわち嶋上・嶋下郡の郡界に隣接する調査地区であるため、調査によって、郡界を走る五社水路と呼ばれる灌漑用水路の規模や掘削時期を推定できる資料が得られるものと期待されたが、調査地区の範囲では、瓦器碗の細片が出土する包含層のみ検出し、新たな発見はなかった。

8月には第1・第3調査地区的調査に着手し、9月に終了した。第3調査地区では、調査地区的西端付近で南北方向に走行する溝を検出し、埋土から瓦器碗が出土している。この溝は第6-E調査地区で検出された南北方向に走行する溝の延長線上に位置することから、これらは同一の遺構と判断した。

10月までに大半の調査が終了したが、第8・9調査地区的調査は阪神・淡路大震災等、諸般の事情で、その着手が大幅に遅れ、平成7年3月にようやく着手にこぎつけた。

第8調査地区（第8-A・-B調査地区）は第5調査地区同様、二子山古墳に隣接する調査地区である。第8-A調査地区において、二子山古墳の後円部の墳丘の基底部を検出し、周濠内の堆積状況から、周濠は水を湛えていたことが判明した。

第9調査地区的調査では、第6-E・-F調査地区で検出された溝と、円弧状の落ち込みは同一の遺構であり、土保山古墳の外堤を画する溝（区画溝）であることが確認され、溝の形状から上保山古墳は周濠と区画溝を備えた前方後円墳であることが判明した。その結果、新たに調査地区（第10調査地区）を設定し、次年度に調査を実施することになった。

### 3. 平成7年度

6月より第9調査地区の西に設定した第10調査地区的調査を実施した。

土保山古墳の前方部の状況を探ることが調査の目的であったが、調査地区は大きく削平を受け、調査地区的西端付近では昭和53年の大阪府営水道建設の際に大きく搅乱を受けており、土保山古墳に関連する遺構は見いだせなかった。

調査地区的中央付近では、第6-F調査地区で検出された溝の続きを確認し、これらの遺構は、第3調査地区的溝を含めた一連の遺構であることがほぼ確実となり、土保山古墳築造後のものであると判断した。

### 4. 平成9年度

10月に第4-C調査地区的調査を実施した。第4-A調査地区で発見された塚廻り古墳の墳形を確定できる手掛りが得られるものと期待された。

調査の結果、明瞭ではないが周溝の続きと考えられる遺構を検出し、塚廻り古墳は方墳の可能性が高いと判断した。

表1 発掘調査工程の一覧

調査地区名	遺跡名	面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間				担当者
			平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	
上室古墳群	第1	694		8月29日 開始 10月3日 終了			川端 博明
	第2	土保山古墳	1,146		4月4日 開始 7月4日 終了		川端 博明
	第3		980		8月4日 開始 9月22日 終了		川端 博明 松本 克憲
	第4-A -B	塚割り古墳	400 318		7月20日 開始 9月28日 終了		川端 博明 松本 克憲
	第4-C	塚割り古墳	70			10月13日 開始 10月24日 終了	川端 博明
	第5-A -B	二子山古墳	106 98		6月1日 開始 7月27日 終了		松本 克憲
	第6-A -B -C -D		30 30 30 30	平成6年 3月24日 開始 4月20日 終了			松本 克憲
	-E -F	土保山古墳	377		4月24日 開始 6月3日 終了		
	-G		30				
岡山県	第7-A		206		7月14日 開始 8月5日 終了		川端 博明 松本 克憲
	第7-B		122		10月3日 開始 8月12日 終了		松本 克憲
	第8-A -B	二子山古墳	70 98		3月24日 開始 5月27日 終了		川端 博明
	第9	土保山古墳	283		3月24日 開始 5月27日 終了		川端 博明
	第10	土保山古墳	311			11月6月8日 開始 6月20日 終了	川端 博明
岡山県 吉備地方	A調査地区	岡山古墳群 A-1号墳	367	12月21日 開始 H6. 2月10日 終了			尾関 真二
	B調査地区		13				尾関 真二

## 第III章 調査の成果

### 第1節 土保山古墳の調査

#### 1. 立地と調査の概要

土保山古墳は奈佐原丘陵の南端に発達する低位段丘上（富田台地）に展開する土室古墳群のなかで、ほぼ中心に位置し、かつては「土山古墳」<sup>13)</sup>と称されていた。

昭和34年に発掘調査が実施されており、古墳群の中では唯一主体部が明らかな古墳である。昭和40年頃まで、古墳に南接して、土保池と呼ばれるいびつな半円形の溜池があり、周濠の一部であるとされていた。そこで今回の調査は、土保山古墳の墳形を明らかにするため、墳丘の基底部及び、周濠の検出を主眼において進めた。

#### 2. 既往の調査の成果

##### 1) 昭和34年の調査（図6）

名神高速道路建設に伴い、昭和34年9月から11月にかけて発掘調査が実施された。

当時から土保山古墳の周辺は水田である。墳丘の四方はほぼ垂直に削りとられ、頂部にも耕作が及んでいるが、墳丘の南部で円筒埴輪列の一部と葺石の一部を確認している。報文では墳形の正確な復元は困難であるとしながらも、直径約29～30mの円墳と推定されている。

墳丘が後世の土地改良によってその姿を大きく変えているのに対して、埋葬施設は完存しており、竪穴式石室と副葬品を納めた粘土櫛が検出され、長軸方向はほぼ南北方向となる。いずれも組合式木棺が使用され、両者の間隔は芯々間で約1.50mを測る。

竪穴式石室はその構築方法に特徴があり、最下段は板石を縦に使用し、二段目は横に用い、横穴式石室の構築法を採用している。石室の法量は、内法で、長さ3.85m、幅は0.90m、高さは0.80～0.90mを測り、天井石は7枚で構成されている。床面に敷石がみられ、その上に木棺（1号棺）を安置している。木棺の蓋の上には、綾杉文や鎧齒文のついた漆膜が広がり、二枚の柄を縦方向にのせていたものと推定され、さらに、蓋の上には柄付鉄鋒を3本置き、鋒先を2本は北に、1本は南に向いている。柄は漆塗りで連續格子文が施されている。

棺内からは、乳文鏡、ガラス小玉、櫛、直弧文柄頭、横矧板鈕留短甲が出土している。棺外からは櫛、鉄鋒、鐵鎌、矢束、横矧板鈕留短甲、鉈、馬具が出土している。

粘土櫛内の法量は、長さが約3m、幅が約1mを測る。櫛内の木棺（2号棺）は1号棺に比べて遺存状態がさらに良く、法量は、長さが2.85m、幅は0.70m、高さは0.50mを測る。

副葬品はすべてが武具で、衡角付冑、草摺、肩甲、鞍、弓、鉄鎌、矢柄の漆膜、鐵鎌が出土

している。

## 2) 昭和52年の調査<sup>3)</sup>(図6)

大阪府営の水道工事に伴い、昭和52年12月に試掘調査が行なわれている。この調査では二子山古墳の周辺においても、試掘調査が行なわれた。その成果については第Ⅳ章で述べる。

土保山古墳周辺では名神高速道路の側道上に8ヶ所の試掘トレンチ(No.4～11TR)が設定されているが、土保山古墳に関連する遺構は検出されていない。No.7とNo.11トレンチは周濠の検出が最も期待されたトレンチであったが、既設の水道管や電話ケーブルによって、トレンチの範囲が制約を受け、周濠の確認には至っていない。しかし、両トレンチでは円筒埴輪片が出土している。

### 3. 遺構

今回の調査では、部分的ではあるが、外部施設である周濠と外堤を画する溝(以後、区画溝と呼称する)を確認し、区画溝の形状から前方後円墳の可能性があることが判明した。

#### 1) 周濠(図6～8、図版1～3)

第2調査地区と第9調査地区的南壁で確認できた。

第2調査地区的北東域は、土保池の堤にあたるため、浚渫工事等を免れ、周濠の一部が遺存していた。周濠は円弧状を呈していたと考えられる。残存する幅は、周濠に直交する方向での計測が不可能なため、調査地区的北壁の断面で計測すると、13.50mを測るが、推定される本来の幅は9m程度であろう。残存する深さは最も深い所で約1mを測る。

周濠内の堆積土はシルト質で、図7の調査地区的断面図に示すところの最下層となる黒褐色シルトの第7層と褐色シルトの第6層は特に粘性が強く、常に帶水状態にあったことを示している。埴輪片もこの2層から最も多く出土している。また、第7層の上面では、直径約10～20cmの礫が出土しており、墳丘から崩落した葺石であると考えられる。

第9調査地区では、既設の水路や水道管、電話ケーブルの設置工事による搅乱のため、平面での周濠の痕跡は判然としなかったが、調査地区的南壁面において、周濠の外堤部側の肩にあたると考えられる皿状の落ち込みがみとめられた。落ち込みの幅は19.25m、残存する深さは0.75mを測る。堆積土は大半が細粒砂である(図8)。

#### 2) 区画溝(図6～8、図版3～8)

第2・9調査地区と第6-E・-F調査地区で検出した。

第2調査地区では、周濠の外堤部側の肩より東へ約2.6mの位置で検出している。残存する長さは約2.0m、幅は約0.70～0.90m、深さは約0.30mを測る。

堆積土は細粒砂で(図7)、周濠内に見られるような粘性の強い土層は堆積していない。遺

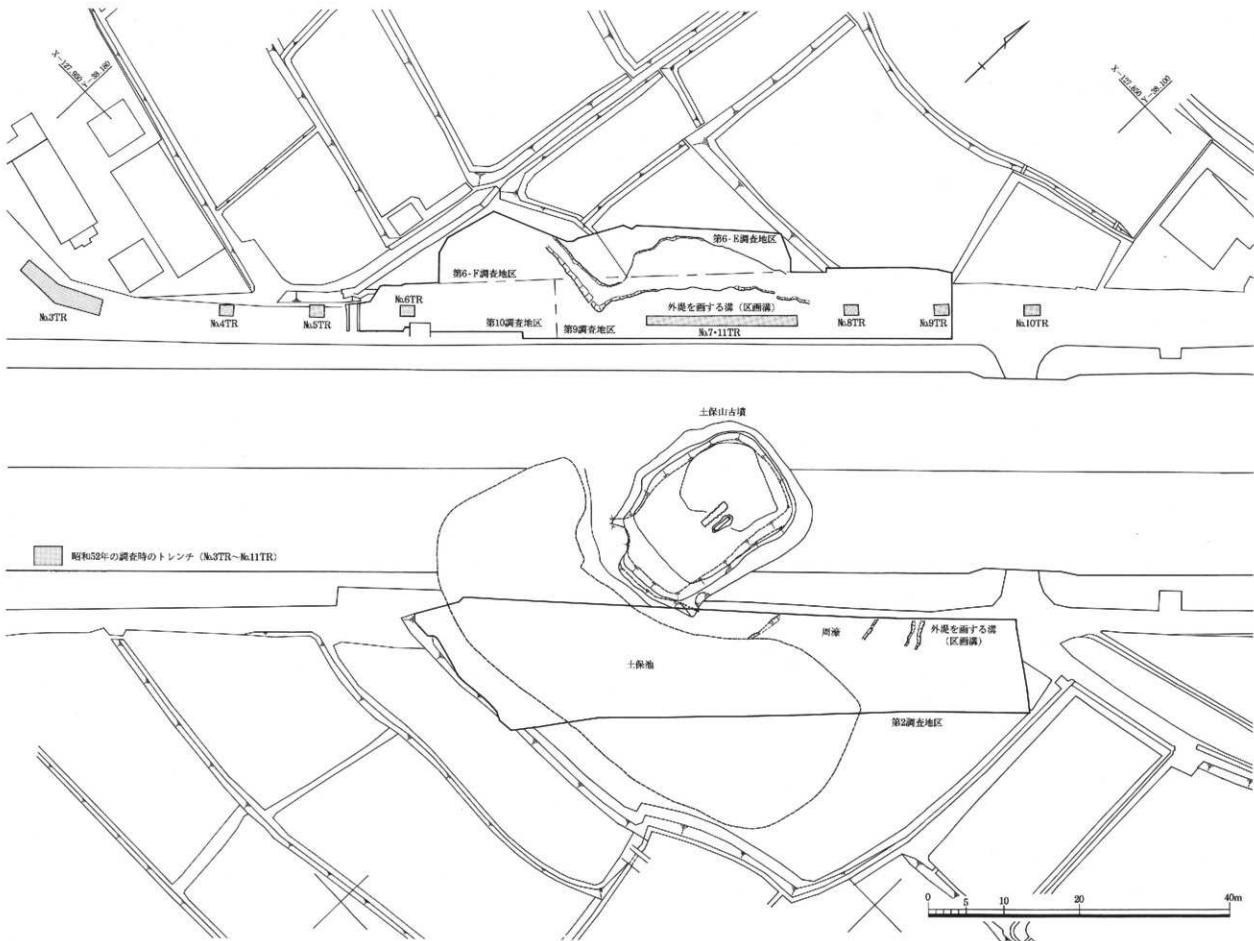


図 6 土保山古墳の調査地区の位置

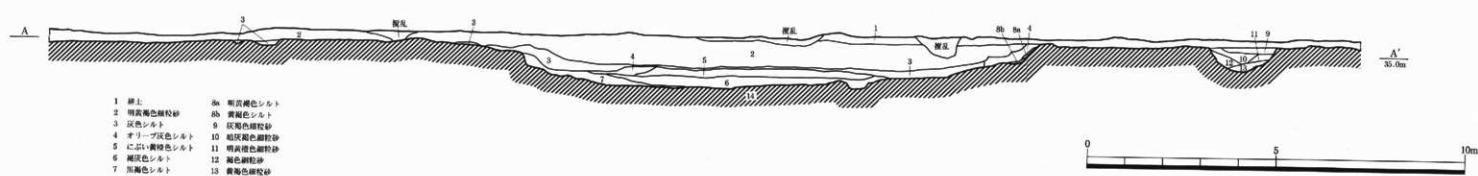
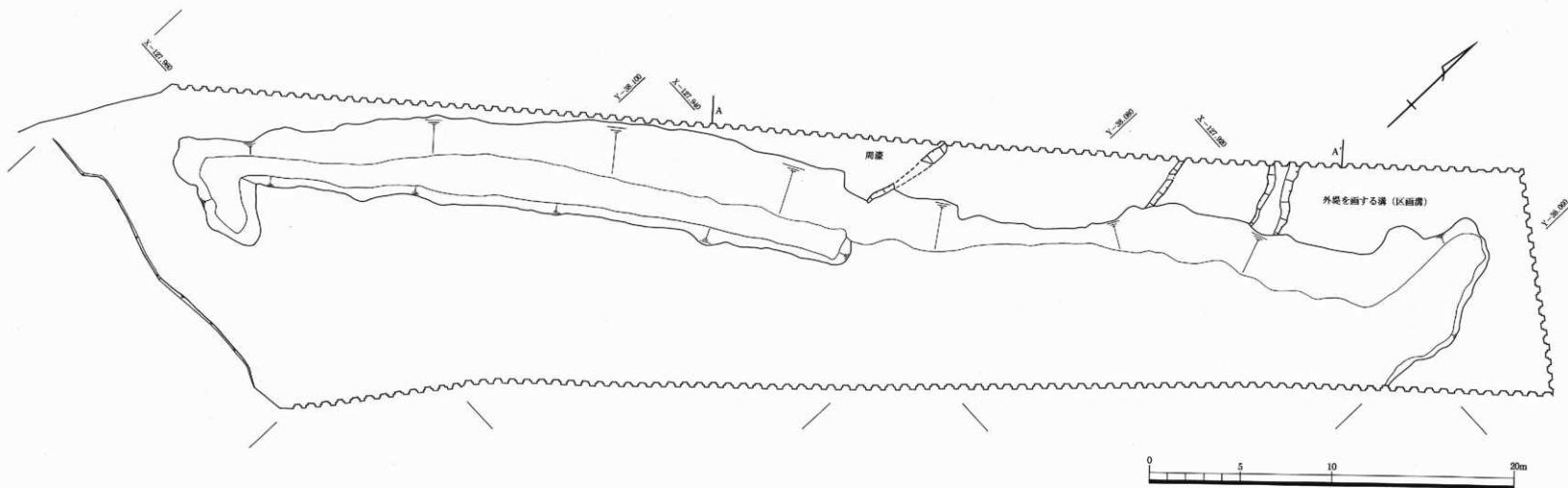


図7 第2調査地区的平面・断面図

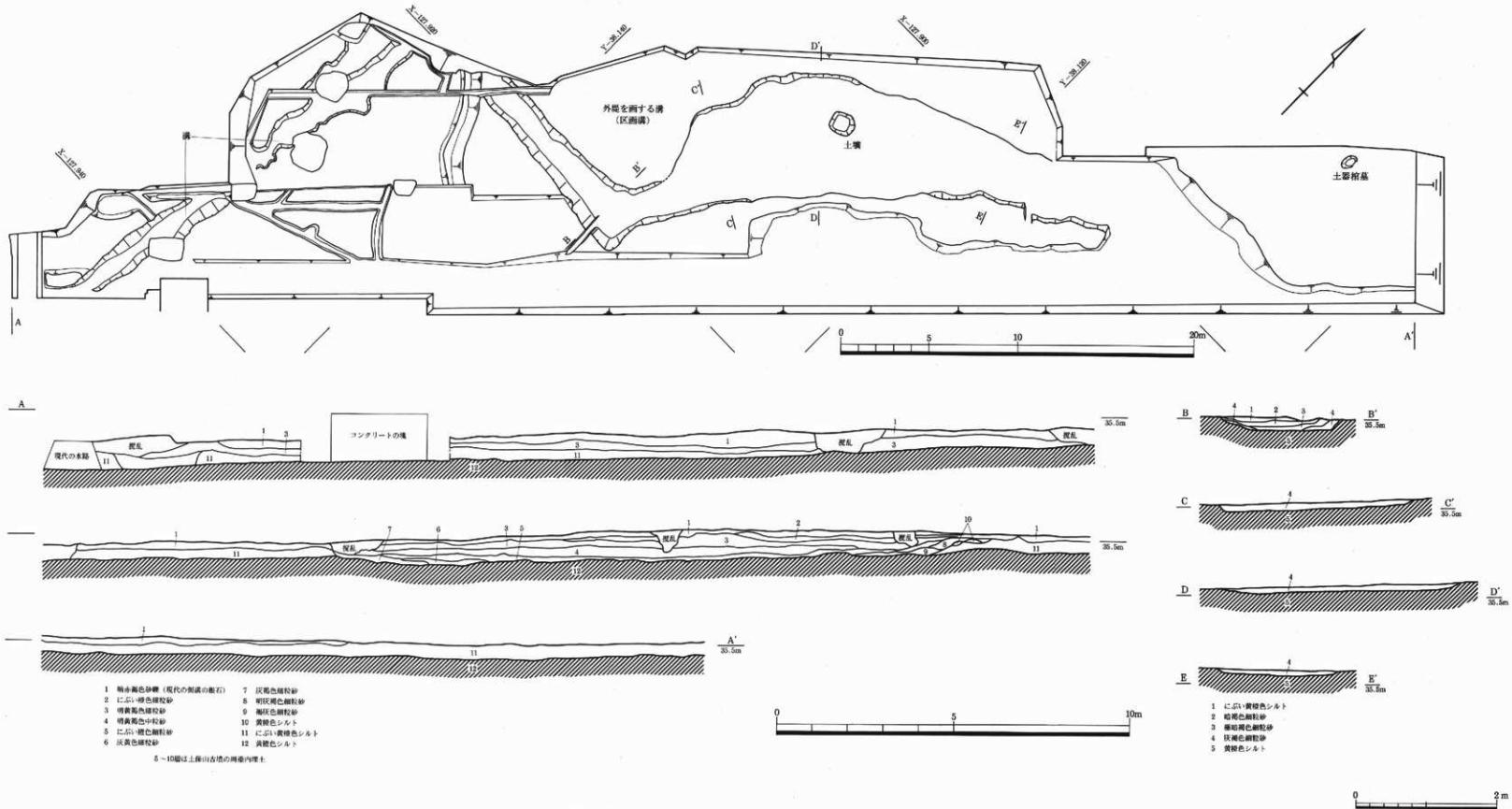


図8 第6・E-F調査地区、第9・10調査地区的平面・断面図

物は埴輪の細片が小量出土している。

第6-F調査地区の北東部で、東西方向へ直線的に走行する区画溝は、第9調査地区の西端付近で北方向に屈曲し、第6-E・9調査地区で円弧状を呈する。この形状から、土保山古墳は、区画溝を備えた前方後円墳である可能性が判明した。

直線的に延びる溝の残存する長さは5.75m、幅は0.95~1.85m、深さは約0.40mを測る。堆積土は細粒砂で(図7・8)、最下層から形象埴輪や須恵器(図17・18、図版27)が出土している。

円弧状を呈する範囲の残存する幅は1.10~3.50m、深さは0.15~0.25mを測る。溝の幅が広い部分は、溝の肩の崩壊によってその幅が広くなったものと推定され、区画溝の本来の形状ではないと考えられる。堆積土は灰褐色細粒砂の単層(図8)で、埴輪の細片が出土している。

#### 4. 遺物

##### 1) 遺物の分類

出土した遺物の大半が埴輪で占められており、原位置を保つ

て出土したものではなく、その多くは破片である。そこで、円

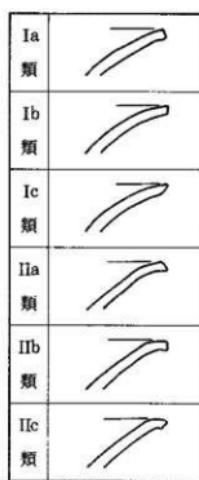
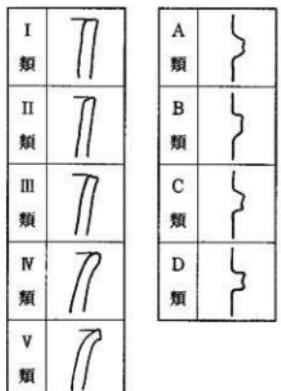
筒埴輪と朝顔形埴輪については口縁部や突帯が良好に遺存し、図9 円筒埴輪の口縁部と突帯の分類

なおかつ、内外面の調整が観察できるものを抽出して図化を行なった。

分類にあたっては、最も多く出土している円筒埴輪と朝顔形埴輪について行ない、口縁部と突帯の断面形で分類を試みた。<sup>5)</sup>円筒埴輪の外面の調整手法はB種ヨコハケが基本となるが、抽出した埴輪のほとんどが破片であるため、調整手法の細別はあえて行なわず、特徴のある調整がみられるものについては、個別に記している。内面を含めた調整手法の詳細については観察表を参照されたい。

円筒埴輪の口縁部はその形態により、口縁端部が水平になるI類、内傾するII類、外傾するIII類、丸くおさめるIV類、口縁部が外反するV類にわけられる(図9)。胸部は突帯の断面形状から、台形状に突出するA類、上辺部がほぼ水

平になるB類、下辺部がほぼ水平になるC類、逆台形状に突・<sup>6)</sup>図10 朝顔形埴輪の口縁部の分類



出するD類にわけられる(図9)。突帯の外端面の形状については、個々によってヨコナデの強弱による違いがみられるが、明瞭に分りきれないためここでは扱わない。

朝顔形埴輪は口縁部が緩やかに外反するI類、曲折して外反するII類に大別でき、口縁端部(2次口縁端部)が外傾するa類、ほぼ垂直になるb類、内傾するc類にわけられる(図10)。形象埴輪はほとんどが破片で、家、器財、人物、動物の順に記述する。

## 2) 周濠出土の遺物(図11~15、図版21~26)

周濠内より出土した埴輪はコンテナ20箱程度で、重量約83kgである。そのほとんどが、図7に示す周濠内堆積土の最下層となる黒褐色シルトの第7層と褐色シルトの第6層より出土している。

### 円筒埴輪(図11~13、図版21~23)

1~13は口縁部である。口径が判明するのは1のみで、約38cmを測る。1~6はI類、7・8はII類、9~11はIII類、12はIV類、13はV類にそれぞれ属する。2・4・6~11・13の内外面にはベンガラの塗布がみられ、11にはA類の突帯がつき、口縁部付近の外面には幅約3.5mmの横位の線刻が施される。

14~39は胴部である。14~26はA類、27~29はB類、30~37はC類、38はD類に属する。15・21は外面面、20・22・24・26・27・35・36は外面にベンガラの塗布がみられる。21・27・39の外面にはヘラ記号が線刻されている。

40~49は基底部である。底径が判明するのは、40~46で、40・41が約30cm、43が約24cm、42・44が約22cm、45・46が約14cmである。40・41・45・46は基底部の高さが計測でき、40は約13cm、41が約10cm、45が約15cm、46が約11cmである。40・41・46にはC類、45にはA類の突帯がつく。49の外面には一次調整時のタテハケのみがみられる。

### 朝顔形埴輪(図14、図版24)

口径が判明したものはないが、58については、頸部径が復元でき、29.7cmを測る。

50はIIc類、51・52はIId類に属する。53~56は、断面に擬口縁が確認でき、口縁部は分割成形されているが、57には擬口縁がみとめられず、一括成形のものであろう。

51以外は、ベンガラの塗布がみられ、50・52・53・55・59は外面のみに、54・56~58は内外面にベンガラが施されている。

### 形象埴輪(図15、図版24~26)

形象埴輪には蓋と盾がある。60~63は蓋の立ち飾り部本体の破片で、64・65は鰐部の破片である。すべて2本の線刻(外縁線・内縁線)で外郭を縁取っている。60~62は内枠も2本の線刻によって区画されていることがわかる。64・65にはベンガラの塗布がみられる。

67は立ち飾りの軸部で、底径は6.4cmを測る。68は口縁部を肥厚させた軸受部である。

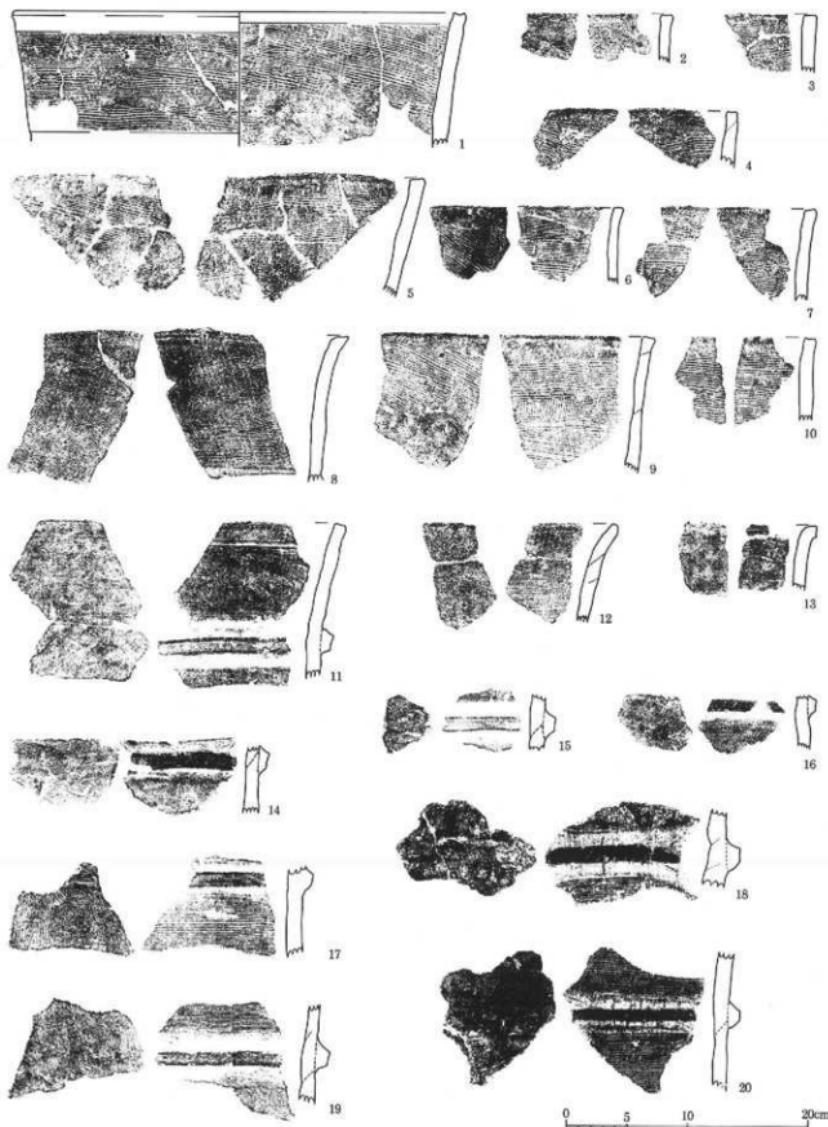


図11 土保山古墳周濠出土の埴輪1（円筒埴輪）

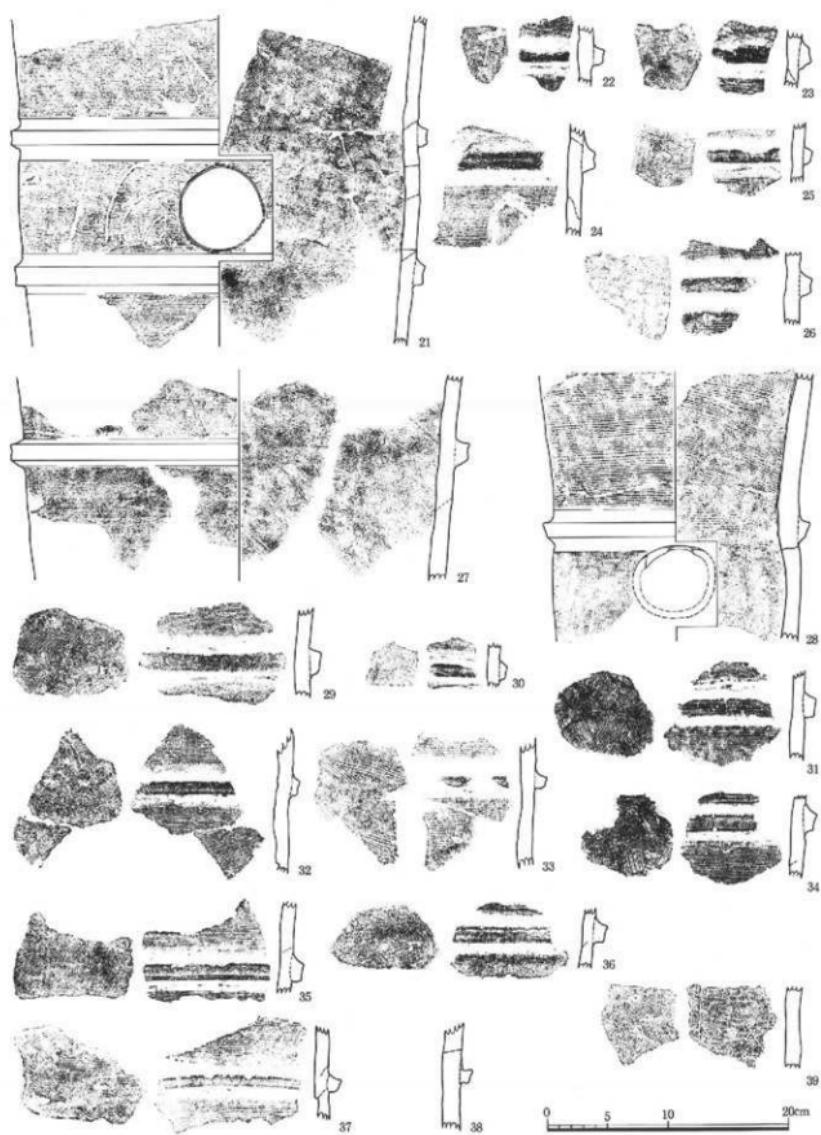


図12 土保山古墳周濠出土の埴輪2（円筒埴輪）

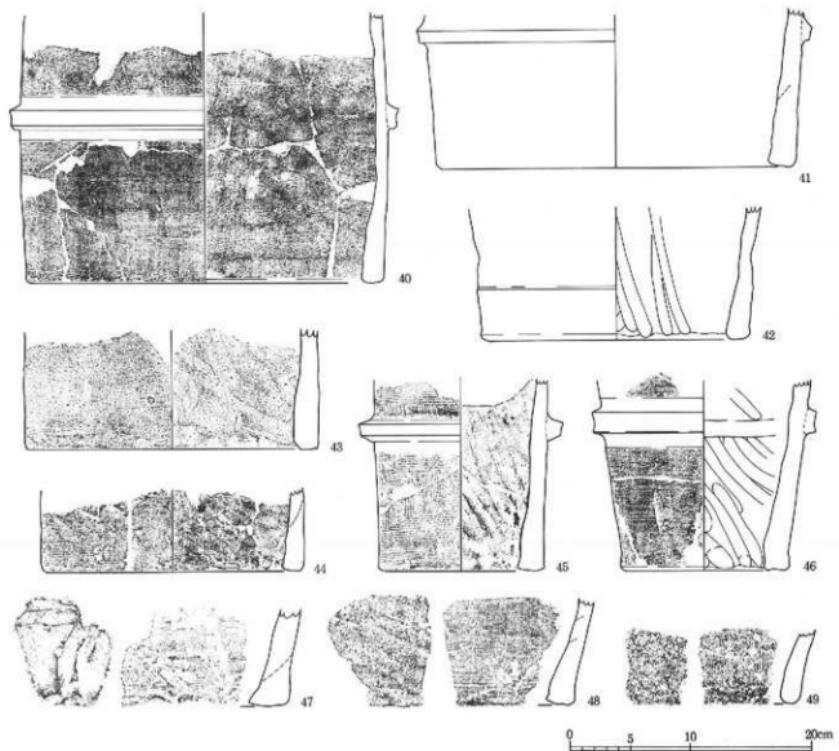


図13 土保山古墳周濠出土の埴輪3（円筒埴輪）

69・70は笠部である。69の復元口径は58cmを測り、笠縁部と笠中位に断面の形状が台形を呈する低平な突帯が巡り、上下の突帯間の施文帯には2本1組の放射状の線刻がみられる。

70は軸受部と基台部の大半が欠損し、笠中位の突帯がすべて剝離しているが、笠部はほぼ遺存している。笠縁部の口径は68.5cmを測り、軸受部下端と笠縁部には69同様、断面の形状が台形を呈する低平な突帯が巡る。上下の突帯間の施文帯には2本1組の放射状の線刻が6単位づつ配されている。

66は盾面の文様部の破片である。2本の線刻によって区画された幅2cmの文様帶に、高さ約2cmの鋸歯文が連続する。

### 3) 区画溝出土の遺物（図16～18、図版27）

区画溝より出土した埴輪はコンテナ35箱程度で、重量約66kgである。埴輪のほかに、須恵器

の縁が1点出土している(図18-15)。

円筒埴輪(図16、図版26)

1・2は口縁部で、I類に属する。1の口縁端部外面にはタテハケが施されている。

3~6は胸部で、3~5にはA類、6にはC類の突帯がつく。7は基底部で、A類の突帯がつく。基底部の高さは10cmを測る。

朝顔形埴輪(図16、図版27)

8・9は口縁部破片である。断面には擬口縁がみとめられず、一括成形の後、突帯を張り付けたのである。10は頸部片である。鋭く突出した突帯を有する。11は頸部から肩部にかけての破片である。肩部は緩やかで、頸部の突帯の断面形状は三角形を呈する。

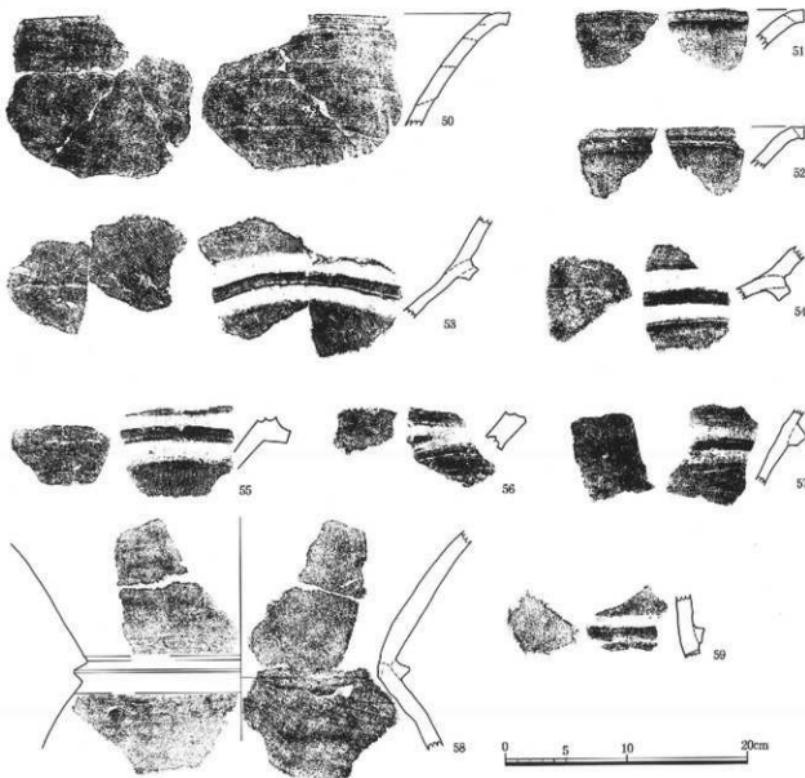


図14 土保山古墳周濠出土の埴輪4(朝顔形埴輪)

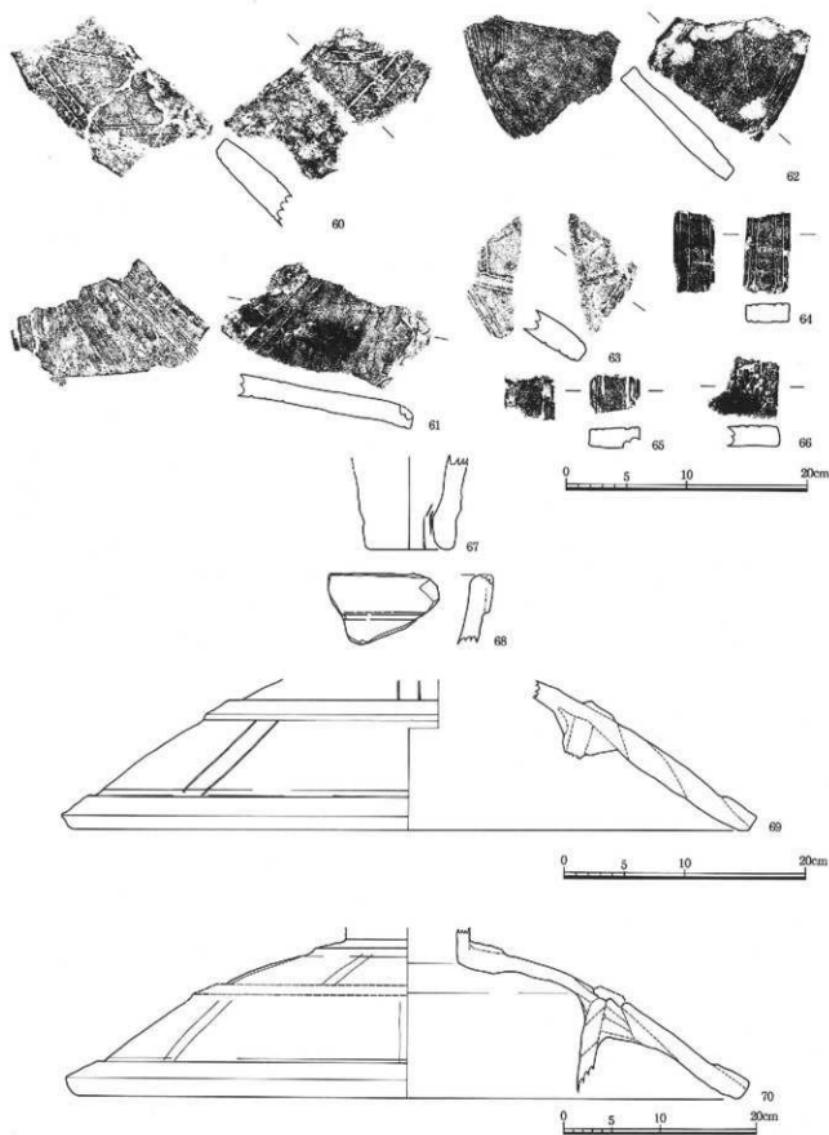


図15 土保山古墳周濠出土の埴輪5（形象埴輪）

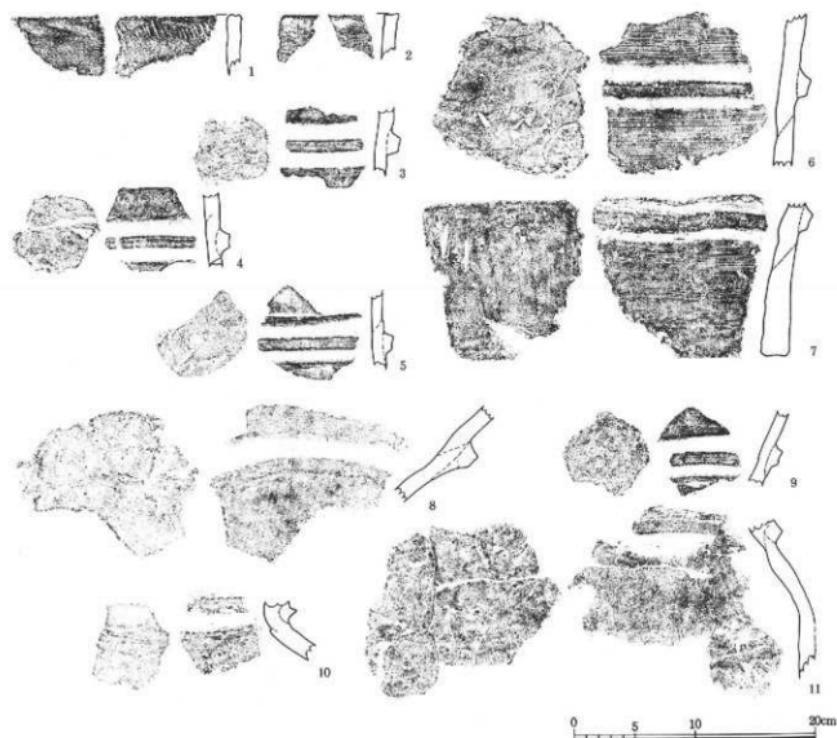


図16 土保山古墳区画溝出土の埴輪1（円筒・朝顔形埴輪）

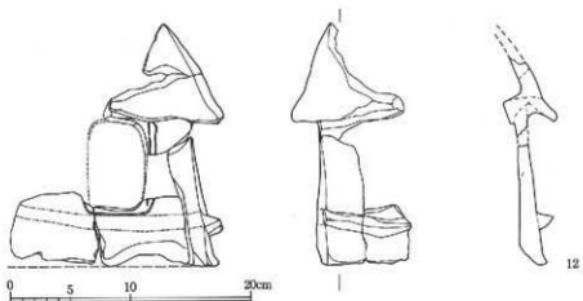


図17 土保山古墳区画溝出土の埴輪2（形象埴輪）

### 形象埴輪（図17・18、図版27）

形象埴輪には家、蓋等がある。12は残存する高さが20cmを測る家である。屋根の形態は、人母屋ないしは寄棟となる。壁は大壁が表現されており、平側の向って右よりに高さ7.4cmの隅丸長方形の孔を穿ち、出入口を表現している。孔の周囲を線刻によって囲み、両長辺側の内側に縦方向の線刻を施している。基底部には断面の形状が三角形の突帯を巡らせており、廻台を表現していると思われるが、その造りは粗雑で突帯の上面は水平ではない。器壁の外面は摩滅しており、その調整手法は不明であるが平滑に仕上げられている。13は蓋

の立ち飾り部である。内枠は2本の線刻で区画している。内枠の中には、透孔と円弧線が認められる。内縁線と内枠線の間にも円弧線が線刻されている。

14の表面は、外郭を縁取った平行する2本の線刻の内方に、7本一組の斜行する線刻で加飾している。肩の文様部の破片であろう。

### 土器（図18、図版27）

須恵器の頸が1点出土している。15の口縁部と底部は欠損しているが、頸部から口縁部が段を有して立ち上がり、底部は若干尖り気味となるであろう。頸部には波状文が、肩部には沈線<sup>2)</sup>と波状文が施されている。この頸はON46型式のものと考えられる。

## 第2節 二子山古墳周濠の調査

### 1. 立地と調査の概要

二子山古墳は土保山古墳の西方約120mに位置する前方後円墳である（図3・4）。

この古墳は宮内庁より三島藍野陵陪塚として、墳丘のみ陵墓参考地になっており、その範囲は金網のフェンスで囲われており、周濠のみ調査を行なった。

現況での規模は、墳丘の全長が約40m、後円部の直径は約20m、前方部の幅は約20mで、墳丘の高さは後円部で約3m、前方部で約2.50mを測る。

今回の調査では、前方部の西側に2ヶ所（第5-A・-B調査地区）、後円部の東側と南側に2ヶ所（第8-A・-B調査地区）の調査地区を設定した（図4・19）。

第5調査地区では周濠の外堤部付近が、第8調査地区では墳丘の基底部がそれぞれ検出されるものと予想された。

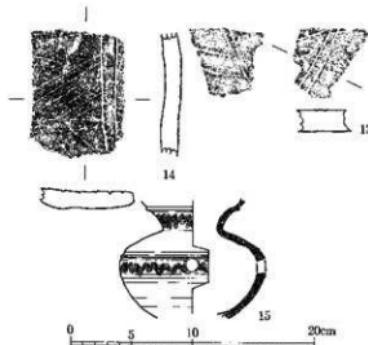


図18 土保山古墳区画溝出土の埴輪と土器  
(形象埴輪・須恵器)

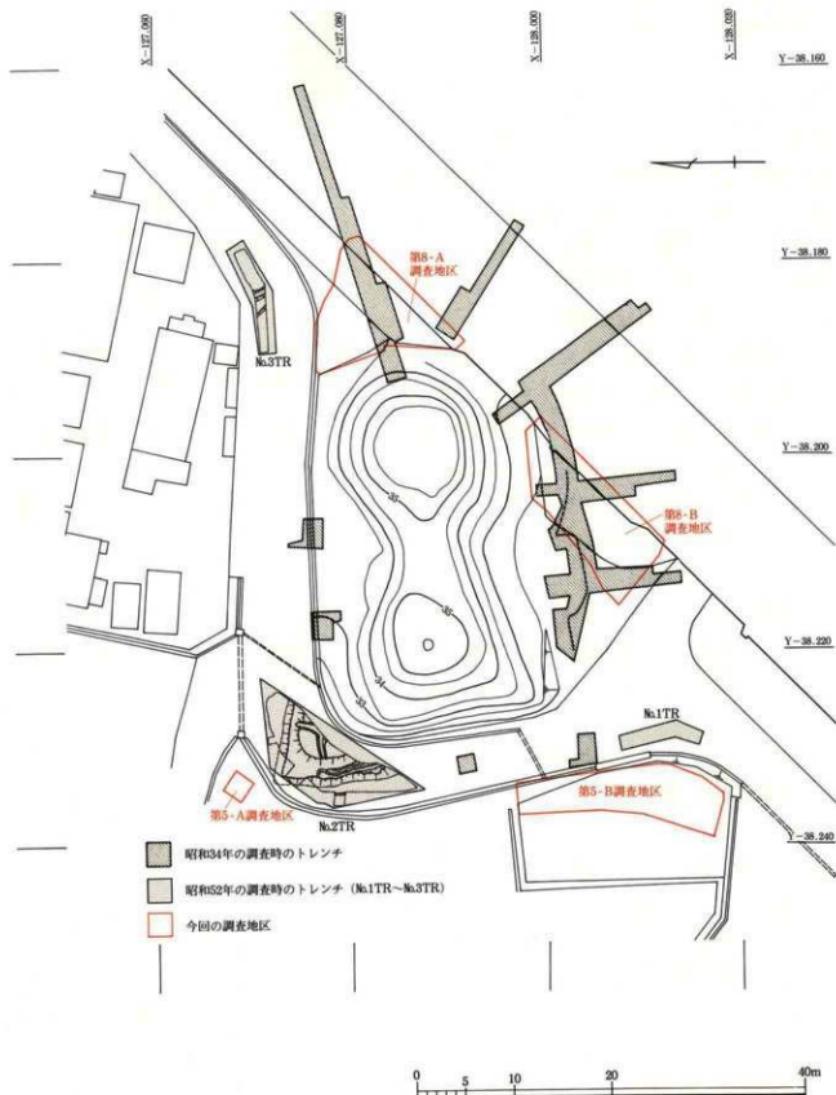


図19 二子山古墳周濠関連の調査地区の位置

## 2. 既往の調査の成果

### 1) 昭和34年の調査 (図19)

名神高速道路の建設に伴い、昭和34年12月に、周濠部の発掘調査が実施されている。調査の結果、墳丘はその周囲が削り取られていることが判明しているが、墳丘の南側のくびれ部では、長さ約7m、幅約3mの造出しが確認され、葺石とともに、形象埴輪片が出上している。周濠の外には外堤部の存在が確認され、墳丘東側の外堤上において、2個の円筒埴輪の基底部が出土している。

### 2) 昭和52年の調査 (図19)

大阪府営水道建設に伴い、試掘調査が行なわれている。二子山古墳周辺の名神高速道路の側道上に3ヶ所の試掘トレンチ (No.1~3 TR) が設定されている。第2トレンチでは前方部の墳丘面を、第3トレンチでは周濠の外堤側の法面をそれぞれ検出しており、墳丘の全長は50m内外、前方部の幅は約30mと推定している。

## 3. 遺構

第8-A調査地区の墳丘側の西半部は、高速道路の擁壁工事による搅乱が著しいが、東半部では、後円部の墳丘の基底部と周濠の一部が確認できた。周濠の外堤部側は高速道路の盛上下にあたるため、確認できなかった。周濠の残存する深さは0.50mを測る。

周濠内の堆積土はシルト層と粘土層が堆積し (図20、図版11)、埴輪片が出土している。最下層は黒色粘土であり、周濠内は帶水状態にあったことが推定される。

第8-B調査地区もその大半が高速道路の擁壁工事や水路の設置工事のために搅乱を受けており、周濠の状況はつかめなかった。しかし、調査地区的西端付近では、埴輪片が出土する包層が遺存していた (図21)。

第5-B調査地区は上水道管の埋設工事等による搅乱を受け、遺構は確認できなかったが、調査地区的東端付近では、搅乱後に埋め戻された土中より埴輪片が出土している。

第5-A調査地区はその範囲が狭いため、2m×2mのトレンチを設定し、地山面まで掘り下げた。トレンチ内は、第5-B調査地区と同様、搅乱後の埋め戻された土が堆積しており、埴輪片が多数出土している。

これらの成果から、二子山古墳の墳丘の全長は約52m、後円部径は32mと推定される。

## 4. 遺物

出土した遺物は瓦器の細片の他はすべて埴輪片である。図化できた埴輪片のほとんどが第5-A調査地区から出土し (1~22・24)、その他 (23・25~27) は第8-A調査地区的第8層

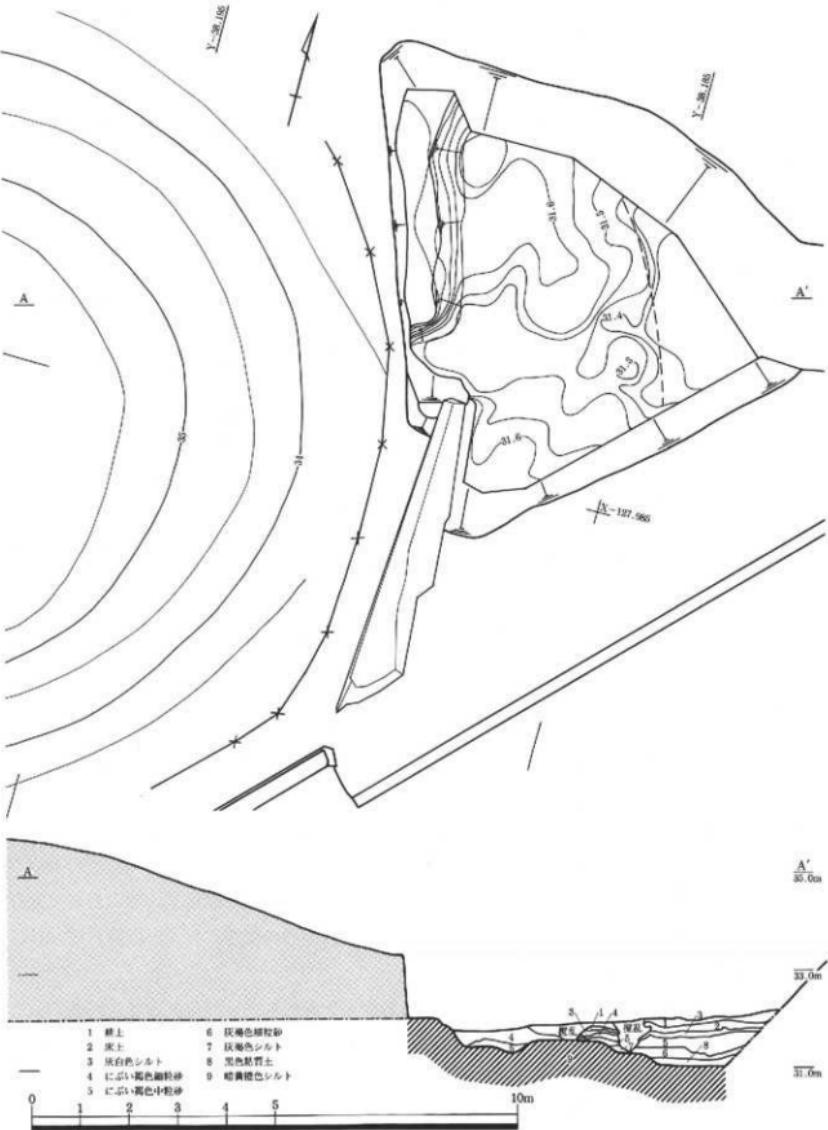


図20 二子山古墳周濠（第8-A調査地区）の平面・断面図

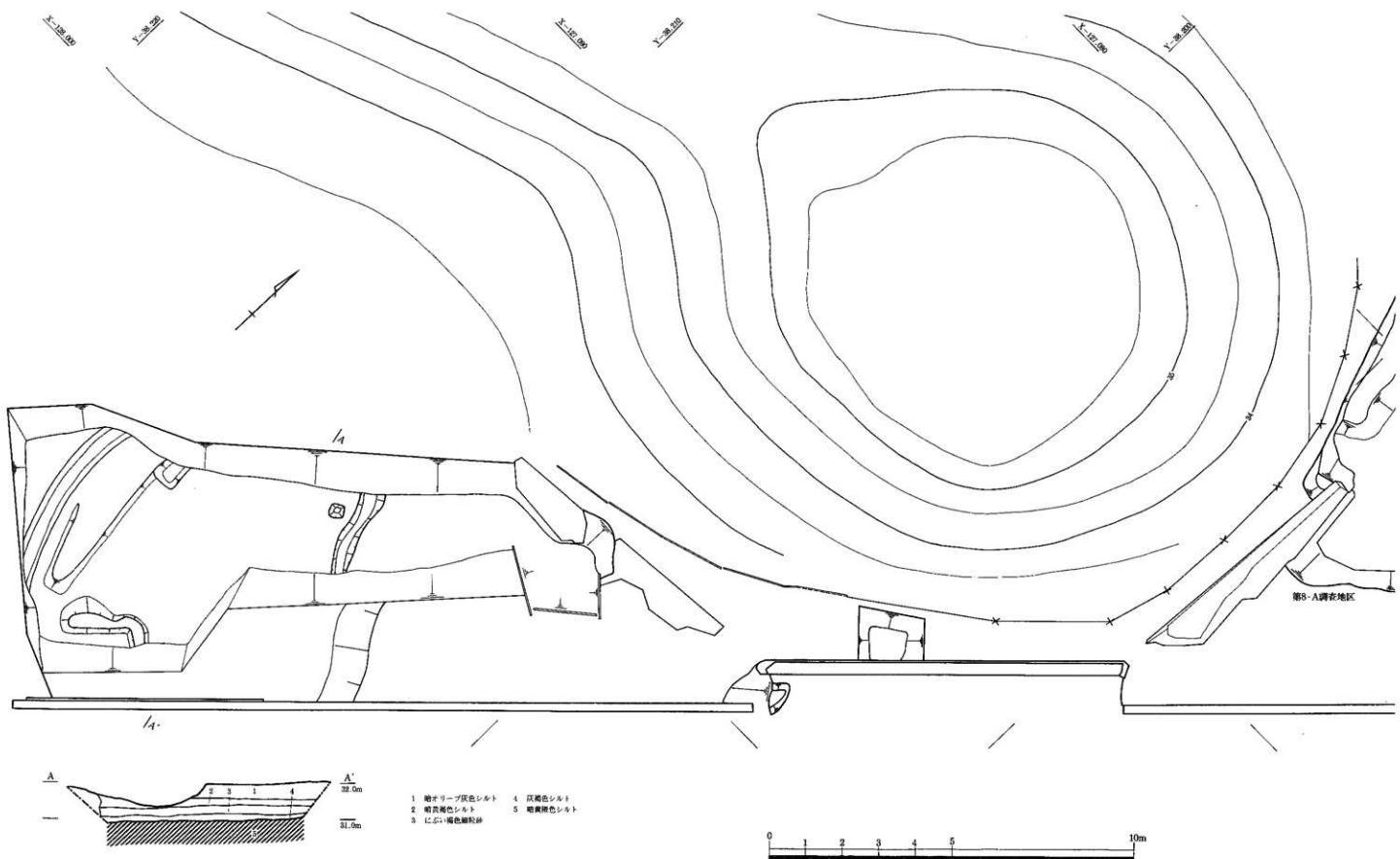


図21 二子山古墳周塚（第8-B調査地区）の平面図

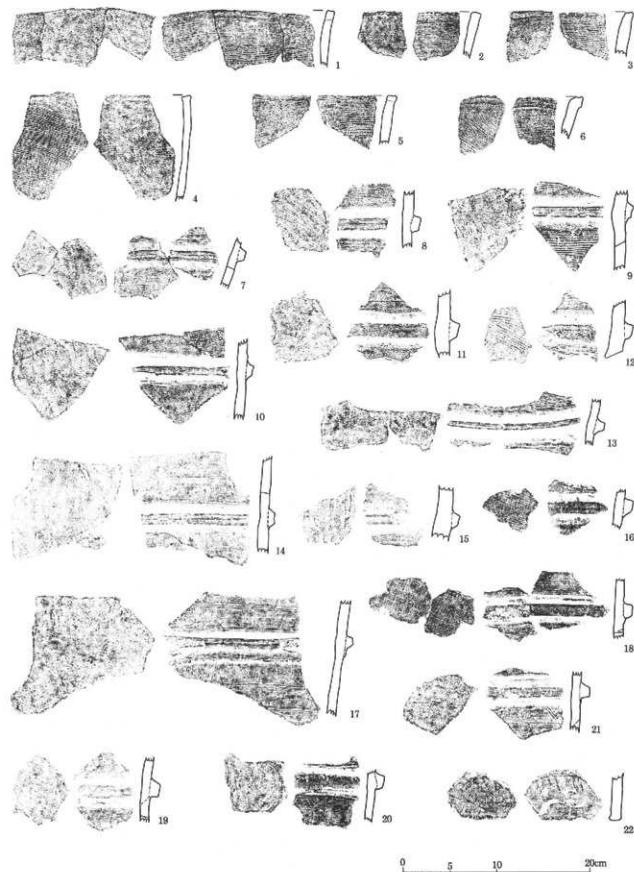


図22 二子山古墳周濠出土の埴輪1（円筒埴輪）

から出土したものである。

遺物の分類等については、第1節の4に挙げた基準による。

円筒埴輪（図22、図版28）

円筒埴輪の外面にみられる、二次調整の手法は土保山古墳出土のものと同様、B種ヨコハケを基調としている。

1～6は口縁部で4・5がI類、3がII類、1・2がIII類、6がV類に属する。1の外面にはベンガラの塗布がみられる。

7～21は胴部片、22は基底部片である。A類の突帯がつくもの（7～15）が多い。16～18にはB類、19～21にはC類の突帯がつく。7・21は外面のみ、13は両面にベンガラの塗布がみられる。

朝顔形埴輪（図23、図版28）

23は口縁部片でI a類に属する。24は擬口縁が観察でき、分割成形されたものであろう。25・26は頭部片で、断面の形状が三角形の尖った突帯を有する。

形象埴輪（図23、図版28）

27は蓋形埴輪の笠部片である。外面にはベンガラの塗布がみられる。笠縁部には断面の形状が台形となる扁平な突帯がつく。

### 第3節 塚廻り古墳の調査

#### 1. 立地と調査の概要

塚廻り古墳は二子山古墳の南方約70mに設定された第4-A調査地区で新たに発見された（図4・24、図版13・14）。第4-A調査地区のほぼ全面が建物の基礎に覆われており、周辺での地山面の標高から判断して、遺構の残存する可能性が低いと予想されたが、埴輪片を多数含む溝が確認され、主体部は削平を受け消失しているが、その形状から方墳の周溝が残存したものであると判断した。この古墳は新規に発見された古墳であるため、大阪府教育委員会と高槻市教育委員会との協議の結果、小字名を用いて塚廻り古墳と命名した。

第4-A調査地区内では、周溝のコーナー部は確認されていないが、隣接する第4-C調査

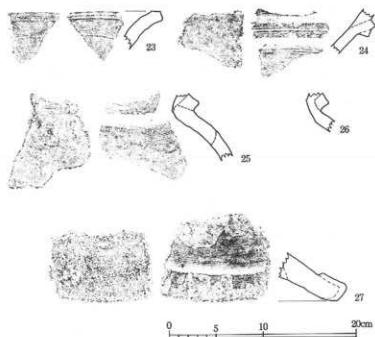
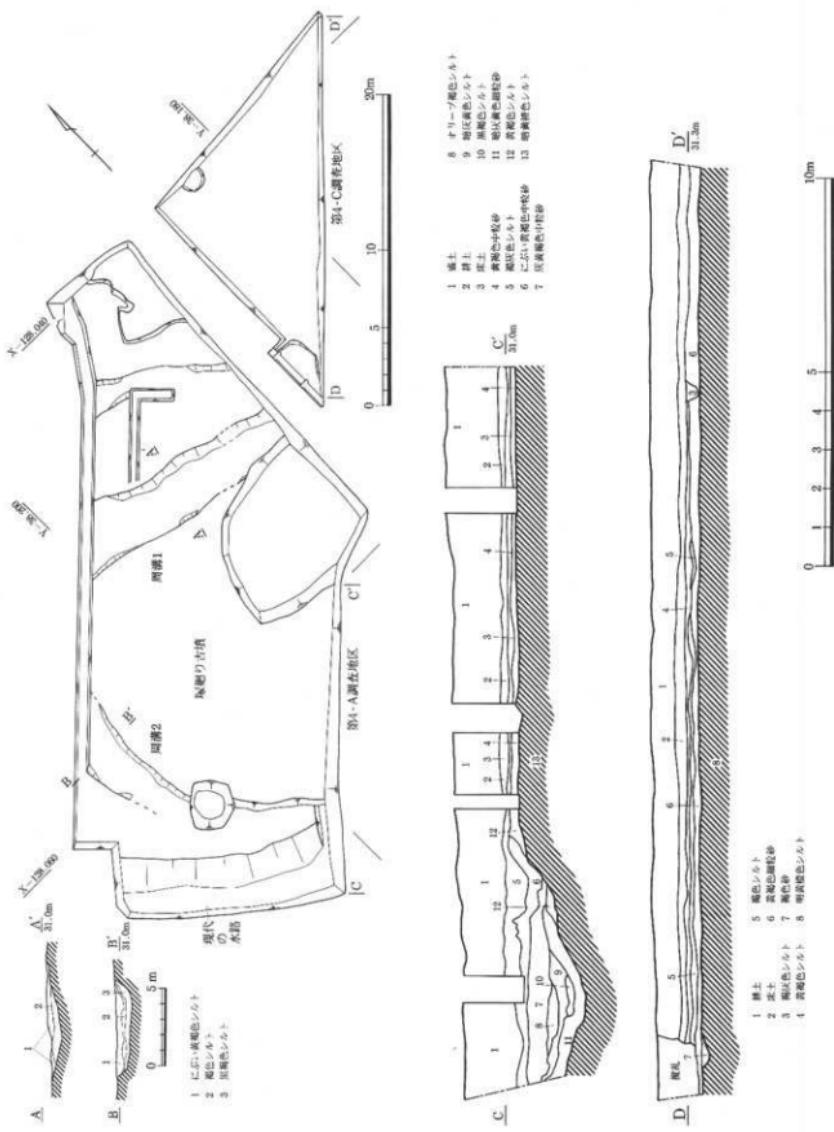


図23 二子山古墳周濠出土の埴輪2（朝顔形埴輪・形象埴輪）



地区の西端付近でコーナー部の痕跡と思われる埴輪片を含む落ち込みを確認している（図4・24、図版13・14）。

## 2. 遺構

### 1) 周溝（図24、図版14）

北側の周溝1の残存する長さは約12m、幅は約3.0m、深さは約0.40mを測る。西側の周溝2は調査地区的西端付近で、現代の水路によって削られており、残存する長さは約12m、幅は約2.5m、深さは約0.40mを測る。前述した埴輪片を含む落ち込みを周溝のコーナー部の痕跡とするならば、この古墳は一辺約20m程度の方墳と考えられる。

周溝の堆積土はシルト質で、形象埴輪を主体とする多数の埴輪片が出土している。

第4-A調査地区的北端付近では、埴輪片が少量出土する溝が周溝1と平行して検出されており、残存する長さは約7.0m、最大幅は約1.5m、深さは最深部で0.15mを測る。埋土は単層で、周溝の堆積土とほぼ同質である。出土した埴輪の全てが摩滅した細片であり、周溝より出土したものと比較して遺存状態は悪く、細片で占められるが、その特徴は周溝出土のものと同種である。溝の性格については不明であるが、塚廻り古墳築造の際に何らかの要因で残された痕跡であると考える。

### 2) 墳丘

墳丘は完全に削平を受けており、遺存していなかった。第4-A・-C調査地区的堆積状況をみても（図24）、墳丘盛土が流出し再堆積したような状況はみとめられなかった。

## 3. 遺物

周溝より出土した埴輪はコンテナ20箱程度で、重量約135kgである。埴輪の大半にベンガラの塗布がみられる。埴輪のほかに、須恵器の杯蓋・高杯・甌の破片が1点づつ出土している。埴輪の分類については、第1節の4に挙げた基準による。

### 円筒埴輪（図25～28、図版29～31）

1～35は口縁部片である。I類のものが最も多く（6～22）、1～5がII類、23～35がIII類に属する。29の外面にはナナメハケが施されている。1の外面にはS字を横にしたようなヘラ記号が2段に線刻されている。

26以外はすべてベンガラが塗布されており、10は外面のみ、その他は内外面にみられる。

36～55は胴部片である。55は周溝1と平行する溝から出土している。突帯が遺存している1～53のうち、1～52はA類、53はC類の突帯がつく。50・54・55の外面にはヘラ記号が線刻されている。37・39・41・44・45・47・50・57は外面のみ、38・40・42・53・54・55は内外面に

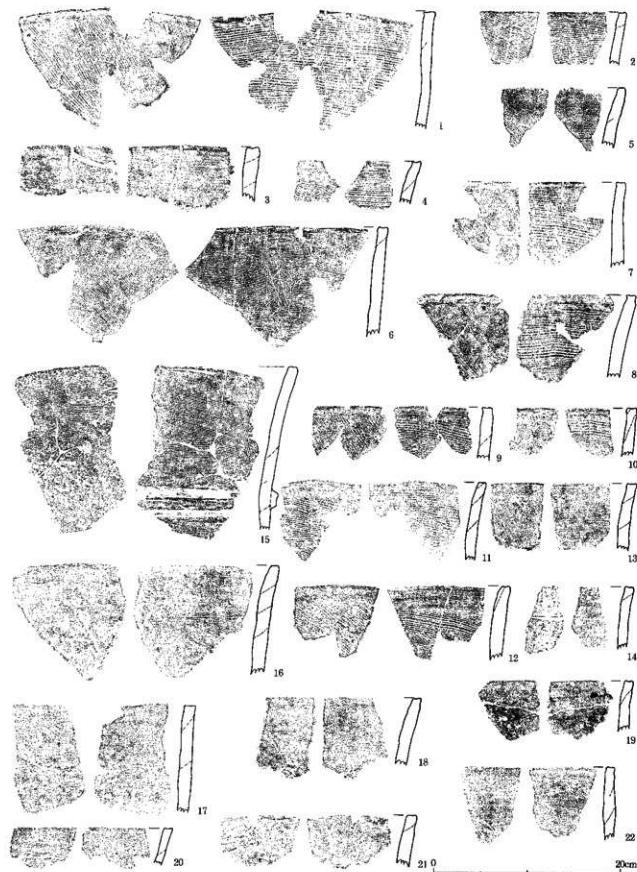


図25 塚越り古墳周溝出土の埴輪1（円筒埴輪）

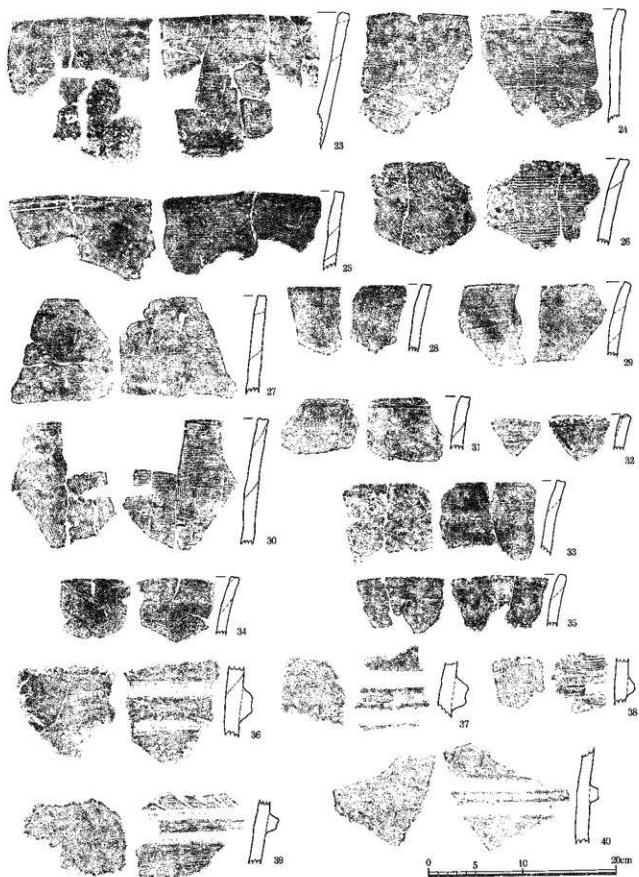


図26 塚廻り古墳周溝出土の埴輪2（円筒埴輪）

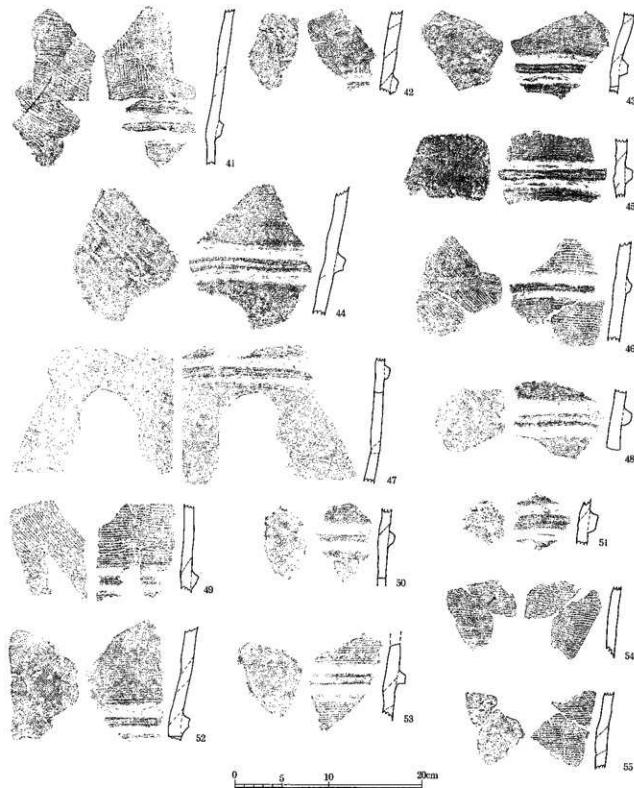


図27 塚廻り古墳周溝出土の埴輪3（円筒埴輪）

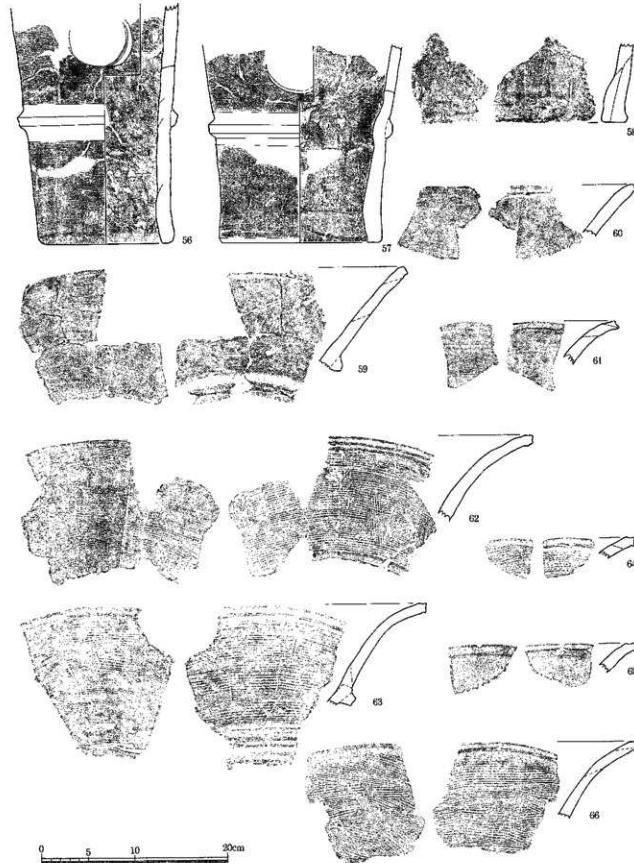


図28 塚廻り古墳周溝出土の埴輪4（円筒・朝顔形埴輪）

ベンガラの塗布がみられる。

56～58は基底部である。56・57は底径と基底部の高さが判明しA類の突帯がつく。両者とも一段目に円形のスカシを2方向に穿つ。56の底径は14.4cm、基底部の高さは12cmを測る。57の底径は17.2cm、基底部の高さは11cmを測る。57の外面にはベンガラの塗布がみられる。58の底部での厚さは約3cmで、56・57と比べて2倍程度厚くなる。

朝顔形埴輪（図28～30、図版32・33）

口縁端部の形状が明らかである59～71のうち、59・60はI a類、61・67～69はII a類、63～

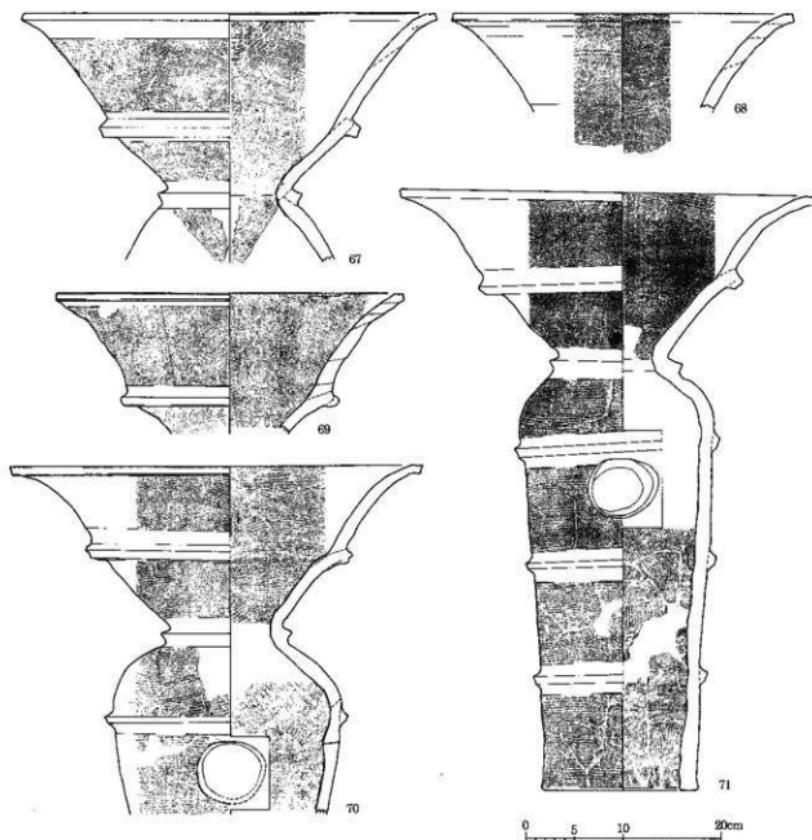


図29 塚廻り古墳周溝出土の埴輪5（朝顔形埴輪）

66はII b類、70・71はII c類に属する。71は完形に復元でき、口縁部径は42.5cm、器高は61.3cmを測り、胴部の突帯は3条で、二段目にのみ円形のスカシを2方向に穿つ。肩部には円筒埴輪の1（図25）と同じヘラ記号が線刻されている。

70は胴部の2/3以上が欠損しているが、71とほぼ同じ大きさのものであろう。71と同じでS字状のヘラ記号を2段に線刻していたと思われるが、その個所が欠損しているため、1段のみ遺存している。

63・67・69～71の口縁部の断面には分割成形を示す擬口縁がみとめられ、67・70・71の頸部には鋭く突出した突帯がつく。

72～76は一次口縁部の破片で、74以外には擬口縁がみとめられる。72のみ突帯の高さが低く扁平となる。

77～79は肩部、80は胴部の破片である。77～79の頸部には鋭く突出した突帯がつく。

ベンガラは61・65以外すべてにみられ、74・77～80は外面のみ、他はすべて内外面に塗布されている。

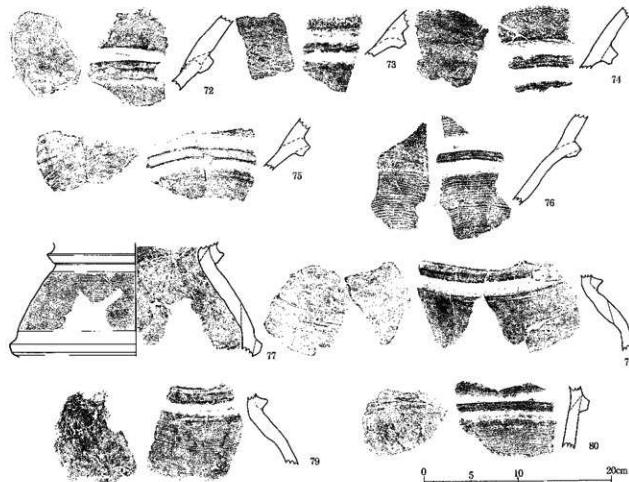


図30 塚掘り古墳周溝出土の埴輪6（朝顔形埴輪）

形象埴輪（図31～35、図版34～43）

家・船・蓋・盾・剣・人物・動物がある。

81～87は家形埴輪で、81～85は堅男木である。85以外は完形で、81～83の下片中央部には削り込みがみられる。86・87は屋根の破片である。87は軒先部で、端部から上方に約6cmの個所に横方向の線刻を施し、下方に垂直方向の線刻が2本遺存している。86には網代葺の表現がみられる。

88～98は船形埴輪の破片である。<sup>10)</sup>88の正確な部位は不明であるが、堅板もしくは床板の破片の可能性がある。片面の中央には、残存する長さ6cm、幅は3cmを測る長方形の粘土が剥がれた痕跡が遺存している。89・90は隔壁である。90の下部には床板との接合を安定させるために付け足したと考えられる粘土帯が遺存しており、89には粘土帯が剥がれた痕跡がみられる。

91・92は刳舟部の破片である。舳艤の区別は判然としないが、大きさや色調の違いから判断して両者は別個体である可能性が強い。

93～98は舷側板である。93にはオールの支点（ピボット）と考えられる突起が1個遺存して

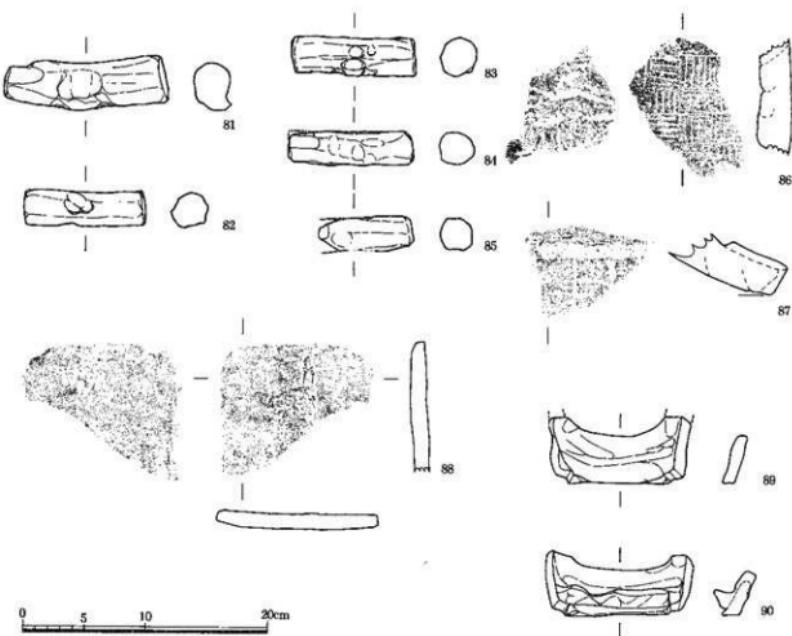


図31 塚建り古墳周溝出土の埴輪7（形象埴輪）

いる。94～98は高く反り上がる端部の破片である。94の内面にはU字型の突起が遺存しており、95～97にもその痕跡がうかがえる。94～96・98の外面には円と小さな方形部で構成されるヘラ記号を線刻している。96の外面のみにベンガラの塗布がみられるが、その他も全てベンガラが塗布されていたのであろう。

U字型の突起についてであるが、端面を観察するかぎり、接続していたものから剥離した痕跡は認められず、焼成後に何かの部分と組合せたのであろう。

これらの破片から全体の形状や大きさを復元することはできないが、各破片の大きさや焼成具合などから観察すると、少なくとも2個体分の破片がみとめられる。その根拠として、剖舟部の91・92をその形状で比較すると、91は上面が平らであるのに対して、92のそれは残存部の中程から先端部にかけて上方に反る特徴をもつ。焼成具合や外面の色調で比べても違いがみとめられ、両者は別個体の可能性が高い。これらの特徴から判断して、剖舟部の91とオールの支点（ビボット）の93、舷側板の96が、そして正確な部位は不明であるが88と隔壁の89・90、剖舟部の92、舷側板の94・95・97・98がそれぞれ同一個体であると考えられる。

今回出土した船形埴輪はその破片をみるとかぎり、準構造船をかたどったものと考えられ、剖舟部の形状から、類例としては京都府竹野郡赤栄町所在のニゴレ古墳出土のものを挙げることができるが、剖舟部と高く反り上がる特徴をもつ舷側板との接合関係や先端部の構造は不明であるため、全体の構造は判然としない。

99～110は蓋である。99・103・104・106～110は蓋立ち飾り部本体の破片、100～102・105は鱗部の破片である。すべて2本の線刻（外縁線・内縁線）で外郭を縁取っている。本体部は内枠も2本の線刻で区画し、内枠の中には円弧線がみとめられ、99・106・108には方形のスカシが遺存する。内縁線と内枠線の間に円弧線が線刻されている。

111～113は盾面の文様部の破片である。111は2本の線刻によって区画された幅約2cmの文様帶に、高さ約3cmの綾杉文を連続させ、文様帶の内側には高さが10cm以上となる大振な綾杉文がみられる。外面にはベンガラが塗布されている。112は2本の外郭線の内側の線を綾杉文の中心線とし、綾杉文の高さは約3cmを測り、113の綾杉文の高さは3cm以上となる。

114～127は勧の破片である。114～122は背板の破片で、114～117はレリーフ状になった円形の飾り文の部分である。

118は背板の鱗部の破片である。2本の線刻で外郭を縁取っている。外面にはベンガラが塗布されている。122はわずかに遺存する文様をみるとかぎり、蓋の立ち飾りのようであるが、線刻は片面だけに施しており、勧の背板の一部であろう。

119・120は矢筒、121は矢筒の側面と背板の破片であろう。119・120は箱形を呈すると思われ、119の前面の上部には縦方向にのびる線刻が数条みられ、矢束を表現したものと推定され

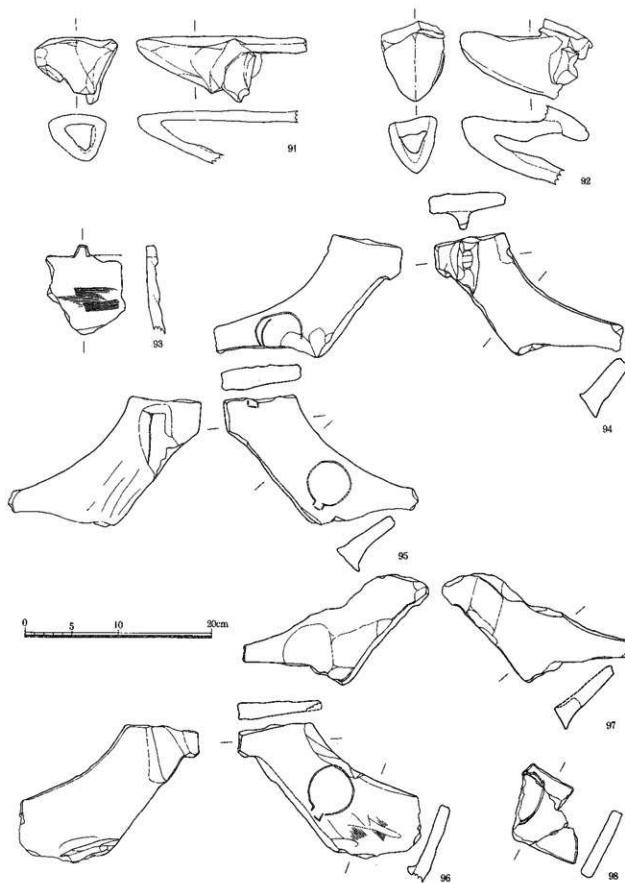


図32 塚廻り古墳周溝出土の埴輪 8 (形倉埴輪)

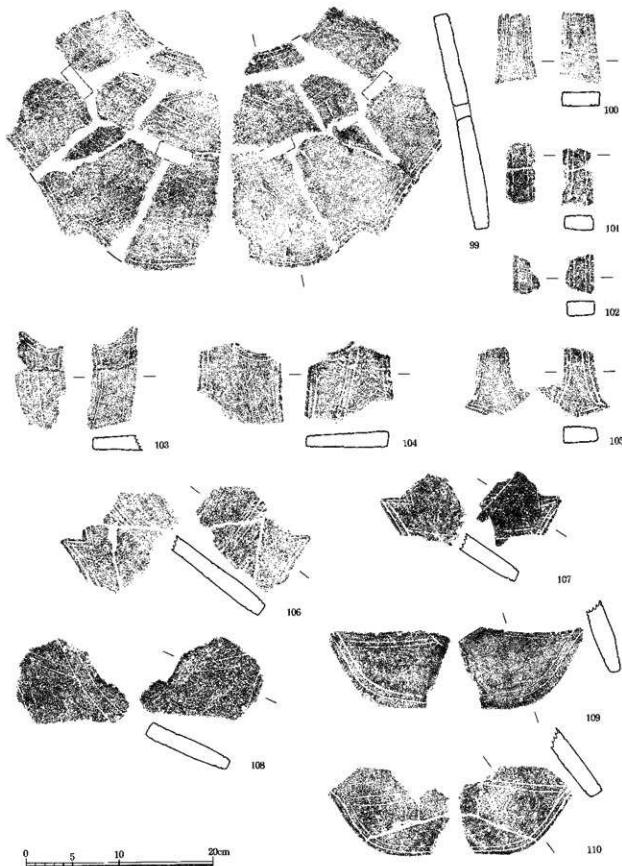


図33 塚墓古墳周溝出土の埴輪9（形象埴輪）

るが、鎌の部分は欠損しているため、断定はできない。120は裾広がりになっており、矢筒の下半部と推定される。外面にはベンガラが塗布されている。121は矢筒の側面と背板に梯子状の線刻がみられ、楕円形を呈すると思われるスカシが穿たれている。

123～127の部位については判然としないが、123・124・127の文様は120・121の文様と類似する箇所がみられ、矢筒部の破片である可能性がある。125と126は同一個体で、削り出しによると思われる扁平な突帯で、矩形を表現したものであろう。仮に矢筒部とするならば、断面の形状からみて、背板との段差をつけずに、簡略化したものと思われる。

128～131は人物である。128は腕から手にかけての破片で、遺存部では内弯している。指先はすべて欠損しており、遺存部での各指の表現は稚拙であるが5本指であることはわかる。外面にはわずかにベンガラが残っている。

129・130は腰付近の破片である。129は腰紐の表現はみられないやや括れた腰から裾が2段に開く。130は帯の中央に横位の線刻を引き、線上には等間隔に刺突文を施しており、革製の帯を表現したものであろうか。

131は草摺である。2本の線刻を境に上部は格子文、下部には鋸歯文が施されている。

132～141は動物である。132は鶏形埴輪の頭部である。上方に高くのびる鶏冠をもち、残存する高さは約20cmである。目は円形の線刻の内側に竹管文を刺突して表現している。耳は側面に円盤状の粘土を貼りつけて表現しており、その中央部を細い竹串のようなもので刺突し、正面からみて右の耳には1個所、左の耳には2個所施されている。鶏冠は外郭を線刻で縁取り、中央部に竹管文の刺突を連続させている。鶏冠と頭部本体の境には梯子状の線刻を頭部のラインに沿って施している。頭部と頸部の境付近にも梯子状の線刻がみられる。嘴と鼻は線刻により写実的に表現され、正面からみて、嘴の左下方には細長い粘土塊を貼りつけ、肉髯を表している。

133～136は鳥形埴輪の羽根の破片である。133～135は尾羽、136は手羽である。外面にはヘラ描きの線刻を施している。135は真上からみた尾羽の中央を鶏冠状に誇張させている。

137～141は馬形埴輪である。137は鬣で細部をヘラ描きの線刻で表現している。138は尻尾である。幅約6mmの細長い粘土紐を螺旋状に貼りつけて、束ねた尻尾を表現している。

139～141は馬具である。139は鞍で、前輪の一部が遺存し、鞍覆を刺突文と梯子状の線刻で表現している。

140・141は障泥の破片で、断面の形状が三角形になる幅約1cmの粘土紐を、横長の楕円形状に貼りつけて輪轡を表現している。

土器（図36、図版43）

須恵器の蓋杯の身・高杯・匙が1点づつ出土している。蓋杯の身である142のたちあがりは

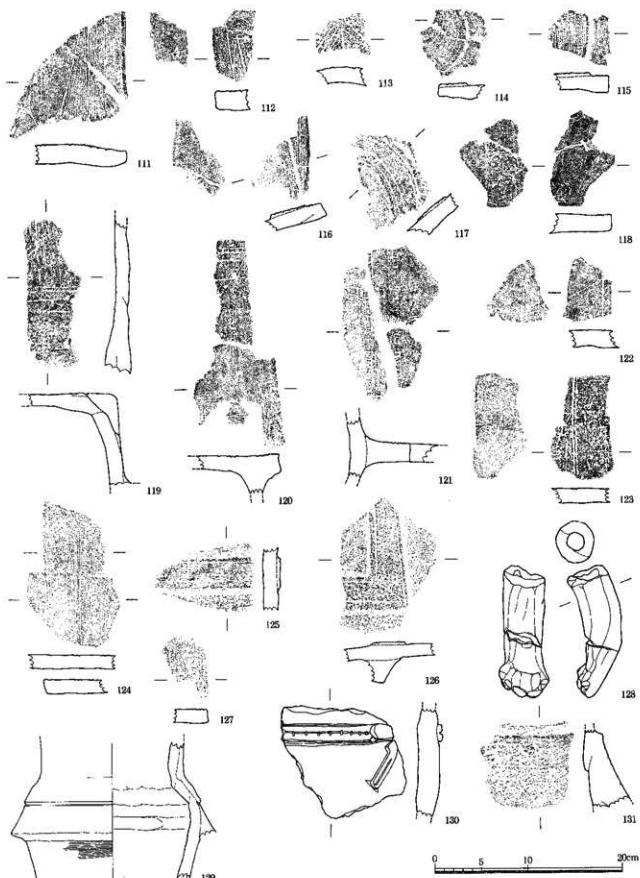


図34 塚掘り古墳周溝出土の埴輪10(形象埴輪)

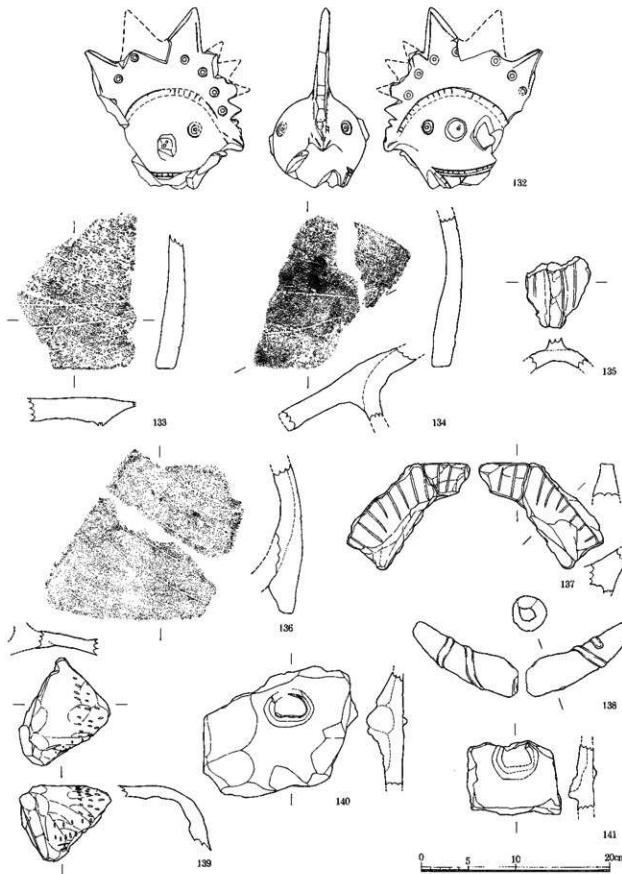
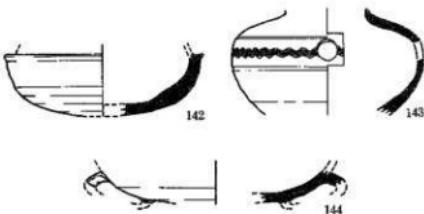


図35 塚櫛り古墳周溝出土の埴輪11(形象埴輪)

欠損するが、やや内傾気味である。受部は外上方に短くのびる。

143は甌で、肩の張る肩部には波状文が施されている。これらはON46型式のものと考えられる。

144は高杯の杯部の破片で底部の下方に断面の形状が円形の把手がつく。



#### 第4節 関鶴山古墳群A-1号墳の調査

図36 塚廻り古墳周溝出土の土器

##### 1. 立地と調査の概要

関鶴山古墳群A支群は高槻市氷室町5丁目に所在し、奈佐原丘陵の最も東に位置する尾根の先端部に立地しており、尾根の東側には南平台丘陵との境となる女瀬川が流れている（図5）。A-1号墳の周辺には前方後円墳とされる關鶴山古墳（図3-22）を含む2基の古墳の存在が知られているが、詳細は不明である。

高速道路を挟んで、上り線側と下り線側の2ヶ所に調査地区（A・B調査地区）を設定して試掘調査を先行させた。その結果、下り線側のB調査地区において横穴式石室を1基発見したため、引き続き本調査に移行したが、調査地区内での横穴式石室の発見は1基のみとなった。この成果をうけて、大阪府教育委員会と高槻市教育委員会との協議の結果、石室が立地する丘陵を關鶴山古墳群のA支群とし、この古墳は、關鶴山古墳群A-1号墳と命名した。

##### 2. 遺構

###### 1) 主体部（図37・39、図版15・16）

主体部は南東に開口する横穴式石室である。石室床面の標高は48.50mを測り、石室の長軸方向はN-33°-Wになる。奥壁から羨道方向をみて、左側壁の石材が消失しているため、石室の構造を確定できないが、羨道部付近の床面には石材の痕跡らしきものが6個所並列してみられ、奥壁から羨道方向をみて、左側にある2個所の痕跡を左側壁の基底石と袖石の痕跡と考えるならば、左片袖の石室の可能性がある。

石室の掘方はその平面形状が隅丸の長方形であったと考えられ、残存する長さは約5.0m、幅は約2.80mを測る。

石室の規模は内法で、残存する長さが約4.0m、幅は約1.80mを測る。

石室の石材は花崗岩と見られる自然石を使用している。奥壁は基底石のみが遺存し、残存する高さは0.26mを測る。基底石は7石で構成され、各石材を横長に据えている。

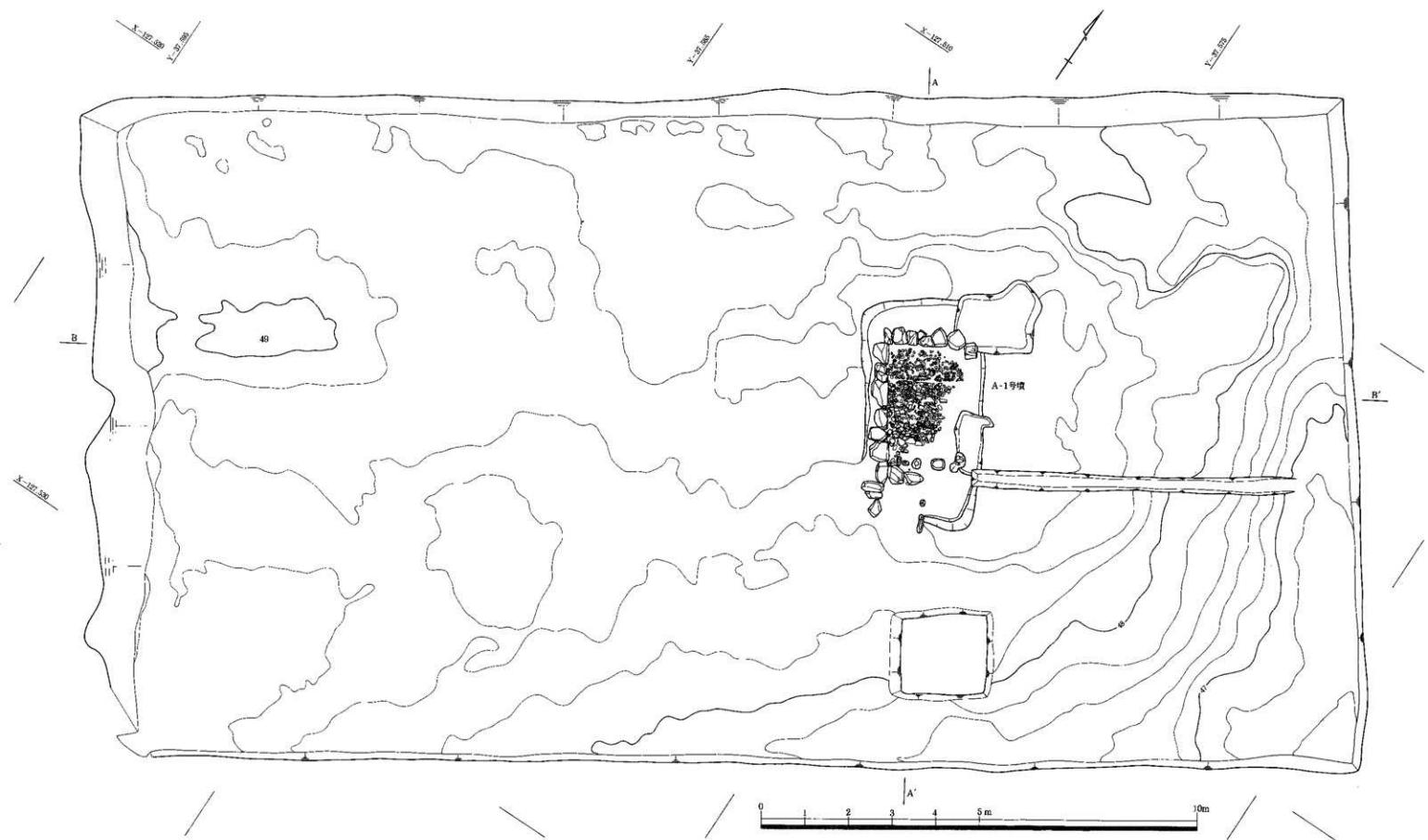


図37 開鶴山古墳群A調査地区の平面図

右側壁の基底石は10石が遺存し、奥壁から3石目は2段目まで遺存しており、残存する高さは0.40mを測る。石材の据え方は横長を基本としているが、羨道側から2石目と3石目及び6石目は他の石材とは逆方向に据えている。奥壁から羨道方向に向かって約3.0m付近には、基底石に使用されているものとほぼ同様な大きさの石材が2石、石室の短軸方向に並列して遺存しており、閉塞石の可能性がある。もしこの2石を閉塞石と考えるならば、掘方の規模等から考えて、羨道部は短いものであったと推定される。

石室の床面には直徑が5~20cm程度の小礫で構成される石敷が施されている。敷石の石材は石室の石材と同様花崗岩と思われる自然石を使用している。

奥壁から羨道方向に約80cmのところに、石が敷かれていらない幅5cm程度の隙間が奥壁と平行して細長くみられる。この隙間を境に羨道方向に向う程、礫の径が大きくなる傾向が見られるが、棺を奥壁に接するように、羨道側から見て横位に据えたために、生じた隙間であろうか。

### 3. 遺物

この古墳に伴う遺物は石室の床面付近の堆積土より出土しており、原位置を保っているものはない。土器、金属製品、石製品が出土している。

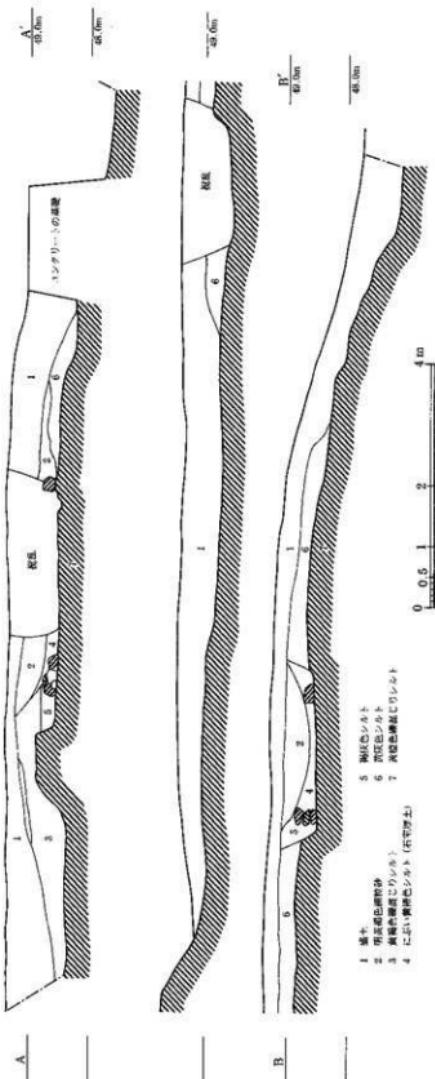


図38 開鶴山古墳群A調査地区の断面図

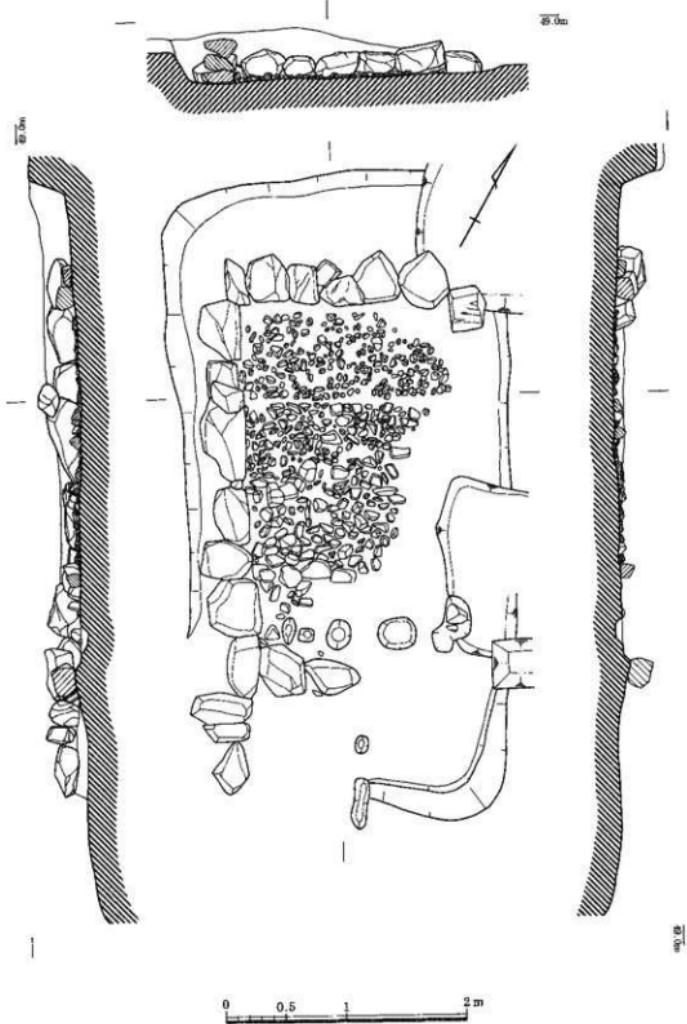


図39 開鶴山古墳群A-1号墳の石室

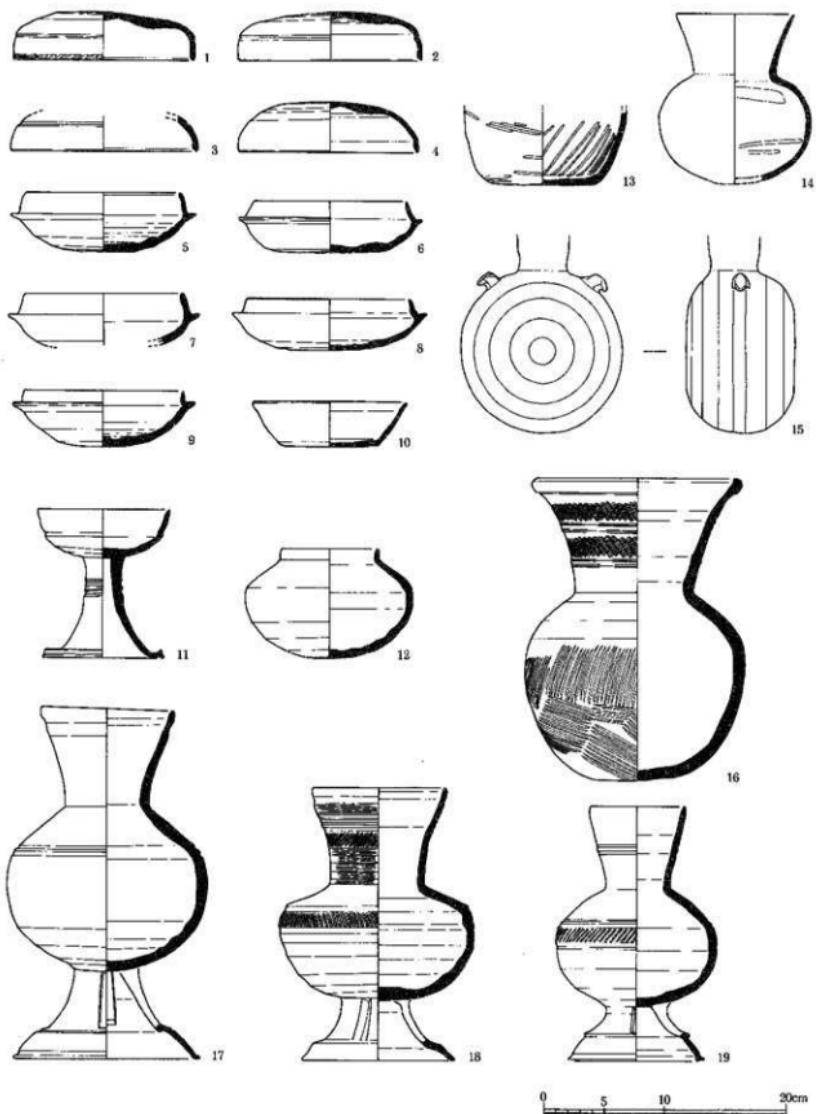


図40 開鶴山古墳群A－1号墳石室出土の土器

1) 土器 (図40、図版44・45)

須恵器 (1~12・15~19) と土師器 (13・14) が出土しており、須恵器は杯蓋が4点、杯身が6点、高杯が1点、提瓶が1点、短頸壺が1点、広口壺が1点、台付壺が3点出土している。土師器は杯が1点、壺が1点出土している。

1~4は杯蓋である。天井部と口縁部の境に浅い凹線が巡り、口縁端部がわずかに段を有するものと (1~3)、凹線が消滅し、口縁端部を丸くおさめている4の2種類がある。1の口縁端部外面には浅い刻目が施されている。1~3はMT85型式、4はTK43型式とみられる。

5~10は杯身である。5~8のたちあがりはやや高く内傾し、9のたちあがりは短く、ほぼ垂直である。10の体部はやや直線的に外傾し、端部は丸くおさめている。5はMT85型式、6~7はTK43型式、8・9はTK209型式、10はTK217型式とみられる。

11は無蓋高杯である。口縁部が内弯気味に立ち上がる杯部をもち、基部に3条の凹線を施し、スカシは穿たれていない。

12は短頸壺で、大きく肩の張った体部に短くほぼ垂直にのびる口縁部をもつ。

15は提瓶である。肩部に鉤状の把手が付く偏球形の体部に、外反気味に上方にのびる口頸部をもつが、口縁端部は欠損している。

16は広口壺である。やや肩の張る球形の体部に大きく開く口頸部をもつ。

17~19は台付壺である。17は球形に近い体部に2方向に1段のスカシを穿つ脚部が付く。18は肩の張る扁平な球形の体部に3方向に1段の方形のスカシを穿つ脚部がつく。口頸部の中位と体部の上位に刺突文を施している。19は球形の体部に2方向に1段の方形スカシを穿つ脚部がつき、体部の中位に列点文を施している。

13は土師器の杯、14は壺である。13の口縁端部は欠損しているが、平らな底部から内弯気味に体部がのびる。底部は平らで、外面は丁寧にヘラ磨きがなされ、内面には放射状の暗文が施されている。14は球形の体部に外反気味に上方に開く口頸部がつく。

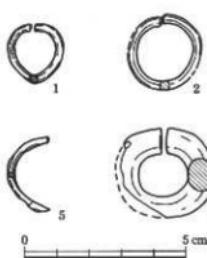


図41 開鶴山古墳群A-1号墳石室出土の装身具

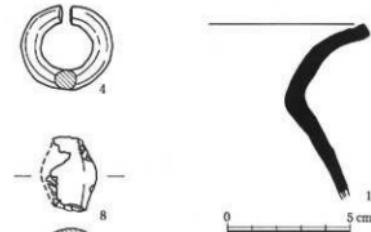


図42 第6-E調査地区発見の  
土壌出土の土器

## 2) 装身具(図41、図版46)

金環が7点と棗玉が1点出土している。1は長径1.9cm、短径1.7cm、断面径0.2cmを測る銀製で中実のものである。2・5は中実で銅芯のみ遺存しており表面の加工は不明である。2は長径2.4cm、短径2.3cm、断面径0.3cmを測り、5は半分以上が欠損しており、断面径は0.2cmを測る。3・4は銅芯銀張で中実のものである。長径は両方とも2.8cmで、短径は3が2.7cm、4が2.6cmを測る。6・7は表面に金がわずかに残る、金銅製である。残存する長径は6が2.7cm、7が2.9cmである。断面の形状はともに楕円形で、断面径は0.8cmである。8は琥珀製の棗玉である。長さは2.3cmで、直径約0.25cmの紐通しの小穴が穿孔されている。

## 第5節 古墳以外の遺構と遺物

ここでは前述した古墳以外の遺構について扱う。遺構は、土壙1基、土器棺墓1基、溝が1条がある。

### 1. 土壙(図43、図版18)

第6-E調査地区において、土保山古墳の区画溝内で検出している。

平面形はいびつな方形で、長径約1.50m、短径約1.20m、深さは最深部で約0.30mを測る。

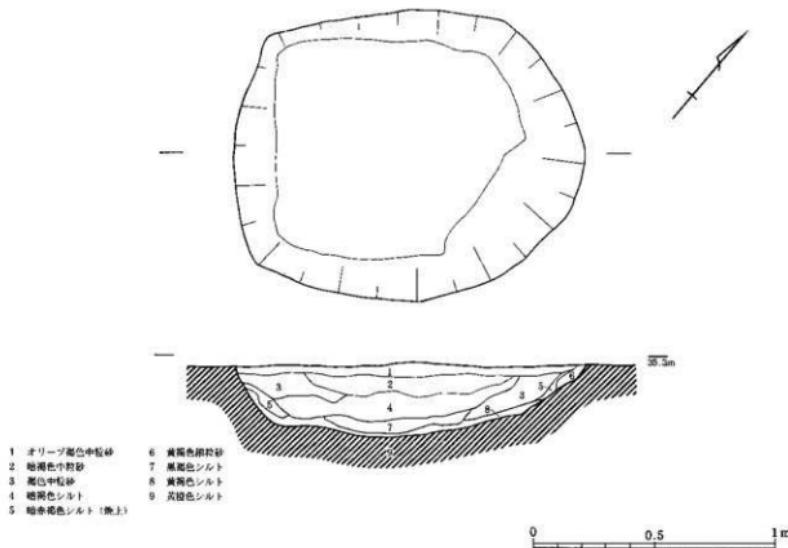


図43 第6-E調査地区発見の土壙の平面・断面図

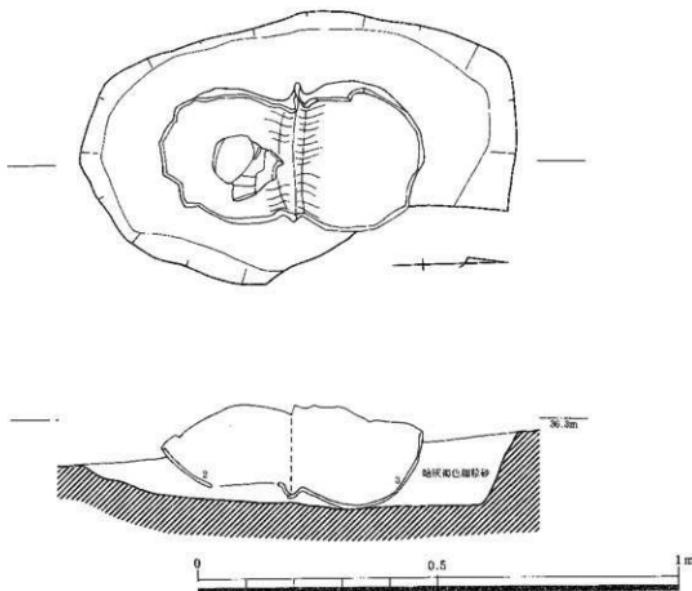


図44 第9調査地区発見の土器棺墓の平面・断面図

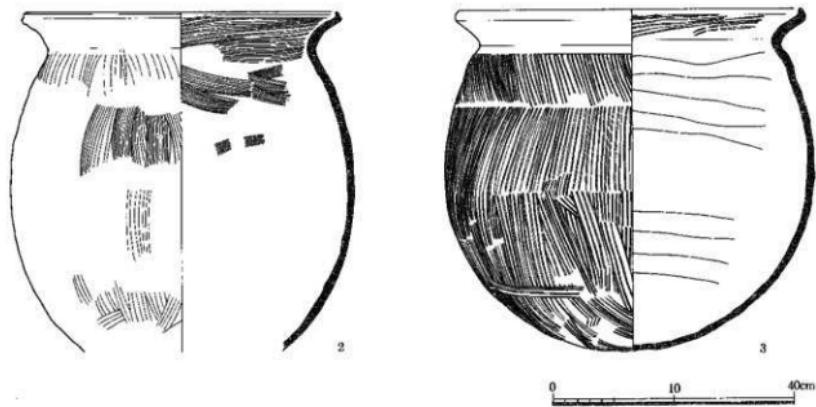


図45 第9調査地区発見の土器棺

壁面が受熱して赤変している。

遺物は図43に示す第9層より土師器の甕の破片が出土している（図42、図版46）。

1の口頸部は短く外反し、口縁端部は、上方にわずかに肥厚して丸くおさめている。体部は肩の張らない長胴形を呈していたものと思われる。この土壌の推定される時期は、出土した土師器から7世紀中頃と考えられる。

## 2. 土器棺墓（図44、図版18）

第9調査地区の北東端付近で検出している。平面形は不整な橢円形で、東隅付近は擾乱を受け削られている。残存する長径は約1.80m、短径は約1.10m、深さは最深部で約0.30mを測る。2個体の土師器の甕の口縁を合わせて寝かせており、2・3はともに肩の張らない球形の体部に屈曲した口頸部がつく。出土した土師器から判断して、この遺構の時期は7世紀中頃と考えられる。

## 3. 溝（図8・47・48、図版17・18）

第6-F調査地区の西端付近と第10調査地区的中央付近、そして、高速道路を挟んで第3調査地区（図4）の西端付近の3箇所で検出している。ほぼ南北方向に走行する溝で、第6-F・10調査地区での残存する長さは約22m、最大幅は2.0m、深さは最深部で0.80mを測る。

溝内の堆積土については、土層観察用のあぜが激しい湧水により崩落したため、詳細は述べられないが、小礫を含む砂で構成されており、遺物は全く出土していない。

第3調査地区での残存する長さは約20m、最大幅は3.30m、深さは最深部で0.70mを測る。

堆積土の上層は褐色系のシルト層で安定しているが、下層は砂である（図47）。

遺物は第1・2層より埴輪や瓦器碗の細片が出土している（図46、図版46）。4は瓦器碗の底部片で、口台は安定感のあるもので、直径は4cmを測る。

溝の掘削時期については言及できないが、瓦器碗を見るかぎり、12世紀中頃には溝は埋まっていたものと推定される。この溝の西側へ約5mの位置には水路の管が溝と同じ方向に埋設され、現在でも灌漑用の水路として機能していることを考えれば、この溝も同様の性格をもっていたものと思われる。



図46 第3調査地区的溝出土の土器

## 第6節 その他の調査地区の概要

ここでは、第1節から第5節までに、古墳及び土壌や溝に関連して触れることの無かった調査地区（第1・第4-B・第7-A調査地区）と試掘調査の結果、全面調査に至らなかった調

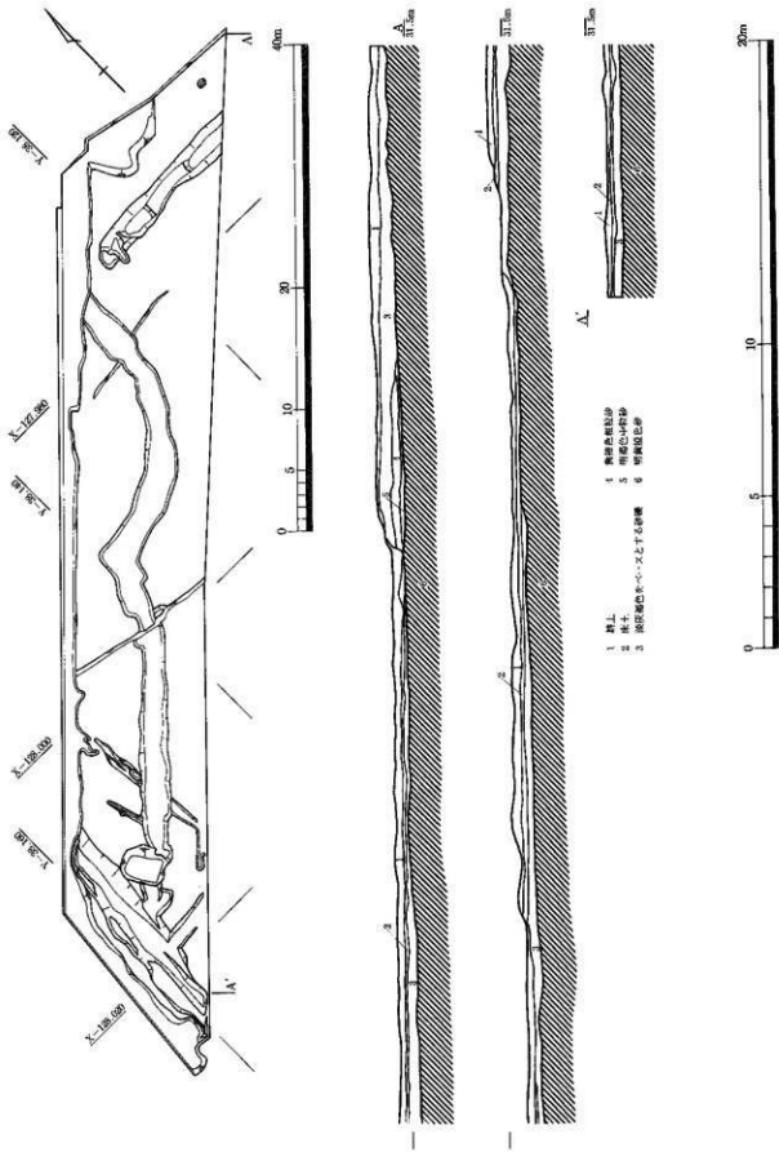


図47 第3調査地区の平面・断面図

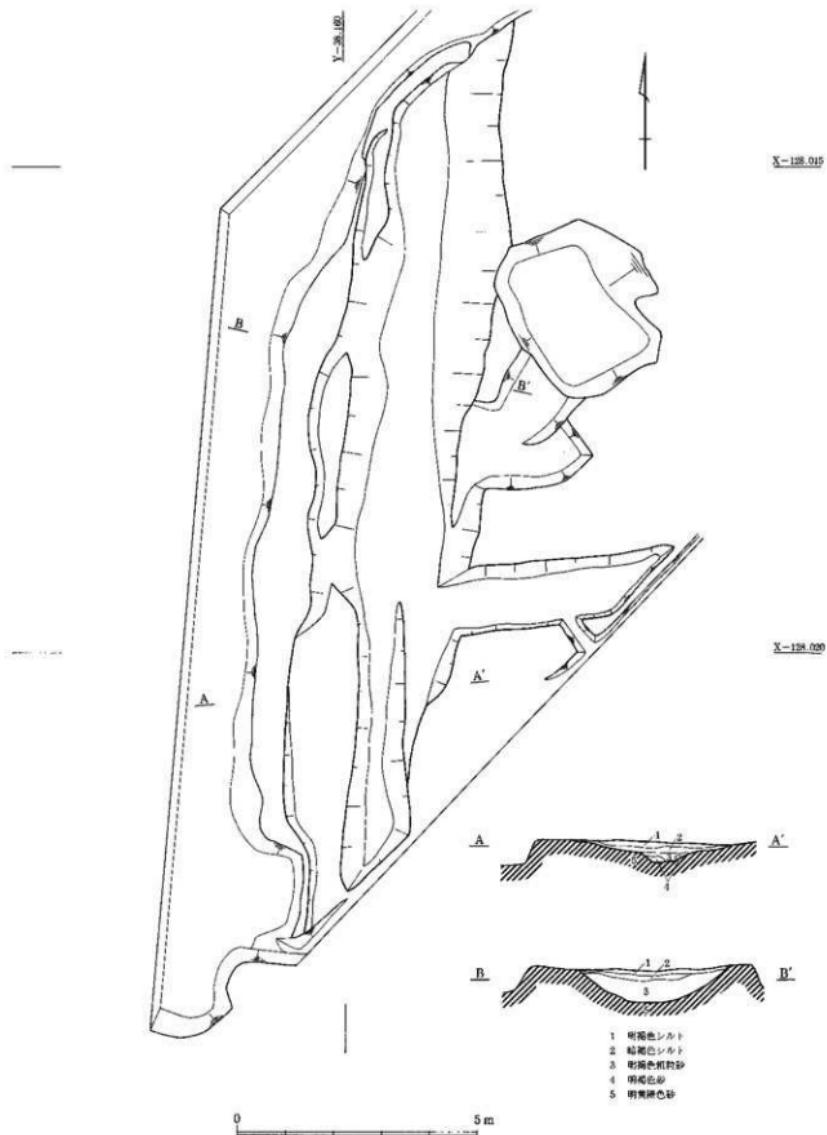


図48 第3調査地区西南端の溝の平面・断面図

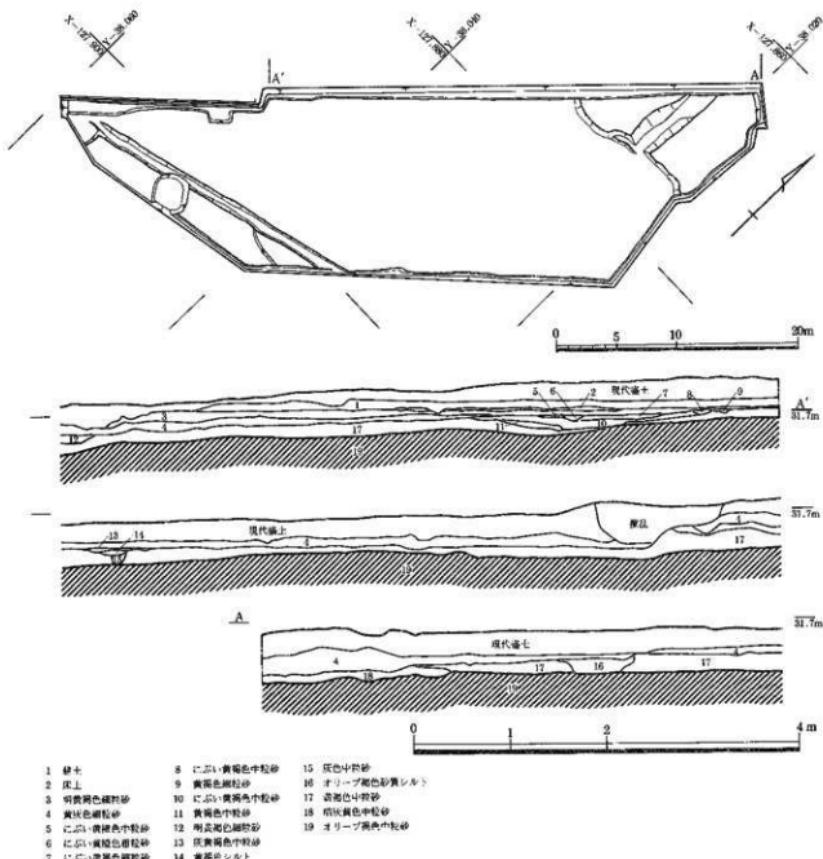


図49 第1調査地区の平面・断面図

査地区（第6-A～D・-G調査地区・第7-B調査地区）についてその概要を述べる。

### 1. 第1調査地区（図49、図版19）

この調査地区は土保山古墳の周濠と区画溝が検出されている第2調査地区の東隣に位置する（図4）。土保山古墳の外堤側の状況について、何らかの資料が得られるものと全面調査を実施した。

基本層序は第I・II層が現代の耕作土と床土、第III層がそれに伴う現代の整地上である第IV層が地山である。遺構・遺物は全く確認できなかった。

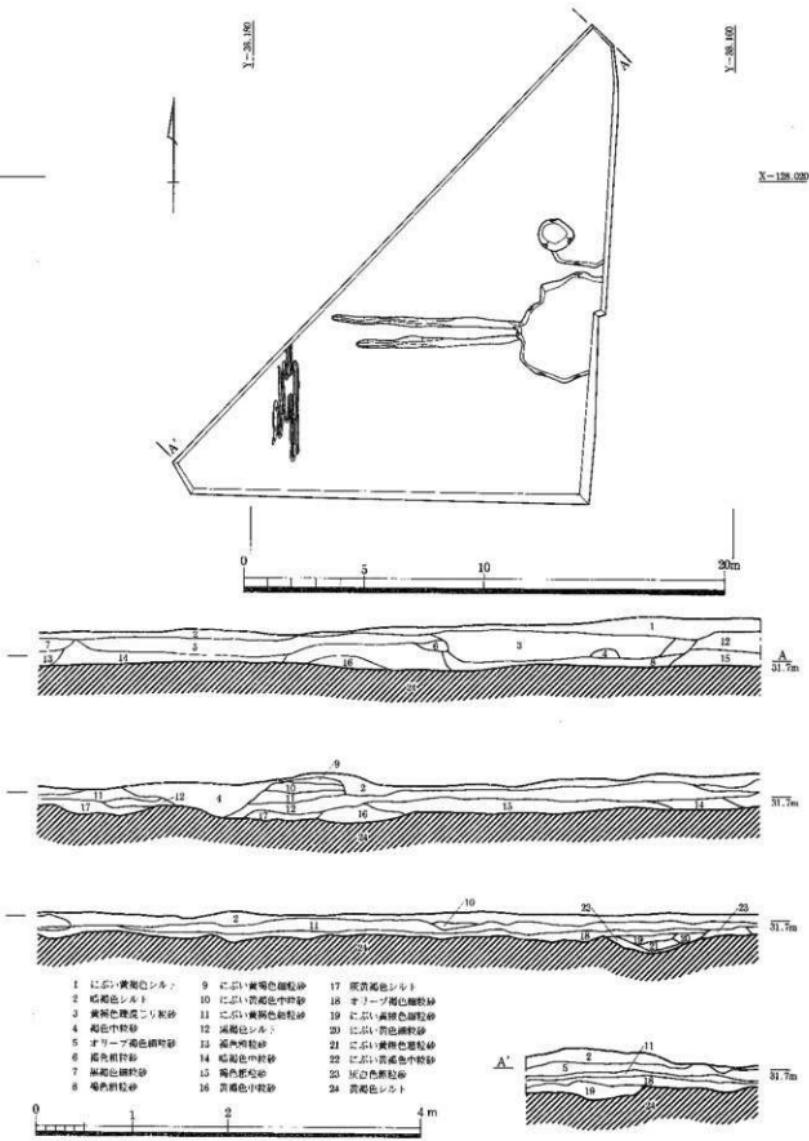


図50 第4-B調査地区の平面・断面図

調査地区の西端付近で東西方向に走行する溝は現代の暗渠であり、調査地区の東端付近の溝状の落ち込みも同様の性格をもつものであろう。

## 2. 第4-B調査地区（図50）

この調査地区は、第3調査地区的西隣に位置する（図4）。

現代の耕作土層の下には褐色系の砂質土が堆積しており、瓦器碗の細片が出土している。

地山である上面には、東西方向と南北方向に走行する鋤溝が遺存している。

包含層出土の瓦器碗の細片を見るかぎり、第3調査地区で検出された溝より出土した瓦器碗と時期的には大差がないと思われ、これら耕作に関連する遺構の時期は、12世紀中頃と推定される。

## 3. 第6調査地区（図52～55、図版18）

この調査地区的基本層序は第I・II層が現代の耕作土と床土、第III層がそれに伴う現代の整地上、第IV・V層が旧の耕土と床上、第VI層が地山である（図51）。第VI層の上面において、鋤溝などの耕作に関係する痕跡がみとめられる。第VI層の検出面の標高は、第6調査地区的東端にあたる第6-A調査地区では約38m、西端にあたる第6-G調査地区では約33mを測る。

現代の耕作土層（第I・II層）と旧の耕作土層（第IV・V層）は土質が近似しており、第4-B調査地区でみられるような遺物包含層もみとめられず（図50）、両者は時期的にさほど開きがないものと考えられ、鋤溝等の時期も近世以降と考えられる。

## 4. 第7調査地区（図56、図版20）

この調査区は第4-A調査地区的西隣に位置する（図4）。

第7調査地区は高槻市と茨木市の境界、すなわち嶋上・嶋下郡の郡界上に隣接するものと推定され、調査によって、郡界上を走る五社水路と呼ばれる灌漑用水路の規模や掘削時期を推定できる資料が得られるものと期待されたが、第7-A調査地区において瓦器碗の細片が出土する包含層のみ検出し、新たな発見はなかつた。



図51 第6調査地区的基本層序

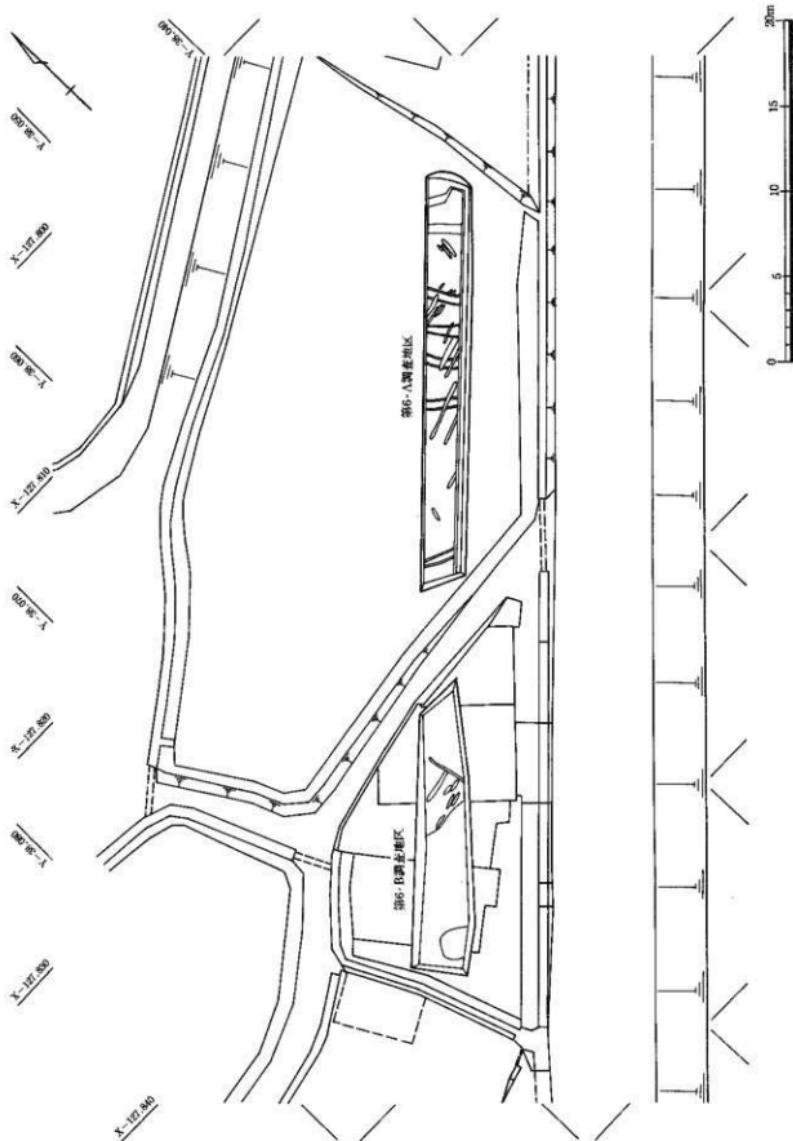


図52 第6-A・-B調査地区の平面図

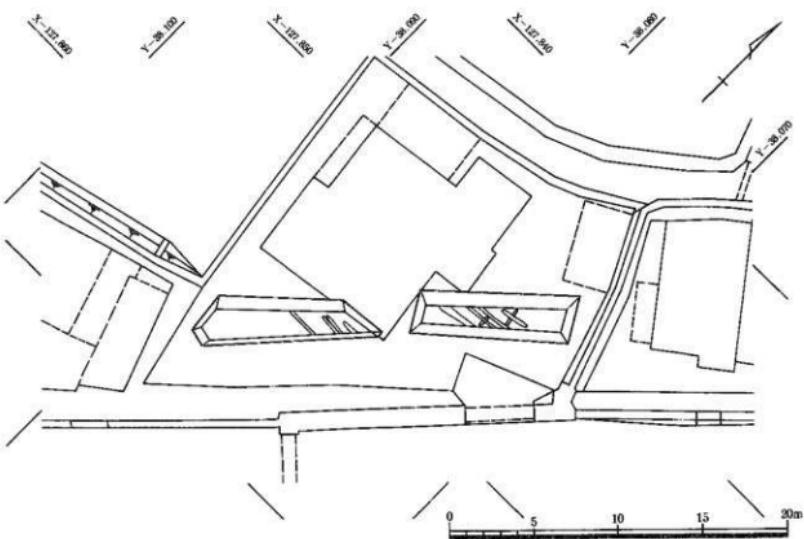


図53 第6-C調査地区の平面図

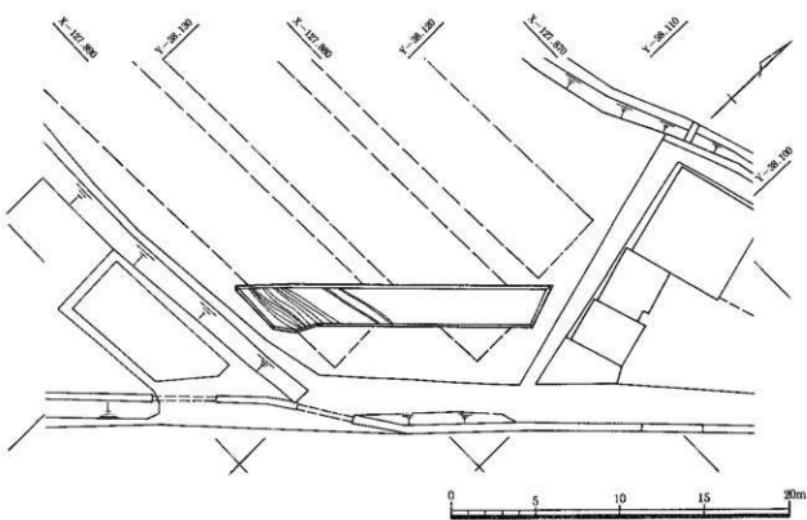


図54 第6-D調査地区の平面図

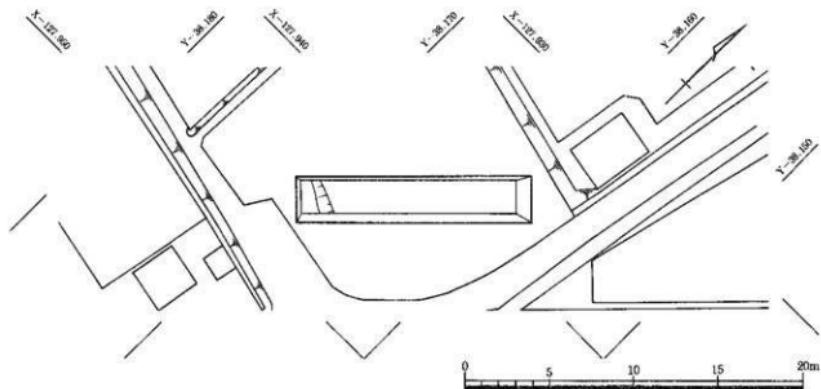


図55 第6-G調査地区的平面図

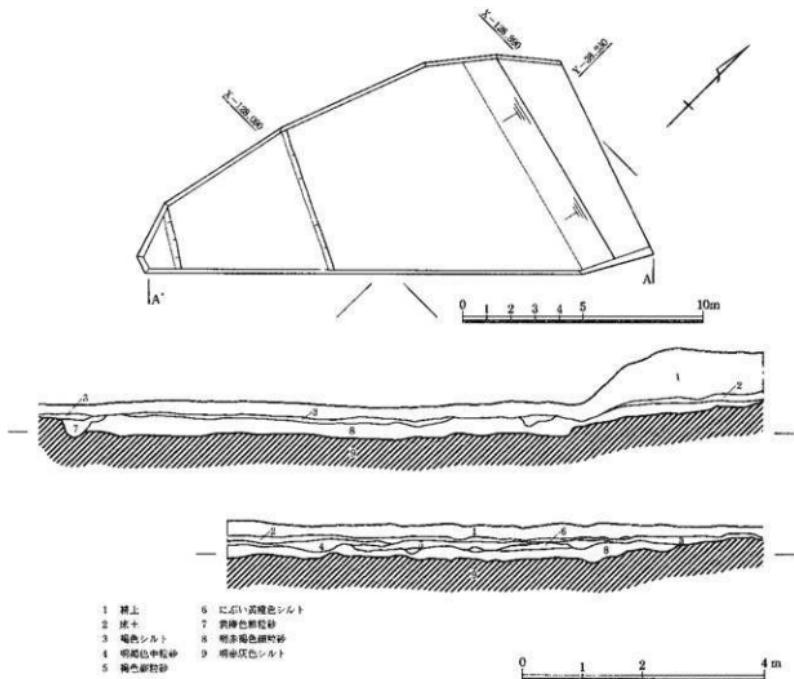


図56 第7-A調査地区的平面・断面図

第7-B調査地区は、詳細は不明であるが、過去に何らかの掘削工事が行なわれた形跡がみとめられたため、まず2m×15mのトレンチを東西方向に設定し、試掘調査を先行させた。

調査の結果、このトレンチを境に調査対象地区の南半分全てと北半分の一部が搅乱を受けていることがわかった。搅乱を受けていない部分をトレンチの北壁で観察すると、現代の耕作土層とそれに伴う整地土層は確認できたが、遺物包含層や遺構はみられなかった。

#### 註

- 1) 大阪府教育委員会『大阪府の文化財』1962年
- 2) 陳顯明『土保山古墳発掘調査概報』高槻叢書第十四集 高槻市教育委員会 1960年  
陳顯明『土保山古墳の発掘』『仏教芸術』43 毎日新聞社 1960年
- 3) 中西靖人ほか「大阪府水道事業第6次拡張事業揚送水管布設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」「大阪府文化財センター調査報告書」XXVII 1978年
- 4) 一瀬和夫ほか「古墳I 墳丘と内部構造」1周濠『古墳時代の研究7』1992年  
(文献中において、一瀬氏が外堤外側法面の輪郭のみに注意をはらって掘削する外周溝を「外堤を画する溝」と呼称しており、これに倣った。)
- 5) 新池埴輪窯出土の資料と比較するために、森田克行『新池』高槻市文化財調査報告書第17冊 高槻市教育委員会 1993年を参照し、分類基準を定めた。
- 6) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
- 7) 田辺昭三『須恵器大成』1981年による。
- 8) 註2と同じ
- 9) 註2と同じ
- 10) 藤井寺市教育委員会の天野末喜氏に出土した形象埴輪を実見して頂き、御教示を得た。
- 11) 西谷真治他『ニゴレ古墳』京都府弥栄町文化財調査報告書第5集 1988年
- 12) 高槻市史編さん委員会『高槻市史』第6巻 考古編 1978年

## 第Ⅳ章 総 括

今回の調査において、土保山古墳・二子山古墳について新たな資料を加えることができた。さらに、土室古墳群では、高樋古墳について<sup>1)</sup>2例目の方墳となる塚廻り古墳を確認することができ、当古墳群の様相に迫るうえでもその意義は大きいと考える。それぞれの成果については前章において記述を行なったが、ここでは、それらについて若干の整理を行ないたい。

### 第1節 土室古墳群出土の埴輪について

今回の調査において出土した埴輪を生産地との関連で考えるならば、立地条件等から考えて土室古墳群の北方約600mに位置する新池埴輪窯が想定されよう（図57）。

今回、新池埴輪窯と太田茶臼山古墳出土のものと同じヘラ記号をもつ埴輪が出土するなど、各古墳出土の埴輪は新池埴輪窯で生産されたことは確実である。そこで、各古墳出土の埴輪がもつ特徴を新池埴輪窯の資料と比較検討し、その関連を考えたい。

#### 1. 新池埴輪製作遺跡について

新池埴輪製作遺跡は高樋市上土室1丁目に所在し、その範囲は約40,000m<sup>2</sup>にも及ぶ。<sup>2)</sup>

調査の成果として、埴輪窯18基と工房3基、工人集落および律令期の集落が検出されており（図58）、18基の埴輪窯は立地、構造、時期などから、A・B・Cの3群にわけられている。

A群窯は3群の中で最も南側に位置しており、3基（1～3号窯）で構成されている。窯の構造は地下式の窑窓で、その時期はA群窯に伴う工人集落出土の須恵器からON46型式の時期と推定されている。さらに、新池埴輪窯の埴輪生産は太田茶臼山古墳の築造を契機として始まり、



図57 土室古墳群と新池埴輪窯の位置



図58 新池埴輪製作遺跡の遺構全体図

A群窯は太田茶臼山古墳の専用窯であると推定されている。その根拠として、埴輪の胎土分析による同質性の確認の他に、A群窯の操業時期がON46型式と確定され、その時に大型の円筒・朝顔形埴輪が必要な古墳は太田茶臼山古墳の可能性が高いことや、太田茶臼山古墳出土の円筒埴輪に線刻されたヘラ記号と同種のものがA群窯から出土していることを挙げている。

B群窯はA群窯の北方約44mに位置し、5基（4～8号窯）で構成されている。窯本体の調査は実施されていないがその構造は半地下式の窯窓であると推定されている。B群窯の時期については、工人集落より出土した須恵器より、TK208型式の時期と推定され、埴輪の搬出先として、土保山古墳、石塚古墳、二子山古墳、番山古墳が想定されている。

C群窯はB群窯の北西隣に位置し、10基（9～18号窯）で構成されている。C群窯も確認調査が主体で、その全容は明らかではないが、9号窯と18号窯は確認調査の結果から地下式の

窖であると推定されている。C群窯の埴輪の搬出先のひとつとして、ヘラ記号などの共通性から、今城塚古墳（図57）が挙げられている。C群窯の時期については、円筒埴輪を井筒に用いた1号井戸の排水溝である8号溝出土の須恵器からMT15型式の時期と推定されている。

## 2. 出上した埴輪の比較検討の方法と分析の結果

前述した新池窯の特徴をみると、各古墳出土の埴輪は時期的にみて、A・B群窯との関わりが想定される。そこで、埴輪の比較検討の方法として、まず、第III章第1節の4で試みた分類法でA・B群窯出土の埴輪を報告書の埴輪観察表<sup>1)</sup>をもとに整理し、各類の割合を棒グラフと折れ線グラフで表示した。同様の作業を、土保山古墳、二子山古墳、塚廻り古墳出土の埴輪についても行ない、A・B群窯がもつ特徴との比較作業を通じて当古墳群出土の埴輪の位置付けを考えていく。なお、対象とする埴輪は出土量の最も多い円筒埴輪のみである。A群窯の資料については、1～3号の窯本体から出上したものに、A群窯に伴う排水溝・1号土坑・ピットから出土したものを加えて分析を行なった。

B群窯の調査は窯数とその規模の確認が目的とされており、出土した埴輪も少数であるため、ここでの分析結果がただちにB群窯の傾向とならないことをことわっておきたい。

### 1) 口縁部の断面形態による分類の比較

第III章第1節の4で既に述べたが、出土した円筒埴輪の口縁部をその形態により、口縁端部が水平になるI類、内傾するII類、外傾するIII類、丸くおさめるIV類、口縁部が外反するV類にわけている（図9・61）。

新池のA群窯出土のものは、I類とIII類が多数を示し両者は全体の60%以上を占めている。各古墳出土のものは、二子山古墳からはV類が、塚廻り古墳からはIV・V類のものがみられないが、A群窯と同様I類とIII類が突出しており、傾向は全く同じであると言える。

B群窯ではI～III類までしかみとめられず、I類は20%で、II・III類は同じ割合で、全体の80%を占めている。

### 2) 突帯の断面形態による分類の比較

胴部は突帯の断面形態から、台形状に突出するA類、上辺部がほぼ水平になるB類、下辺部がほぼ水平になるC類、逆台形状に突出するD類にわけている（図9・62）。

新池のA群窯出土のものは、A類が70%と圧倒的多数を占め、折れ線グラフの形状はD類に向かって下降線を描く。各古墳出土のものも、A類が多数を占め、塚廻り古墳に至っては、98%以上となる。この傾向はB群窯においても同様である。

以上が分析の結果であるが、簡単にまとめると、口縁部と突帯の断面形状でみるとかぎり、各古墳から出土した埴輪の特徴は新池のA群窯のそれと類似する。B群窯における各窯の調査が

表2 円筒埴輪の口縁部の形状別数量表

分類	新池A群窯		堀廻り古墳		土保山古墳		二子山古墳		新池B群窯	
	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)
I 種 (A 2種)	28 (29.16)		17 (48.57)		8 (53.33)		2 (33.33)		1 (20.0)	
II 種 (A 1種)	6 (6.25)		5 (14.28)		2 (13.33)		1 (16.66)		2 (40.0)	
III 種 (A 3種)	30 (31.25)	96 (100)	13 (37.14)	35 (100)	3 (20.00)	15 (100)	2 (33.33)	6 (100)	2 (40.0)	5 (100)
IV 種 (A 5種)	4 (4.16)		—		1 (6.66)		—		—	
V 種 (B 1種)	10 (10.41)		—		1 (6.66)		1 (16.66)		—	
その他 (A4・A6・B2)	18 (18.75)		—		—		—		—	

分類中の( )は『新池』1993年の報文中の分類

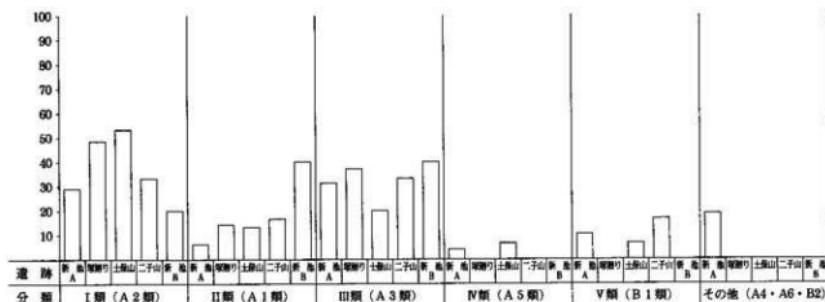


図59 円筒埴輪の口縁部の形状による出土頻度

表3 円筒埴輪の突帯の形状別数量表

分類	新池A群窯		堀廻り古墳		土保山古墳		二子山古墳		新池B群窓	
	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)	個体数(%)	総数(%)
A 種 (1種)	88 (66.75)		54 (98.18)		18 (52.94)		9 (60.00)		8 (72.72)	
B 種 (2種)	28 (21.87)		—		3 (8.82)		3 (20.00)		1 (9.09)	
C 種 (3種)	8 (6.25)	100	1 (1.81)	100	12 (35.29)	34 (100)	3 (20.00)	15 (100)	2 (18.18)	11 (100)
D 種 (—)	—		—		1 (2.94)	—	—	—	—	—
その他 (三角形・長方形に突出)	4 (3.12)		—		—		—		—	

分類中の( )は『新池』1993年の報文中の分類

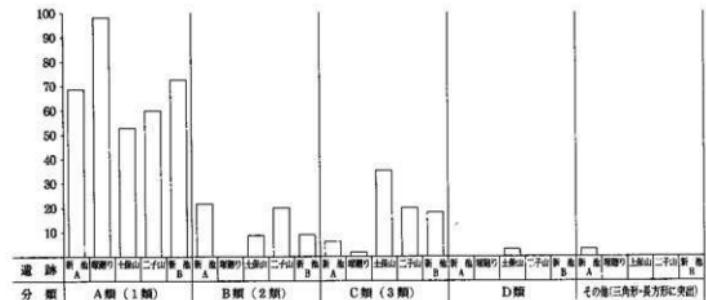


図60 円筒埴輪の突帯の形状による出土頻度

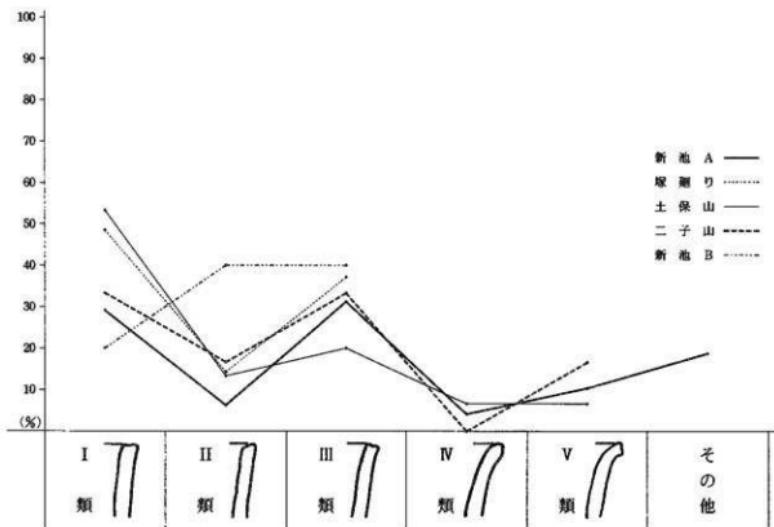


図61 円筒埴輪の口縁部の形状による出土頻度の比較

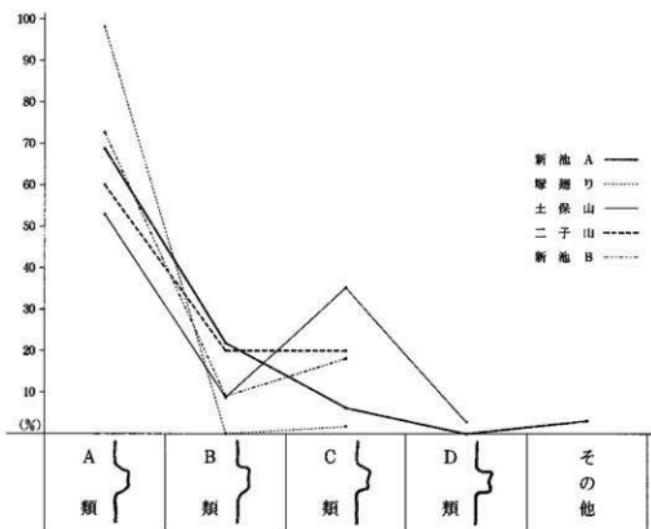


図62 円筒埴輪の突帯の形状による出土頻度の比較

実施されていない現在において、これらの埴輪がA群窯で生産されたと断言することはできないが、土保山古墳の周濠より出土した円筒埴輪の中には、A群窯の1号窯出土の円筒埴輪に線刻されたヘラ記号と全く同じヘラ記号をもつものがある（図12-21、図版22-21）。さらに、塚廻り古墳出土の円筒埴輪の口縁部と朝顔形埴輪の肩部に線刻されたヘラ記号は（図29-70・71、図版33-70・71）、太田茶臼山古墳出土の円筒埴輪のそれと同種であり（図63）、このことからもA群窯との関係は明瞭である。

現時点では、各古墳出土の埴輪が新池窯のA・Bどちらの群窯で生産されたかは、豊富なA群窯の資料と数少ないB群窯の資料とは直接的な比較ができないため断定できない。しかし、ヘラ記号の共通性等から塚廻り古墳と土保山古墳出土の埴輪がA群窯出土のものと近似することは言えるだろうし、両古墳出土の須恵器がON46型式であることからもA群窯との関わりは明らかである。仮にA群窯の所産であるとするならば、太田茶臼山古墳の専用窯と推定されるA群窯の3基の窯が太田茶臼山古墳以外の古墳の埴輪も手懸けていたことになり興味深い。ただし、B群窯の実態が判然としない現段階で、A群窯と同様の特徴をもつ消費地の埴輪が全てA群窯の所産であるとは断定できない。埴輪の生産量や窯の寿命などを考えると、A群窯のみでそれらすべての埴輪の生産を賄えるかという問題も残り、B群窯の操業もそこに加わり、各古墳出土の埴輪の中にはB群窯で生産されたものが混在していると考えるのが自然であろう。

現在、新池窯の調査の成果から、B群窯はA群窯に伴うとされる3棟からなる工房群（1～3号工房）と抵触する分布状況にあることから両群窯の同時性は否定され、A群窯とB群窯の同時稼働は想定しづらいが、各古墳出土の埴輪をみると、A群窯とB群窯で焼成された埴輪の属性はほぼ同じで、窯の稼働時期にもほとんど差がない印象をうける。このあたりの解釈は、今後B群窯の資料が増加することによって明らかになるであろうが、太田茶臼山古墳の埴輪をA群窯だけでなくB群窯でも焼成していた可能性も、各古墳出土の埴輪が示しているのではないだろうか。

## 第2節 土室古墳群の特徴

ここではまず、第III章における各古墳の調査成果を整理し、第1節の円筒埴輪の分析結果もふまえて、各古墳の特徴を述べる。

### 塚廻り古墳

塚廻り古墳は一边が約20mと推定される方墳である。出土した埴輪の特徴は、全器種を通じてベンガラの塗布が目立ち、形象埴輪の出土量が多く、その種類も豊富であり、鶏冠を大きく誇張した鶏形埴輪（図35-132、図版42-132）をはじめ、網代葺を表現した屋根に堅男木をもつ大型の家形埴輪（図31-81～87、図版34-81～87）等がみられることがある。また、太田茶

白山古墳出土の円筒埴輪のヘラ記号と同種のヘラ記号をもつ朝顔形埴輪が出土している。

円筒埴輪は新池窯のA群窯出土のものと類似する要素をもつ。しかも太田茶臼山古墳の円筒埴輪に線刻されたものと同種のヘラ記号がみられ、この古墳の埴輪は太田茶臼山古墳の埴輪製作とほぼ同時期に生産された可能性がある。さらに出土した須恵器（図36、図版43）はON46型式と考えられ、A群窯の推定される操業時期と合致する。

#### 土保山古墳

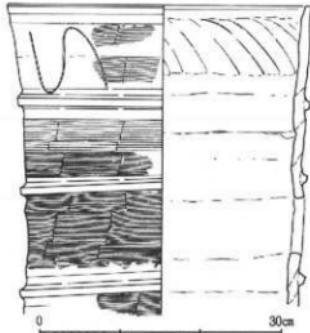
円墳であると推定されている<sup>5)</sup>土保山古墳の今回の調査では、初めてその外部施設の一部を検出することができた。その結果、この古墳には周濠だけでなくその外側に区画溝（外堤を画する溝）を備えていることがわかった。両者の形状から、埋葬施設がある墳丘は円丘と確定でき、しかも、前方後円墳の可能性があることが判明したが、前方部は未検出で、外堤を画する溝についても前方部側の規模が明らかでないため、古墳の中軸線が設定できず、現段階においては前方後円形として、正確に墳形や規模を復元することは不可能である。ただし、円丘部については過去の調査成果を援用することで、その規模についてはある程度復元が可能であると考える。

周濠と外堤を画する溝の平面図に、昭和34年の調査時に作成された土保山古墳の実測図を、調査当時とほとんど形状が変化していない畦畔図をもとに合成し、基底部の円弧と外堤を画する溝の円弧が同心円状に整合して描ける個所を円丘部の仮の中心点と定め、円丘部の直径（基底部径）を計測すると約36mとなり、周濠の幅は約9mとなる。

遺物は塚廻り古墳と同様に円筒埴輪はA群窯出土のものと共通点が多く、ヘラ記号もA群窯出土のものと同種で、出土した須恵器もON46型式である。塚廻り古墳出土の埴輪との相違点は、形象埴輪の出土量と種類が少なく、造形に稚拙さが伺えることである。家形埴輪を例にとれば、塚廻り古墳出土の家は堅牢木を有する大型の家であるのに対して、土保山古墳のそれは簡素で小型であると言える。

#### 二子山古墳

二子山古墳は今回の調査において後円部の基底部の一部を検出したことにより、過去の調査の成果と照らし合わせて、その全長は52mを測ることが判明した。出土した埴輪は上記の2古墳と比較しても出土量が少なく、形象埴輪も蓋の破片が1点のみの出土であるため、その特徴は捉えにくいが、円筒埴輪の分析の結果は、やはりA群窯のそれと類似する。



『新池』1993年の図319より転載

以上、各古墳の特徴について述べたが、築造順位については資料的制約もあり、ふれなかつた。しかし、塚廻り古墳と土保山古墳から出土した須恵器の縫をみると、塚廻り古墳出土のものは土保山古墳のものと比較して、肩部の凹線が明瞭であるなど、同じON46型式のなかでも若干古手のような印象をうける。ただし、各古墳の立地条件や推定される規模などを比較すると、塚廻り古墳は土保山古墳、二子山古墳よりも後発的である可能性があり、未だ不明な点が多いと言わざるをえない。けれども、今回の調査によって、土保山古墳と新たに発見された塚廻り古墳の築造時期の前後関係について具体的に考えることのできる資料を提示することができ、新池埴輪窯で生産された埴輪の消費地での資料をわずかながら増やすことができたことは大きな成果であったと考える。

表4 各古墳の一覧

古墳名	墳形	或 者 ( )は確定値	埴 輪 内 容 期	埴輪のヘラ記号(内側・底面形埴輪)			伴出須恵器	備 考	
				内側	外側	縫			
塚 廻 り 古 墳	一辺約(30m)	N	・家 ・船 ・車 ・馬 ・牛 ・人物 ・動物	図25-1 図25-6 図27-54 図27-55	図25-70 図27-54 図27-55	1 2 3 4 5	図36-142 図36-144 図36-145	6 7 8	・ヘラ記号1・2は太田 森白山古墳出土のもの と類似 ・杯形・高杯・壺(6~ 8)はON46型式
土 保 山 古 墳	前方後円 墳	N	・区画溝を含めた全長 は(70m)以上 ・後円部径(36m) ・周溝幅(9m) ・区画溝幅(2.3m)	・家 ・船 ・車	図12-21 図12-27	9 10	図18-15	11	・ヘラ記号9は新池A群 東(1号墳)出土のもの との同じ ・壺11はON46型式
二 子 山 古 墳	前方後円 墳	N	・墳丘の全長(52m) ・後円部径(32m)	・蓋					

### 註

- 1) 高槻市史編さん委員会『高槻市史』第6巻 考古編 1978年
- 2) 出土した埴輪を高槻市教育委員会の森田克行氏に実見して頂いた。
- 3) 森田克行『新池』高槻市文化財調査報告書第17冊 高槻市教育委員会 1993年
- 4) 同上
- 5) 陳 顯明『土保山古墳発掘調査概報』高槻叢書第十四集 高槻市教育委員会 1960年
- 6) 註1と同じ

墳輪觀察表 1-1. 土保山古墳周濠 = 凹節墳輪

埴輪觀察表表1-2. 土保山古墳周濠 - 円筒埴輪・朝顔形埴輪

件目番号	調査番号	番號	位		タガ	スカンル	ベンツラ 内 外	施成	色	土	式(?)	場
			口	側								
第13-31	円	○	T	(外)ヨコハナ (内)ナメハナの後に、チガを勢ひ、ナメハナの後にはヨコハナ	C			黒	内・赤褐色 内・濃褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含む。)		*外側にヨコハナの上 のナメハナにナメハナを置 している。
第13-32		○	T	(外)ヨコハナ (内)ナメハナ	C			白	赤褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (1.5m以上の砂粒を含 む。)		
第13-33		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメハナとチガ	C	C		灰	内・赤褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
第13-34		○	T	(外)ヨコハナ (内)ナメハナとチガ	C	O		灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)		
第13-35		○	T	(外)ヨコハナ (内)ナメハナ	C	O		黒	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
第13-36		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメハナ	C	O		灰	内・赤褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
第13-37		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメハナ	C	O		灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)		
第13-38		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメハナ	D	O		黒	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
第13-39		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメハナ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (1.5m以上の砂粒を含 む。)		*ヘラ型骨あり
第13-40		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメハナとチガの後にはヨコハナ ヨコハナにはヨコハナ、ヨコハナ、ナ メハナ	C			灰	内・淡褐色 内・濃褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 39.0 高 底 39.5	
第13-41	埴	○	-	(外)不規 (内)ナメ	C			灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を多く含 む。	高 底 32.9 高 底 39.0	*左側あづくり
第13-42		○	-	(外)不規 (内)ナメナメ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。	高 底 31.0	
第13-43		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメナメ	A			灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 31.0 高 底 33.7	*外側のナメナメのチハ ナメがよく見えた。
第13-44		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメナメと赤褐色くはヨコハナ	C	O		灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を多く含 む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 34.0 高 底 38.0	*外側のナメナメのチハ ナメがよく見えた。
第13-45		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメナメと赤褐色くはヨコハナ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 31.0	
第13-46		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメナメ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 31.0	
第13-47		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメナメ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。	高 底 31.0	
第13-48		○	S	(外)ヨコハナ (内)ナメナメ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。	高 底 31.0	
第13-49		○	T	(外)ヨコハナ (内)ナメ				黑	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。	高 底 31.0	
第14-35	朝	-	(外)ヨコ (内)チガ		C			灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	*外側の一次調節のチハ ナメがよく見られる。
第14-36		10	(外)ヨコ (内)チガ					灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-37		-	(外)ヨコ (内)チガ		O			灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-38		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-39		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-40		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-41		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-42		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-43		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-44		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-45	形	○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-46		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-47		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-48		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-49		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-50		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-51		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-52		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-53		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-54		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-55	地	○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-56		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	
第14-57		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (-1.5m以上の砂粒を含 む。)	高 底 32.5 高 底 33.2	*外側にチガハが部分的 に見られる。
第14-58		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。	高 底 32.5 高 底 33.2	*内側にベンダリに、右側 にのみある。
第14-59		○	T	(外)ヨコハナ (内)チガ				灰	内・淡褐色 内・淡褐色	-1.5mの砂粒を含む。	高 底 32.5 高 底 33.2	

埴輪観察表2. 土保山古墳周辺 - 形象埴輪

調査番号	出発番号	種類	ベンダラ 外 内	地成	色調	新土
調15-10	21	蓋形埴輪の立ち振り		黒	・深青褐色 ・灰褐色	~1mmの砂粒を含む。 (5mm以上の砂粒を含む 事に注意。)
調15-11	22	蓋形埴輪の立ち振り		灰	・灰褐色	~2mmの砂粒を含む。
調15-12	23	蓋形埴輪の立ち振り		灰	・灰褐色	~2mmの砂粒を含む。
調15-13	24	蓋形埴輪の立ち振り		灰	・灰褐色	~2mmの砂粒を含む。
調15-14	25	蓋形埴輪の立ち振り	○	灰	・灰色	~3mmの砂粒を含む。
調15-15	26	蓋形埴輪の立ち振り	○	灰	・灰褐色	~3mmの砂粒を含む。
調15-16	27	蓋形埴輪の立ち振り		灰	・灰褐色	~3mmの砂粒を含む。
調15-17	28	蓋形埴輪の立ち振りの撒 落		灰 外・浅青褐色 内・浅褐色		~3mmの砂粒を含む。
調15-18	29	蓋形埴輪の撒落		灰 外・浅青褐色 内・浅褐色		~3mmの砂粒を含む。 (5mm以上の砂粒を含む 事に注意。)
調15-19	30	蓋形埴輪の撒落		灰 外・浅褐色 内・灰褐色		~3mmの砂粒を含む。 (5mm以上の砂粒を含む 事に注意。)
調15-20	31	蓋形埴輪の撒落		灰 外・浅褐色 内・灰褐色		~3mmの砂粒を含む。 (5mm以上の砂粒を含む 事に注意。)

埴輪観察表3. 土保山古墳区画溝 - 円筒埴輪・朝顔形埴輪

調査番号	出発番号	種類	直 径 幅 深	高 さ 幅 深	材 質	スコット 分類	ベンダラ 外 内	地成	色調	新土	量 (t)	備 考	
調16-1	30	円 筒	1箱	1	(山野地) ロコハ (外) ナナメラ (内) ナナメラ		灰	灰・にごい褐色 灰・褐色		~1mmの砂粒を含む。			
調16-2	30	円 筒	1箱	1.8	(山野地) ロコハ (外) ナナメラ (内) ナナメラ		灰	灰・にごい褐色 灰・にごい褐色		~3mmの砂粒を含む。 (5mm以上の砂粒を含む 事に注意。)			
調16-3	30	圓 筒	○	10	(外) ナナメラ (内) ナナメラ	A	灰	月・にごい褐色 月・にごい褐色		~1.5mmの砂粒を多く 含む。			
調16-4	30	圓 筒	○	12	(外) ナナメラ (内) ナナメラ	A	○	灰	月・にごい褐色 内・にごい褐色		~1mmの砂粒を含む。 (5mm以上の砂粒が散 布される。)		
調16-5	30	圓 筒	○	12	(外) ナナメラ (内) ナナメラ	A		白	月・にごい褐色 内・にごい褐色		~2mmの砂粒を含む。		
調16-6	30	圓 筒	○	1.7	(外) ナナメラ (内) ナナメラ	C	○	灰	月・灰褐色 内・灰褐色		~2mmの砂粒を含む。		
調16-7	30	圓 筒	○ ○	9	(外) ナナメラ (内) ナナメラ	A		灰	月・灰褐色 内・灰褐色		~1mmの砂粒を多く含 む。 (5mm以上の砂粒が散 布される。)	・雷電きびり ・雷電きびり	
調16-8	30	圓 筒	○	7	(外) ナナメラ (内) 不規			灰	月・灰褐色 内・褐色		~1mmの砂粒を多く含 む。 (5mm以上の砂粒が散 布される。)		
調16-9	30	圓 筒	○	7	(外) ナナメラ (内) ナナメラ			灰	月・灰褐色 内・にごい褐色		~2mmの砂粒を含む。		
調16-10	30	圓 筒	○	6	(外) ナナメラ (内) ナナメラ カタコロカタコロ、下井草はな ナナメラ			白	月・にごい褐色 内・褐色		~3mmの砂粒を含む。		
調16-11	30	圓 筒	○	7	(外) ナナメラ (内) 不規			灰	月・灰褐色 内・褐色		~2mmの砂粒を多く含 む。 (5mm以上の砂粒が散 布される。)	・雷電のアガの刺繡圖が見 られる。	

埴輪観察表4. 土保山古墳区画溝 - 形象埴輪

調査番号	出発番号	種類	直 径 幅 深	高 さ 幅 深	材 質	ベンダラ 外 内	地成	色調	新土		
調17-12	22	蓋形埴輪			灰 外・深青褐色 内・灰褐色				~3mmの砂粒を含む。		
調18-12	22	蓋形埴輪			灰 外・深青褐色 内・褐色				~3mmの砂粒を多く含 む。 (5mm以上の砂粒を含 む。)		
調18-14	22	蓋形埴輪の立ち振り			灰 外・灰褐色				~3mmの砂粒を多く含 む。 (5mm以上の砂粒を含 む。)		

埴輪観察表5. 二子山古墳周濠 一 円筒埴輪・朝顔形埴輪

件名	記番号	位置	規 格	材 質	タガ 分類	スカシ孔 有無	ベンガラ 有無	焼成	色 調	地 土	重 量(kg)	備 注
埴21-1	26	山腰	8	(山腰) ヨコナガ (外 壁) ヨコハラ (内 壁) テラ			○	赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒をわずかに含む。		
埴21-2	28	山腰	9	(山腰) ヨコナガ (外 壁) ヨコハラ (内 壁) テラ				赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒をわずかに含む。		
埴21-3	30	山腰	6	(山腰) ヨコナガ (外 壁) ヨコハラ (内 壁) テラ				褐	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
埴21-4	32	山腰	9	(山腰) ヨコナガ (外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ				赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒をわずかに含む。		
埴21-5	35	山腰	8	(山腰) ヨコナガ (外 壁) ヨコハラ (内 壁) テラ				赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
埴21-6	36	山腰	8	(山腰) ヨコナガ (外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ				赤	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を含む。		
埴21-7	38	山腰	10	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) テラ	A	○	○	赤	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を含む。		
埴21-8	39	山腰	7	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ	A			赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒をわずかに含む。)		
埴21-9	40	山腰	5~7	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) テラ	A	○		赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を多く含む。		
埴21-10	43	山腰	11	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ	A			赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		・外側に一次調節のタラハゲが基盤的に見られる。
埴21-11	45	山腰	9	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) テラ	A			赤	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を多く含む。		
埴21-12	46	山腰	5	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ	A	○		赤	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を含む。		
埴21-13	48	山腰	7	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ヨコハラナナメの奥にナナメ	A	○	○	赤	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を含む。		
埴21-14	50	山腰	10	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ヨコハラナナメの奥にナナメ	A	○		赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		・ヘリ配りあり ・外側に一次調節のタラハゲが基盤的に見られる。
埴21-15	53	山腰	0~20	(外 壁) ヨコナガ (内 壁) ナナメ	A			赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を多く含む。 (5mほどの砂粒をわずかに含む。)		
埴21-16	56	山腰	0~17	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ	B			白	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を含む。		
埴21-17	58	山腰	8	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメの壁に、土の跡の貼り付	B			赤	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を多く含む。		・外側に一次調節のタラハゲが基盤的に見られる。
埴21-18	59	山腰	7~9	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ	B	○		赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒をわずかに含む。)		
埴21-19	60	山腰	10	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ	C	○		赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
埴21-20	61	山腰	11	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ヨコハラナナメ	C			赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
埴21-21	62	山腰	10	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ヨコナダ	C		○	赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		・ヘリ配りあり
埴21-22	64	山腰	9	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ	C			赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
埴21-23	65	山腰	9	(外 壁) ヨコナダ				褐	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
埴21-24	66	山腰	9	(外 壁) ヨコナダ				赤	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		
埴21-25	68	山腰	12	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ヨコハラナナメの奥にナナメ				白	赤・深赤色 内・深褐色	-2.5mの砂粒を含む。		
埴21-26	69	山腰	7	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメビニオナメ				褐	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒をわずかに含む。)		
埴21-27	70	山腰	10	(外 壁) ヨコハラ (内 壁) ナナメ				白	赤・深赤色 内・深褐色	-1.5mの砂粒を含む。		

埴輪観察表6. 二子山古墳周濠 一 形象埴輪

件名	記番号	規 格	規 格	規 格	規 格	規 格	規 格	規 格	規 格	規 格	規 格
埴22-27	36	縫隙輪の直径	□	△	△	△	△	△	△	△	△

縫隙輪の直径  
△: 赤・深赤色  
△: 内・深褐色

埴輪観察表7-1. 塚廻り古墳周溝 - 円筒埴輪

調査番号	位置番号	基盤	層	目	種	年	メダル	スケレル	ベンガラ 分類	地表	色	調	植土	状量(g)	備考
内	外														
調査-1	28	日	一	6	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・に古い褐色	~1mの砂粒を含む。				・ヘラ記号あり ・円筒の側面有り
調査-2	29	日	一	6	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・暗赤褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を含む。				
調査-3	30	日	一	11	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・暗赤褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を多く含む。				
調査-4	31	日	一	5	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・褐色 内・に古い褐色	~1mの砂粒を含む。				
調査-5	32	日	一	8	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・褐色	~2mの砂粒を含む。				
調査-6	33	日	一	8	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・に古い褐色	~1.5mの砂粒を含む。				・ヘラ記号あり ・円筒の裏面有り
調査-7	34	日	一	3	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・灰褐色 内・褐色	~2mの砂粒を含む。				
調査-8	35	内	一	5	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・赤褐色 内・灰褐色	~1.5mの砂粒を含む。				
調査-9	36	日	一	5	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・暗赤褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒を含む。 すこし赤み。)				
調査-10	37	日	一	4	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・灰白色 内・に古い褐色	~1mの砂粒を含む。				
調査-11	38	日	一	4	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・褐色 内・に古い褐色	~1mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒を含む。 すこし赤み。)				
調査-12	39	内	一	8	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・に古い褐色	~2mの砂粒を含む。				・表面にコハクの色。 ナツメハケを部分的に探している。
調査-13	40	日	一	7	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・灰褐色 内・に古い褐色	~2mの砂粒を多く含む。				
調査-14	41	日	一	11	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・褐赤褐色 内・に古い褐色	~2mの砂粒を多く含む。				・内面に赤鉄鉱を含んでいる。
調査-15	42	日	一	7	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ 下表面はナフ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・灰褐色	~2mの砂粒を含む。				・外側にコハクの色。 ナツメハケを部分的に探ししている。
調査-16	43	日	一	8	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・褐赤褐色 内・に古い褐色	~2mの砂粒を多く含む。				
調査-17	44	日	一	13	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒を含む。 すこし赤み。)				
調査-18	45	日	1~2	8	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリハケ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・灰褐色	~2mの砂粒を含む。				
調査-19	46	日	一	-	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリハケ (内 基) 不明			○ ○	■	外・灰褐色 内・に古い褐色	~1mの砂粒を含む。				
調査-20	47	日	一	10	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケの裏にコハケ			○ ○	■	外・赤褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を含む。				
調査-21	48	日	一	10	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケ 内 基) ハナナ			○ ○	■	外・赤褐色 内・灰褐色	~1.5mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒を含む。 すこし赤み。)				・外側にコハクの色。 ナツメハケを部分的に探ししている。
調査-22	49	日	一	9	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケ 内 基) ハナナ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・に古い褐色	~3mの砂粒を含む。				
調査-23	50	日	一	8	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・に古い褐色	~3mの砂粒を含む。				
調査-24	51	日	一	6	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・に古い褐色	~2mの砂粒を含む。				
調査-25	52	日	一	7	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・灰褐色 内・灰褐色	~1.5mの砂粒を含む。				・クモ印と ・表面に薄緑色のナツメハケが部分的に見れる。
調査-26	53	日	一	4	(口標題) ヨリタグ (外 基) 日暮ヨリハケ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・灰褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を含む。 (全表面砂粒を含む。)				
調査-27	54	日	一	10	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリハケ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を含む。 (5mほどの砂粒を含む。 すこし赤み。)				
調査-28	55	日	一	-	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリハケ (内 基) 不明			○ ○	■	外・灰褐色 内・に古い褐色	~1mの砂粒を含む。				
調査-29	56	日	一	10	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケ			○ ○	■	外・赤褐色 内・灰褐色	~1mの砂粒を含む。				
調査-30	57	日	一	11	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・灰褐色	~1.5mの砂粒を含む。				
調査-31	58	日	一	7	(口標題) ヨリタグ (外 基) ヨリヨリシカ (内 基) ナツメハケの裏にナグ			○ ○	■	外・に古い褐色 内・灰褐色	~1.5mの砂粒を含む。				

埴輪観察表7-2. 塚廻り古墳周溝 - 円筒埴輪・朝顔形埴輪

特徴番号	記載番号	位置	基 底		調 量		テオ 分類	スカラフ 外 内	ベンチラ 外 内	地成	色 製	量 天	片 量(m)	備 考
			口	底	高	本/m								
特00-30	30	円			6	[日暮型] ヨコゲラ [外 型] ヨコヨカハ [内 型] ナナハケ		○	○	良	内・淡褐色 内・褐褐色	-1mの跡跡を含む。		・外周に一次調節のナコハ が複数回り異なる。
特00-31	30				10	[日暮型] ヨコゲラ [外 型] ヨコヨカハ [内 型] ナナハケ		○	○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1mの跡跡を含む。 (ナコハが複数回り異なる。)		
特00-32	30				11	[日暮型] ヨコゲラ [外 型] ヨコヨカハ [内 型] ナナハケ		○	○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-0.5mの跡跡を含む。 (ナコハが複数回り異なる。)		・口周部の内部に跡跡を残 したもの、内側から出土 を行はれている。
特00-33	30				13	[日暮型] ヨコゲラ [外 型] ヨコヨカハ [内 型] ナナハケ		○	○	良	内・淡褐色 内・灰褐色 内・赤褐色	-2mの跡跡を含む。		
特00-34	30				12	[日暮型] ヨコゲラ [外 型] ヨコヨカハ [内 型] ナナハケ	A			良	内・淡褐色 内・灰褐色 内・赤褐色	-1mの跡跡を含む。 (ナコハが複数回り異なる。)		
特00-35	30				9	[日暮型] ヨコゲラ [外 型] ヨコヨカハ [内 型] ナナハケ				良	内・灰褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-36	30				-	[外 型] ヨコハケ [内 型] ヨコナダ	A			良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		・全体的に調節しているた め不規則。
特00-37	30				13	[外 型] ヨコハケ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。 (ナコハの跡跡を複数回 り異なる。)		
特00-38	30				3	[外 型] ヨコハケ [内 型] ヨコハケの裏にナ 付位置の跡跡	A		○	良	内・灰褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		・ヘラ跡跡あり
特00-39	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。		・ヘラ跡跡あり
特00-40	30	埴 輪			9-12	[外 型] ヨコハケ [内 型] ヨコハケの裏にナ 付位置の跡跡	A	○	○	○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。 (ナコハの跡跡を複数回 り異なる。)	・ヘラ跡跡あり
特00-41	30				5	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・灰褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。		・外周に一次調節のナコハ が複数回り異なる。
特00-42	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。 (ナコハの跡跡を複数回 り異なる。)		・外周において前方に向か て斜めに傾いたナコハ 調節を行なっている箇所 がある。
特00-43	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1mの跡跡を含む。		
特00-44	30				8	[外 型] ヨコハケ [内 型] ヨコハケの裏にナ 付位置の跡跡	A		○	良	内・灰褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-45	30				5	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-46	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。 (ナコハの跡跡を複数回 り異なる。)		
特00-47	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1mの跡跡を含む。		
特00-48	30				8	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-49	30				4	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダの裏に、チダの跡跡	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。		
特00-50	30	朝 顔 形 埴 輪			10-14	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダの裏にチダの跡跡	A	○	○	○	良	内・灰褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。	・ヘラ跡跡あり
特00-51	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。	・ヘラ跡跡あり ・外周に一次調節のナコハ が複数回り異なる。	
特00-52	30				8	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2.5mの跡跡を含む。		
特00-53	30				4	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダの裏に、チダの跡跡	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。		
特00-54	30				10-14	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダの裏にチダの跡跡	A	○	○	○	良	内・灰褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。	・ヘラ跡跡あり
特00-55	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。		
特00-56	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-57	30				8	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ	C	○	○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。 (ナコハの跡跡を複数回 り異なる。)		
特00-58	30				5	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2.5mの跡跡を含む。	・ヘラ跡跡あり P2の記述参照	
特00-59	30				6	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2.5mの跡跡を含む。	・ヘラ跡跡あり P2の記述参照	
特00-60	30				8	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ	A		○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2.5mの跡跡を含む。		
特00-61	30				7-14	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ	A	○	○	良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。 (ナコハの跡跡を複数回 り異なる。)		
特00-62	30				12	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-2mの跡跡を含む。		
特00-63	30				14	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-64	30				12	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。 (ナコハの跡跡を複数回 り異なる。)		
特00-65	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-66	30				14	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		
特00-67	30				7	[外 型] ヨコハケ [内 型] ナマメナダ				良	内・淡褐色 内・灰褐色	-1.5mの跡跡を含む。		

埴輪観察表7-3. 塚削り古墳周溝 一 朝顔形埴輪

発出番号・販売番号	番種	形	色	寸	メカニズム	ベンガリ	地	色	高さ	法.量(×)	備考
		コ.内	外	m	外	外	内	内	mm		
昭5-12	石	Hb	5	口縁部:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~2mmの砂粒を含む。		*水に浮かぶ。表面部分の下方の内壁をよく磨いていたり、手で削った痕がある。
昭5-45	石	Hb	1	口縁部:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を含む。 (口縁部の砂粒をわずかに含む。)		
昭5-44	石	Hb	5	口縁部:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を含む。		
昭5-45	石	Hb	13	口縁部:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ			研	白 内:灰白色	~1.5mmの砂粒を含む。		
昭5-46	石	Hb	5	外:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を含む。 (溝底部をわずかに削る。)		
昭5-47	石	Hb	7	ヨコナギ 口縁部:ヨコナギの後に、チ ガの取り付け位置にのみヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~2mmの砂粒を含む。 (横幅14.5cm)		
昭5-48	石	Hb	8	外:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~2mmの砂粒を含む。	口.径 34.4	
昭5-49	石	Hb	8-12	(外:ヨコナギの後はヨコナギ、下方は ヨコナギの後と、チガの取り付け 位置より下にはヨコナギ)		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を含む。 (内:ヨコナギの砂粒を含む。)	口.径 33.3	*表面に一列溝のチハ ナが部分的に残る。
昭5-50	石	Hb	4	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ) チガの取り付け位置にのみヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1.5mmの砂粒を含む。	口.径 33.0 横幅径 13.3	*表面にヘタ記号あり
昭5-51	石	Hb	1	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ) チガの取り付け位置にのみヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ 外:ヨコナギ 内:ヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色 内:灰白色	~3mmの砂粒を含む。	口.径 42.3 横幅径 13.3	*表面にヘタ記号あり 内:ヨコナギ
昭5-52	石	○	8	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ) チガの取り付け位置にのみヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を多く含む。		
昭5-53	石	○	8	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ)		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を多く含む。		
昭5-54	石	○	7	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ)		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を含む。 (内:ヨコナギの砂粒を含む。)		
昭5-55	石	○	8	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ)		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を含む。 (内:ヨコナギの砂粒を含む。)		
昭5-56	石	○	5	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ) チガの取り付け位置にのみヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を含む。 (内:ヨコナギの砂粒を含む。)		
昭5-57	石	○	7	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ) ハカの後にヨコナギ 内:ヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1.5mmの砂粒を含む。 (内:ヨコナギの砂粒を含む。)	横幅径 19.0	
昭5-58	石	○	15	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ)		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1mmの砂粒を多く含む。		
昭5-59	石	○	8	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ) チガの取り付け位置にのみヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~1.5mmの砂粒を多く含む。 (内:ヨコナギの砂粒を含む。)		
昭5-60	石	○	7	(外:ヨコナギ 内:ヨコナギ) チガの取り付け位置にのみヨコナギ		○	白	外:灰白色 内:灰白色	~2mmの砂粒を含む。		

船舶觀察表8 振廻り古墳周溝 - 形象埴輪

土器觀察表1. 土保山古墳・塚割り古墳

辨認番号	因数	形態	法量(cm)	調査	胎土	焼成	色調
第18-15	27	圓窓器 穴	高 9.8 口 径 4.9 体部最大径 12.0	体部は内外面ともに凹軸ナガ調整。口縁部に1条(10cmほど)の波状文を施す。体部の内に円孔を1つ穿ち、その上下に疣状を施し、その間に1条(10cmほど)の波状文を施す。	~3mmの砂粒を含む。	良好	内・深灰色 外・灰白色
第20-152	43	圓窓器 环形	高 9.2 口 径 12.3	表面は内外面ともに凹軸ナガ調整。その他は、凹軸ナガ調整。内側に1条(10cmほど)の波状文を施す。その上下に疣状を施し、その間に1条(10cmほど)の波状文を施す。	~1mmの砂粒を含む。	良好	内・深灰色 外・灰白色
第26-143	43	圓窓器 穴	高 6.5 口 径 1.2 体部最大径 11.1	体部は内外面ともに凹軸ナガ調整。体部内面の下方に指印えき。体部上面に円孔を穿ち、その上下に疣状を施し、その間に1条(10cmほど)の波状文を施す。	~0.5mmの砂粒を含む。	良好	内・深灰色 外・青灰色
第26-144	43	圓窓器 無蓋無耳	高 9.0 口 径 1.9	可窓部は内外面ともに凹軸ナガ調整。 内窓部の外側に内側の形状が内板の把手がつく。 脚部に欠損。	~0.5mmの砂粒を含む。	良好	内・暗青灰色 外・青灰色

土器觀察表2-1. 鶴鳴山古墳群A-1号墳石室

辨認番号	因数	形態	法量(cm)	調査	胎土	焼成	色調
第40-1	41	圓窓器 穴	高 4.0 口 径 15.0	天井部外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。大底部と口縁部の楕の縁は退化し、凹縮がある。口縁部外壁には、多めの向ての凹、対を施す。	~1.5mmの砂粒を含む。	良好	内・深灰色 外・灰白色
第40-2	44	圓窓器 穴	高 4.0 口 径 15.2	天井部外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。大底部と口縁部の楕の縁は退化し、凹縮がある。	~1mmの砂粒を含む。	やや軟質	内・暗青灰色 外・深灰色
第40-3	44	圓窓器 穴	高 2.9 口 径 15.4	口縁部は内外面ともに凹軸ナガ調整。天井部と口縁部の楕の縁は退化し、凹縮がある。	~2mmの砂粒を含む。	良好	内・暗青灰色 外・青灰色
第40-4	41	圓窓器 穴	高 4.2 口 径 11.9	天井部外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。その後、底盤内面に一定方向のナガ調整。	~1mmの砂粒を含む。	やや軟質	内・深灰色 外・深灰色
第40-5	41	圓窓器 穴	高 4.9 口 径 12.9 受 部 径 15.5	底盤外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。その後、底盤内面に一定方向のナガ調整。	~2.5mmの砂粒を多く含む。	良好	内・暗青灰色 外・灰白色
第40-6	44	圓窓器 穴	高 4.3 口 径 12.6 受 部 径 15.2	底盤外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。	~1.5mmの砂粒を含む。	良好	内・暗オーブ灰色 外・深灰色
第40-7	44	圓窓器 穴	高 4.3 口 径 13.5 受 部 径 15.5	底盤外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。	~1mmの砂粒を含む。	やや軟質	内・深灰色 外・灰白色
第40-8	44	圓窓器 穴	高 4.3 口 径 13.5 受 部 径 16.4	底盤外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。その後、底盤内面に一定方向のナガ調整。	~1mmの砂粒を含む。	良好	内・暗青灰色 外・深灰色
第40-9	44	圓窓器 穴	高 4.9 口 径 13.3 受 部 径 15.2	底盤外壁は、3/4回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。調整は全体的に弛緩。	~1mmの砂粒を多く含む。	やや軟質	内・暗青灰色 外・青灰色
第40-10	44	圓窓器 穴	高 3.7 口 径 12.8	底盤外壁は、凹軸ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。	~0.5mmの砂粒を含む。	良好	内・暗オーブ灰色 外・深灰色
第40-11	44	圓窓器 無蓋無耳	高 12.3 口 径 10.9 受 部 径 3.5 周 部 高 10.0 周 部 幅 8.3	底盤外壁は、凹軸ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。その後、底盤内面にナガ調整。 口縁部と底盤部の外縁の楕の縁をもつ。底盤外壁のとから13cmほどこのところに2本の疣状を施す。	~1mmの砂粒を含む。	良好	内・暗青灰色 外・青灰色
第40-12	44	圓窓器 但窓器	高 9.0 口 径 11.0 体部最大径 11.0	体部外壁は、1/2回転ヘラケズリ調整。その他は、凹軸ナガ調整。	~1mmの砂粒を含む。	良好	内・暗青灰色 外・暗青灰色～ 暗青灰色
第40-13	45	土師器 空	高 6.1	外壁に、ハナ調整の後にヘタミガキを施している。内面は、弱め方向へ斜射状の線文を施す。	~1.5mmの砂粒を含む。	良好	内・深赤褐色 外・暗赤褐色 外・深赤褐色
第40-14	45	土師器 空	高 9.7 口 径 9.7 体部最大径 12.6	内面と外側ともにナガ調整。	~2.5mmの砂粒を含む。	良好	内・深赤褐色 外・暗赤褐色
第40-15	45	圓窓器 横取	高 16.4 口 径 4.2 体部最大径 13.3 体部最大厚 8.0	口縁部は内外面ともにナガ調整。体部前面、背面に凹軸ナガ調整。 外壁の内面に角状の把手がつく。口縁部にヘタ記号を施す。	~1.5mmの砂粒を多く含む。	良好	外・暗赤褐色

土器観察表2-2. 開鶴山古墳群A-1号墳石室

井田番号	因 反	種 類	法 量 (cm)	調 査	動 上	続 成	色 調
図40-16	45	須恵器 广口壺	器 高 25.0 口 径 16.5 底 径 9.9 体部最大径 18.3	体部外側に格子状タッキの後に、下部約1/3に円柱ナゲ調査。 口部内面から口部外側にかけては、内外面ともに口部ナゲ調査であるが、 口部外側の上部に口部ナゲ調査を行わなかった。 体部内面は円弧状タッキの外にナゲ調査。 口部外側を3等分するように2~4等分の浅縫が走り、その上段と 中段にそれぞれ1本(15cmほど)の縦状文を施す。	~1mmの砂粒を含む。	良好	内・深オリーブ色 外・黒色
図40-17	45	須恵器 台付壺	器 高 29.0 口 径 10.8 底 径 7.0 体部最大径 16.7 脚部外径 5.3 脚部内径 15.0 脚 高 7.3	体部外側は、1/3周軸へラケズリ調査。その他は円柱ナゲ調査。 体部外側の上から1/3ほどとのところに2本の浅縫が走る。脚部に2 方向の方形のスカシ孔を穿ち、その下に1本の横縫が走る。	~1.5mmの砂粒を含む。	良好	内・深褐色 外・深褐色 ~青灰色
図40-18	45	須恵器 台付壺	器 高 22.0 口 径 11.6 底 径 7.0 体部最大径 16.3 脚部外径 6.1 脚部内径 12.6 脚 高 5.2	口部外側は圓柱ナゲ調査。その他は、圓柱ナゲ調査。 口部外側の上から1/3ほどとのところに4本の横縫を走らし、口部 部の内側に縦状文を施す。肩部と体部の内側に斜状文を施し、 その上下に横縫を施す。脚部に3方向の方形のカレ孔を穿って いる。	~1mmの砂粒を多く含む。 (5cmほどの砂粒をわずかに含む。)	良好	内・青灰色 外・深青灰色 ~青灰色
図40-19	45	須恵器 台付壺	器 高 21.0 口 径 6.5 底 径 5.6 体部最大径 18.4 脚部外径 5.5 脚部内径 10.2 脚 高 4.5	体部外側は下子を四輪へラケズリ調査。その他は圓柱ナゲ調査。 口部外側の中心に2本の横縫を施す。体部外側の中位に点列文を 施し、その上方に2本の浅縫を、その下方に1本の横縫を施す。 脚部に3方向の方形のスカシ孔を穿ち、その下方に横縫が走る。	~1mmの砂粒を含む。 (5cmほどの砂粒をわずかに含む。)	良好	内・灰白色 外・灰白色

土器観察表3. 上塙、土器柄、溝

井田番号	因 反	種 類	法 量 (cm)	調 査	動 上	続 成	色 調
図42-1	46	土師器 壺	表 高 7.2	摩耗のため調査は不規。	~3mmの砂粒を含む。	中中軟質	内・浅黄褐色 外・浅黄褐色
図43-2	46	土師器 壺	表 高 25.0 口 径 21.9 体部最大径 28.6	口部外側はナゲ調査。体部外側は裏方角のハケ調査。 内側は割め方角のハケ調査。その後にナゲ調査。 (ハケの単位、3本/1回)	~1.5mmの砂粒を含む。	良好	内・深褐色 外・深黄褐色
図45-3	46	土師器 壺	器 高 28.2 口 径 28.4	口部外側はココナガ調査。体部外側は、能力角のハケ調査。 口部外側は割め方角のハケ調査。その後にナゲ調査。 (ハケの単位、3~6本/1回)	~2mmの砂粒を含む。	良好	内・深黄褐色 外・深褐色
図46-4	46	瓦器 線	表 高 1.2 底 径 3.0 高 口 高 0.5	摩耗のため調査は不明。	~1mmの砂粒をわずかに含む。	良好	内・灰白色 外・灰色

# 図 版



土保山古墳  
(第2調査地区)



全景1  
(北東から)



全景2  
(南西から)

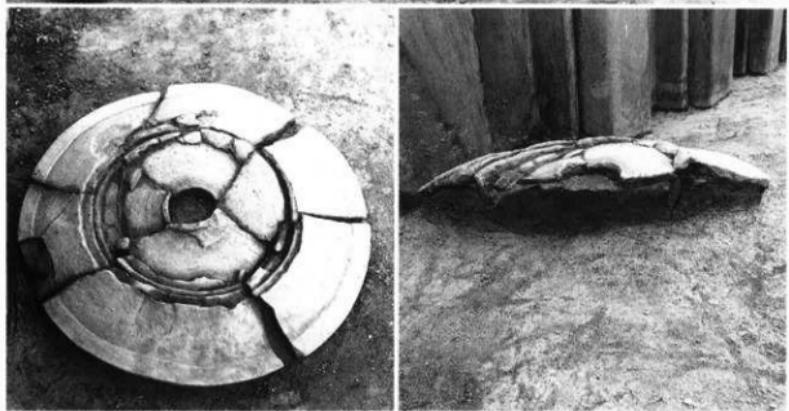
土保山古墳  
(第2調査地区)  
周濠



完掘状況 1  
(南西から)



完掘状況 2  
(南西から)



蓋形埴輪の出土状況  
(南西から)

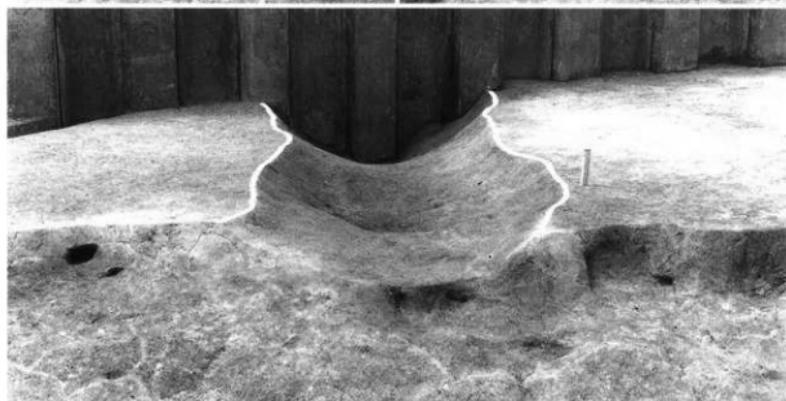
土保山古墳  
(第2調査地区)



左 周濠の完掘状況の  
近景  
(東から)  
右 区画溝の完掘状況  
(南から)



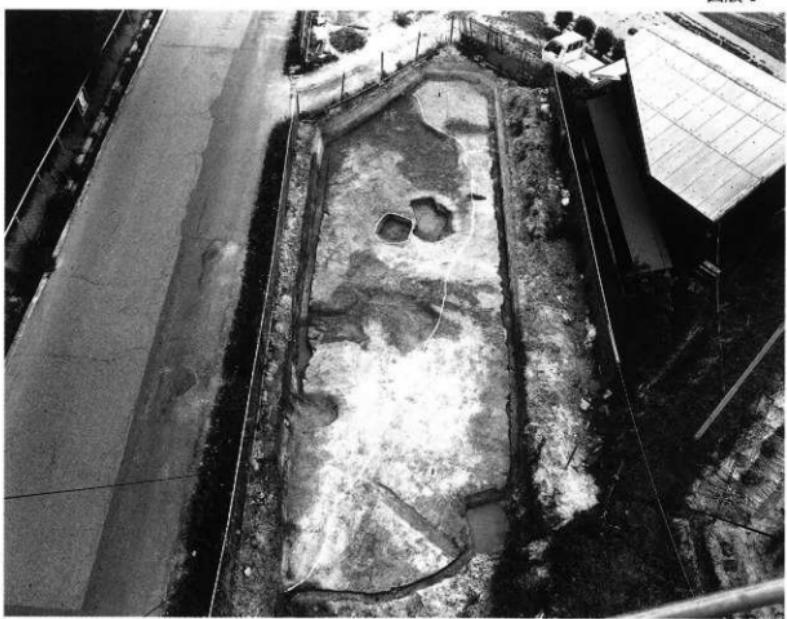
区画溝の完掘状況の  
近景  
(南から)



区画溝の断面  
(南から)



土保山古墳  
(第 6-E・F  
調査地区)



第 6-E 調査地区の  
全景  
(南東から)



第 6-F 調査地区の  
全景  
(南西から)

土保山古墳  
(第9・10調査地区)



全景1  
(北東から)



全景2  
(南西から)

土保山古墳  
(第6-F調査地区)

左 区画溝の  
遺物の出土状況 1  
(東から)  
右 区画溝の  
遺物の出土状況 2  
(西から)



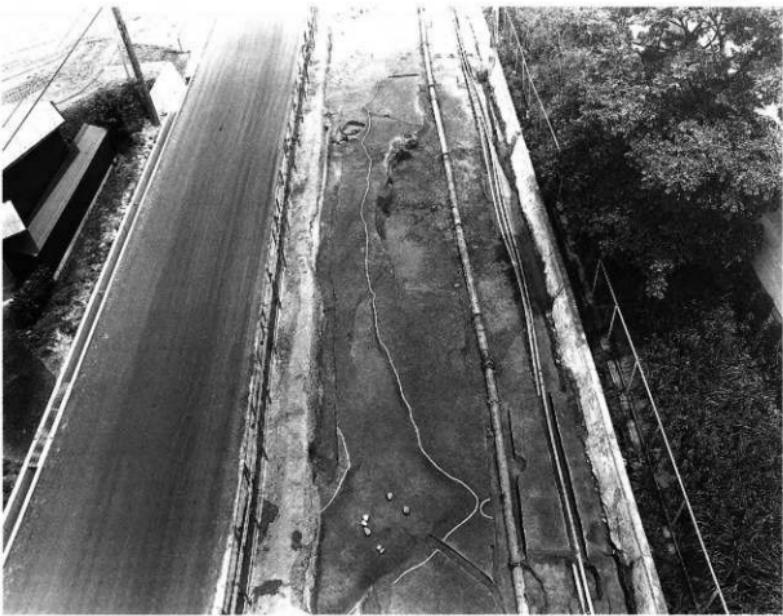
左 区画溝の  
遺物出土状況 3  
(南から)  
右 区画溝の  
遺物出土状況 4  
(北から)



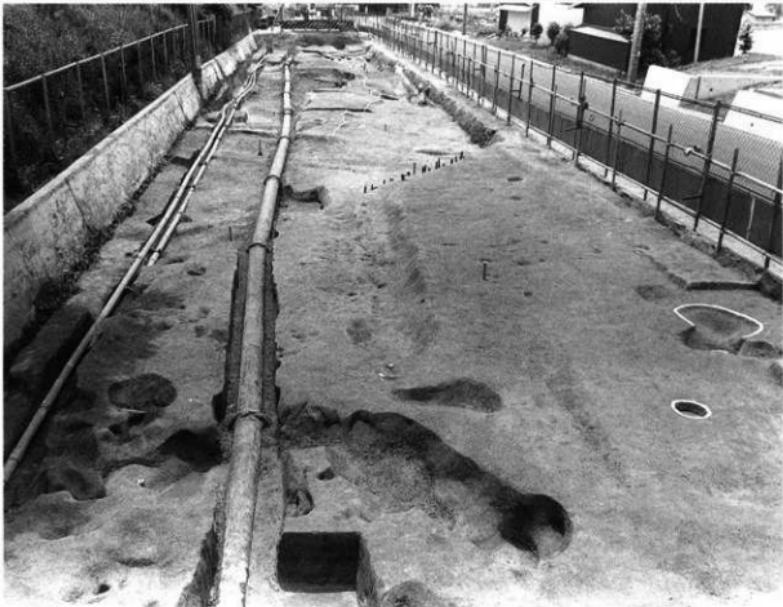
左 区画溝の  
遺物出土状況 5  
(西から)  
右 区画溝の完掘状況  
(東から)



土保山古墳  
(第9調査地区)

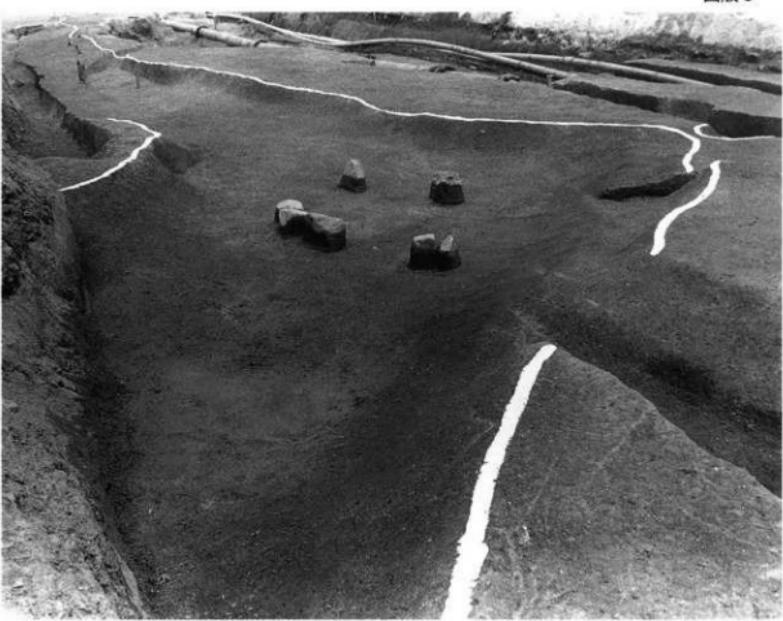


区画溝の全景 1  
(北西から)

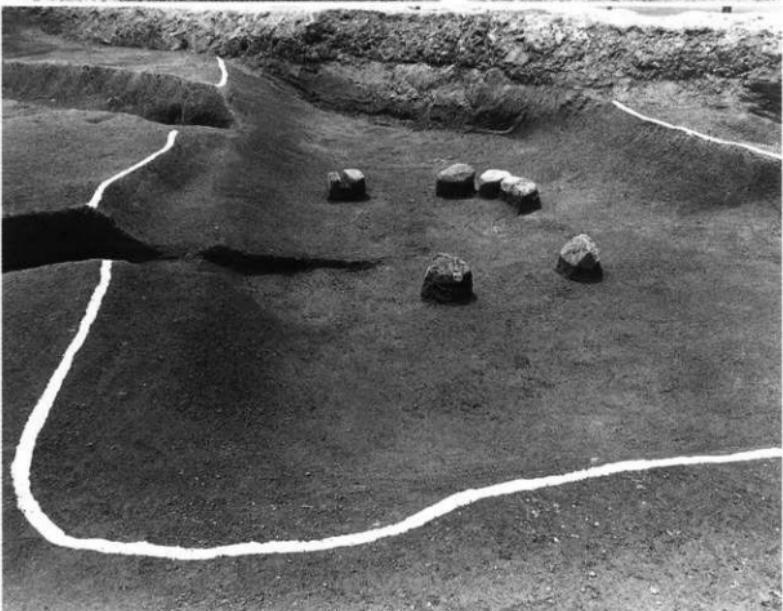


区画溝の全景 2  
(東から)

土保山古墳  
(第9調査地区)



区画溝のくびれ部1  
(西から)



区画溝のくびれ部2  
(北から)

二子山古墳  
(第 8-A 調査地区)  
周濠



全景 1  
(南から)



全景 2  
(西から)